
異世界英雄物語

黒崎 達哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界英雄物語

【Nコード】

N8917V

【作者名】

黒崎 達哉

【あらすじ】

避けられていた幼馴染を助け、派手にトラックにはねられた高校一年生の志波大和。

彼は、特別であるが故に避けられていた。

昇天したと思いきや、神様に言われた言葉は

「お前を異世界に送り出す。」

人に避けられ、自分自身も人を避ける事しかできなくなっていた大和が、その世界で初めて、自分の事を認めてくれる存在と出会い、笑い、傷つき、頑張る事が出来る様になる物語。

異世界物＋主人公最強です。特別な主人公が、繰り広げる異世界での英雄伝を暇潰しにご覧下さい。

プロローグ（前書き）

修正しました（＾－＾）

読みやすくなっていると幸いなんですけど…。

プロローグ

俺は悪いが、生きて行く上で、言っておきたい事がある。

それは人間には、特別な奴らがいるって事だ。

普通人間は、より多くが集まる自分たちの枠からはみ出た物をよく思わない。例えば、あいつは世間的にオタクと呼ばれるものだとか、あいつは、オカルトマニアでネジが少々飛んでるとか、ニユースで見たあいつは、殺人大好きの狂气的思考を持ってるとか、同じ学年のあいつは、運動神経がいいとか…。

そんな具体的なモノでなくても、得た事のある、小さな“特別”。

それには良いものも悪いものもあるのかもしれない。

それを得た自分の運命を呪うのかもしれない。

“普通”という、数多くの人間が納まる枠に、自らも身を投じたと思うのかもしれない。

でも、俺は思うんだ。

確かに、“普通”は無難で、長持ちで、批判されない。

でも裏を返せばそれは、溢れていて、褒められず、他の奴等と一緒にの生き様ってこと。

よく言えば、批判されない。

悪く言えば量産型ってことだろ？他の大半の奴等と同じなんだから……。

どうせなら、ありふれた“普通”より、一握りの“特別”になりたいと思わないか？

一年に六千万が死に、一億三千万が産声をあげる、この六十九億六千万の中で。

ゴールは死という思考の切断である、このマラソンを先頭ぶつちぎって疾走し、誰の目にもくれず個人のやり方でゴールテープを引きちぎる。

なんなら、飛び越えてみてもいい。

随分長くなっちまったが、とにかく、俺はこう言いたいわけだ。

“普通”も別に悪くはないという事。

だけど、嫌われ、疎まれ、けなされ、傷つけられる。

そんな超難関の“特別”マラソン。

素質を持ち、それを、無事駆け抜けられたランナーは、ゴールの瞬間必ず“普通”よりも気持ちのよく、綺麗で、爽快な光を浴びれるんじゃないかな……。

六年二組：志波大和

「ここは、何処だ？」

俺が今立っている場所は、空としかいいようがない場所だ。辺りには雲が漂っており、周囲は青で塗り固められている。陽の光は雲を貫通し降り注ぎ、ありえないほど気持ちがいい。

「ここは、俺の所有空間だ。空ではない。」

（誰だ？）

声の主を確かめるために、俺は後ろを振り向く。

そこに立っていたのは、金髪の男だった。長身痩躯の体に整った美形と呼べる顔。鮮やかな金髪の髪にはウェーブがかかっており、どこか、神々しさを感じさせる。

男は、碧眼をこちらに向けて言う。

向けられた視線は鋭く、僅かながら俺の体は硬直した。

「俺は、現最高神ガリバ。地球と他の異世界五つの生命の管理をさ

せてもらっている。」

は？

「あんた神様なの？」

「ああ、正真正銘のな。」

「……ちょっと待て、じゃあここは神界とか言っちゃう感じの場所なのか？」

「微妙に違うが、そうとも言える。」

「……なんで俺はここにいの？」
俺は分かっていたが、ちよつとの期待を残し、尋ねる。

「変なこと聞くな？決まってるんだろ。」

ガリバはなんでもない風に言う。

「お前が死んだからだよ。」

時は、遡る。

。 。 。

志波大和^{しはやまと}だ。

都内の公立高校に通う俺は、学校が自宅からそこまで遠くないので、基本朝はのんびりである。

「今日も学校かゝ、めんどくせ。」

俺は、テレビのリモコンを操作しながら独り言を言う。

「なんかおもしれー事おきてないかな。」

母親は父親と同じ会社で働いているため、両親ともにめったに家にいない。

なので普段は妹と朝を過ごすのだが、今日は部活で早く出た。

突然だが、俺には友達はもちろん、彼女と呼べるものもない。それは、俺がぞくに普通じゃないからなのかもしれない。

小学生のうちに、中高の理数系は理解し、高校生になった今では、六ヶ国語をしゃべることができる。
成績は常にトップ。模擬試験では全国一位をとり、進学不可高校は一つも出はしなかった。

オール5をとることなんて、グラウンドキャニオンからバンジーや

るよりも楽しいことだ。

俺は、高いところがあんま好きじゃないんだよ。

周りも大人になっていくごとに、俺の異常性に気づいたのだろう。周りの大人たちは、口々に俺を異常な子と言った…。

まあ、俺が子供らしくなかった事も関係したのかもしれない。

真実は気味の悪い噂になり、俺から人を遠ざけた。

俺は、苦い思い出をかみ殺し、無心を気取る。

「そろそろ時間だな。」

俺は、誰もいない家に行ってきますと言い、玄関で靴を鳴らし家を出る。

。 。 。

俺の家から学校までは、玄関から出て、右に行くとある丁自路をまた右に曲がり、ずっと行くと出る大通りを渡りすこし歩くというものだ。

三分ほど歩いて丁自路を曲がったところで知った顔が、前を歩いているのを見付ける。

幼馴染の江口愛美だ。
えぐちまなみ

黒髪のポニーテールを揺らしながら、眠そうな顔で歩いている。容姿は整っており、美少女に分類されるだろう。

幼馴染と言っても、中学時代俺から離れていった内の一人だ。馴染と呼べるモノか…

それにあの時は、泣いた。かなり泣きはらした。

愛美は、俺の初恋であり、大切な人だったから……

でも今では、キッパリと俺も諦めた。結局俺は一人なんだと。

孤独に生きて行くんだと。

それでも何か諦め切れない俺は、家から近いから、という名目で普通の公立高校に入学したのだが。

道も終わり大通りが見えてくる。

信号が青になったので、俺も早足で大通りに向かう。

俺と愛美の距離も短くなる。

俺は、横をスルーしていくつもりである。

徐々に足が疲れを訴えてくる。

そして愛美が信号を渡っていると、一台のトラックが信号を無視しているのが分かる。

「えっ？」

愛美が声を出す。トラックに気づいたのだろう。

あれ死ぬんじゃない？

ハハ、ドンマイ。

俺には関係ないし…まあ、来世では幸せになってください。

俺は自分を無理矢理納得させようとする。

だけど、俺の足は止まらない。止まってくれない。

むしろ、脳はもつと速くと急かしている風に思える。

「ひっ？」

愛美は小さく悲鳴をあげる。

（なんでだよ！俺から離れたんだろ？俺の人生に関わってきてんじやねーよ！）

俺は、心の中で叫ぶ。

目前に愛美が迫る。俺は全身全霊の力で愛美を押す。後先の事など考えなかった。

ただ、助けたかった……。

俺によつて突き飛ばされた愛美の体は、信号機のボタンの手前まで転がって行く。

「キャッ！」

ちょっと強すぎたかな。そう思う間もなくボガッ！という鈍い音がする。内臓を直接殴られたかのような酷い鳴咽感。フッと体が軽くなったと思い、俺は薄目を開ける。すると、トラックと愛美と信号と…。

（ああ、俺…飛んでんのか…？）

（高いとこ…苦手な…のにな。）

一秒後、ベシヤ！という音がして何かが地面に叩きつけられる。

「えっ？助かったの？」

愛美は地面に横たわる物体を見付ける。

トラックはタイヤの黒線をアスファルトに描きながら、10m程行ったところで停止している。

「えっ？何？」

愛美は近づく。単なる好奇心程度の感情。

近付いていくうちに、見えてくる知っている顔。初恋であり、裏切ってしまった人の顔。

「あ、え？やま…と？何で？嘘…？」

その人は頭からは血を流し、体のあちこちに、ガラスは突き刺さり、左足はあらぬ方向に曲がっていた。

愛美はまだパニックった状態で大和に、フラフラした足取りで近づく。

「なん…で。」

愛美はまだ状況を把握していなかった。

頭がこんがらがり意識がハッキリとしない。

そんな愛美に大和が声をかける。

「あんま…心配…かけてくれんなよ…？」

それは、2人が仲よかった時、よく大和が言っていた言葉。

転んで怪我した時や、物を無くしてしまった時、愚痴を言いながらも手伝ってくれた。

大和は二ヘラと笑うとすぐにその表情を変えた：

少し遠くを見つめるような目をした後、大和はかるうじて開けていた薄目を閉じる。

その時、やっと愛美は理解した。

「あああ…いやあああああああ？」

涙が溢れてくる。大和が自分を助けたのだと。そのためにこんな姿に成ったのを。そう理解した瞬間頭が真っ白になり、上手く呼吸が出来なくなる。変わり果てた大和に抱きつき、縋るように泣く。肌につく血液が悲しみを加速させる。

「うぐっひくっ死なっないでよおっやまとお」

「あたしがっ悪かったか…らあまた、ずっと…一緒にいてよお」

瀕死の大和が最後に聞いたのは、耳の遠くから鳴り響く、救急車のサイレンの音だった。

。 。 。

「まあ、理解出来ねーだろーがな。内臓破裂に背部裂傷やら何やら……。流石に死んじまったな。」

ガリバは言う。

「まあ、他人の運命を捻じ曲げてだけだよ。」

「どういう意味だ？」

「言った通りだ。江口愛美（16）はあそこで死ぬはずだった。トラックにそりや綺麗に跳ねられてな。死亡原因は……言わなくていいか。でもそこにはお前という、イレギュラーが存在した。」

「イレギュラー？」

「学んでない事は分らん。もうちょっと分かりやすく説明して欲しい。」

「ああ、生命の管理を仕事とする俺が、死に時を間違えるはずがない。ってんでお前という強い存在が自分の寿命を江口愛美にたくしたんだ。まあ、そんな事を出来る人間も限られてるけどな。」

「ふん。」

「何だ？全く興味なさそうだな？」

「まあ、言っちゃなんだが、つまらない人生だったし……死んでも生きてても俺に意味なんかなかったと思うしな……。」

「ああ、お前あのまま生きてれば神にもなれてたかもしれないんだぜ？」

「えっ？……俺がつスか？」

「そう、お前が。神々の間でも噂になってたんだ。クロノスを超える時空神になるかもってな。その理由はお前が将来、科学者になって相対性理論を覆すナノ粒子別離加速装置を……って、まあ、もうなれねーんだからいいか。」

マジかよ。

「あれ、じゃあ何でここに連れてこられたんだ？俺以外に誰もいないって事は、普通に死んだ奴がくる場所じゃないんだろ？」

わざわざ死んだ事実を突きつけ、絶望顔を楽しむようなプレイではないはずだ。

そう信じたい…

「まあな。お前には異世界に行ってもらおうと思つてよ。」

「え？何で？」

意味わかんねー

「地球で殺すには惜しいからさ。言つたろ？お前は神になれたかもしれない器だつてな。だから、神々で決めて、お前を異世界に送りだす事になった。感謝しろよ？地球ではもう死んじまったからな。まあ、俺らの勝手な判断だ。行くか行かないかはお前が決める。」

俺はやっぱり特別な存在だったのか。

「愛美はどうなるんだ？」

「普通にお前の寿命の分の時間を消化するだけだな。」

確かに嫌な人生だった。死んでもいいって思ってた。でもやりなおせんなら…。

「行くよ。」

「異世界にいつてやるよ。」

俺は言った。

「よく言った。じゃあ今から異世界で生きるための能力を付加する。そうだな…新しく行く世界は魔法が発達してるからな。肉体強化と魔力増量に、あとは特殊スキルもつけとくかな。ランクは5と…。あとは、これとこれもか。」

神がメモ帳を見ながら言っている。

「よし、いっちょやるか。大和ちよつとこっち来い。」

俺は言われるがままに近づく。

神が何かを言って俺にメモ帳を破いて渡す。

…どうしろと？

「丸めて飲め。」

俺は言われた通りに、グシャグシャと紙を丸めて飲みこむ。

吐きそうになるのを我慢して喉を通過させると、何か暖かさが体全体に広がるのがわかった。

「ようし、お前が行くのはガンマインという、世界だ。せいぜい頑張れ。」

そう言って神は、腕を軽く振る。

俺の横に扉が出てきた。俺はそれを開け、中に入る。

「あつ、そうそう、言っておく事があるわ。」

神が俺の目を見て言う。

少し遅いが、神のくせにチャラチャラした奴だと思った。

「お前は確かにあの子の特別だったぜ？」

「そりゃどうも！」

俺は勢いよく扉の中に入っていく。あんなお節介ができる神も中々いないと思った。

一人しかいなくなった空間で神は、ここにいない少年に向けて独り言を呟く。

「頑張れよ、大和。」

プロローグ（後書き）

随分長くなっちゃいました（ー；）

初の異世界ものなんですけど、上手く書けません。

まあ、完結はさせたいと思っているのでよろしく願いますm

ー）m

第一話グリズリーと美女

「は？」

俺は神域で神に力をもらったあと、異世界に行くため扉を開いた。そこまではいい。問題は今の状況だ。扉の先にあった風景。地上1km地点。

「うおおおおあああー！」

超高速で落下する俺。なかなかイケてる？
ってそうじゃなくて！

（ヤバイ！こんな速度で落下したら絶対愉快的な肉片になる！それこそトラックなんか目じゃねーよ？）

俺は自分の想像に寒気がした。

（いや、落ち着け俺！俺は天才だ？考えろ！考えろ…考え…ろ。何を？空中からの高速落下の対策なんか考えられつかよ！てか天才とかこの際関係ねーだろ？）

俺が一人で考えていると、下になっていた頭が急に上がる。

（浮いてる？……なるほど神か。）

俺はガリバがやったんだと思った。

（フハハ、高さなんぞ恐るるに足らんな！）

地面が近い、あと10m程だろう。とか思ってたらいきなり浮遊感が無くなった。

「うわっ？」

バキバキと盛大に木の枝を折りながら落ちる。

「最後まで面倒見ろや！」

別に痛くなかったのだが、声を張り上げ言う。

落ちた俺は辺りを見回す。木々が連なっているところを見ると、森か林だろう。俺は辺りを散策してみることにした。

「ん？何か音が…。」

近くで音がする。身体能力強化で聴覚が発達している俺は何かを聞き取った。

ウウオーン

（獣の声？）

好奇心で、俺は声のする方に歩いて行く。

そして近づくにつれ、人の声も聞こえることに気づく。

人がいる事に気づき走り出す俺。

（まずこの世界の事について教えてもらおう。）

そう思った俺は一直線に声のする場所に向かう。

着いたのは走って40秒の場所だった。着いた俺は木の陰から様子を窺う。

まず目に入るのはでっかい熊。周辺の木々はなぎ倒され、刻まれている爪痕からそいつの猛々しさが伺える。

（なんか全然怖くねーな？）

俺はおかしいなと首を捻る。

そして、人はどこかと視線を巡らす。すると確かにいる。熊と対峙しており、何かを言っている。

「あたしはあんたなんかに殺されない！」

そう言いながらも肩を震わしている。どうやら女性の様だ。熊は言葉の意味が分かったのか、腕を振り上げた。

女性は覚悟を決めたのか目を瞑る。

俺はそっぴや腹が減ったなと思った。

（……今のなしで……貴重な情報源！死なせはせんよ！）

俺は高速で移動し女と熊の間に立つ。熊の手が襲いかかってくる。

俺はそれを片手で止め、ただ握る。

熊は突然俺が現れた事と、自分の攻撃を簡単に止められた事に驚き、バックステップしようとしたが俺が握っているので離れない。

俺は後ろを振り向き女の顔を見る。鮮やかな水色の髪は腰あたりまでのばしており、顔はこの世のものとは思えない程整いきっていた。

（おっおお…。）

思わず凝視してしまった。気恥ずかしさを紛らわすように、俺は驚愕に染められた女の顔を見て言った。

「美人さん、こいつって食べる？」

とにかく腹が減ってたんで……。

「えっ？え、ええ一応食べれるわ。」

美人さんは親切に教えてくれた。そして喰えることを知った俺は早速この熊をぶっ殺してやることにする。

再度放たれた爪アタックをよけ、顎を蹴り上げる。サッカーボールのように愉快に飛んで行く熊をジャンプで追い越し、かかと落としを食らわしてやる。

派手な音を立て、地面にクレーターを作った熊の上に降りる。

見てみるともう死んでいるようだ。俺が熊に近づきどう調理しよう

うか考えていると。

「ねえ。」

そこで美人さんが話しかけてきた。

俺は体のむきを変え美人さんと対面する。

「何？」

「助けてくれてありがとう。あたしの名前はシャリウエル、シャリウエル・ローズ・アルガータ。よかったら名前を教えてください。」

「志波大和だ……。ヤマトでいい。よろしくなシャル。」

「ヤマトって不思議な名前ね。それとシャル？」

「ああ、ただの愛称だ。」

「ふん。シャルね。うんいいわ、よろしくヤマト。」

俺たちは握手をかわす。

「ところでシャル。これって生でいけんの？」
「は？」

森にシャルの疑惑の返答が木霊した……。

第一話グリスリーと美女（後書き）

く（-。-；

思ったより難しいです（^。^）

まだ未熟ですが出来るだけ読みやすいようにしたいと思っています
んで引き続きよろしくお願いしますm（- -）m

第二話 シャリウエル視点（前書き）

お気に入り登録をして下さった方、評価をしていただいた方々ありがとうございます。

文才はないですが出来るだけおもしろく、読みやすくしようと思いますので、よろしく願いしますm（|）（|）m

第二話シャリウエル視点

“シャリウエル視点”

「水をこの手に。アクアストーム！」

コルンの森で危険指定されているグリズリーマザー。その体を水が包み渦を巻きながら上昇する。

5 m程上がった所で水が弾け、辺りに水が飛び散る。

「やった？」

そう思ったのもつかの間。グリズリーマザーが雄叫びをあげながら襲いかかってくる。突進をかるうじてよけたあたしは、グリズリーマザーの後ろに回り込む。

「ハアハア。」

勝てないと悟った。今現在シャリウエルはとある事情で魔力濃度が薄まっており、そのせいで魔法に威力が出ないのだ。

魔力濃度とは魔素の濃さであり、濃ければ濃いほど魔力の性能が上がるというものである。

あたしは後ろに回り込んでも動くことが出来なかった。魔力と体力の限界である。

ただどあたしは振り向いたグリズリーマザーに言う。

「あたしはあんたなんかに殺されない！」

グリズリーマザーの目があたしを捉える。四肢が硬直する。頭が冷えて吐き気がする。勝手に体が震える。

そしてグリズリーマザーが手を振り上げた。

「つつ！」

目を閉じる。

……何秒経つてもいっこうに衝撃はこない。おかしいと思い目をあけてみると。

黒髪黒目の青年が立っていた。顔立ちは整っており、男にしては長い髪もあいまってクールな印象をうけた。グリズリーマザーの攻撃を片手で止めており、顔をこちらに向けている。その異様な光景に息を呑む。

だが、青年が発した言葉はあたしの予想の遥か斜め下をいった。

「美人さん、こいつって喰える？」

喰えるって…グリズリーのこと？

「え？え、ええ一応食べれるわ。」

てか食べんの？

あたしが混乱していると、瞬く間にグリズリーは沈められてしまった。強い……。

青年は倒したグリズリーに近づき品定めをしているようだ。

あたしは助けてもらったお礼を言おうと彼に近づいていった。彼ならあたしの力になってくれるかもと、淡い期待を抱いて…。

第二話シャリウエル視点（後書き）

第一話でシャリウエルの心情が分かりにくかったかなと思いましたので、書いてみました、シャリウエル視点です。

一応後への布石も作っておいたので、ちゃんと読者さんが読みやすいように工夫していけたらなと思っています（^^；；；

第三話 森に来た理由

俺はあの後、熊肉を焼いて食べた。因みにシャルが魔法で焼いてくれた。

俺はまだ魔法の使い方を知らず、シャルには事情があつて今は使えないということにした。異世界人と言っても理解されなさそうだからだ。

そして、満腹になつた今、シャルと対面し、話を聞いている。

「つてことで、この森は今、安全とは言えない状況なの。」

シャルがいうには、この森はつい最近までは安全で、魔物もそこまで凶暴ではなかったらしい。グリズリーも他と比べると好戦的だが、みさかいなく襲うというのはないようだ。因みにさっきの魔物はグリズリーの長のようなもので、グリズリーより力が強く魔法に対する抵抗が通常より、高いらしい。

「ちょっと待て、じゃあ何でお前ここにいるんだ？森の状況も知つてて、危険だと分かつてたんだろ？」

「そ、それは……。」

「話したくないなら仕方ないけど、悪いようにはしないぜ？」

そう言つて微笑む。これは安心させる為だ。何かは分からないが

シャルには、この森にくるための理由があつたのだろう。それこそ、自分の命をかけるくらい大切な。口ぶりからすると、この世界では身分は高そうだし、仲良くなっていて損はないだろう。

シャルは顔を僅かに赤くしながらいった。

「まあ、話そうと思ってたんだけどね。あたしは貴族なの。侯爵家の娘。」

「侯爵って第二位の？」

「そうだけど？」

どうやら爵位は一般的なもので、日本華族などと同じものようだ。

「まあ。それで17歳にもなったし、婚約相手がいたあたしは結婚をしろって言われたわけ。あたしは結婚とかまだ早いと思ってたし、何より、婚約相手のことあんまり好きじゃなくてね…。」

シャルは目をそらしながら言う。

「あたしは世界中を見て回りたいの。この世界にはまだ、あたしの知らない場所や、知らないことが、いっぱいあるはずだから。そのためには、まだ結婚なんてしたくないし、するわけにはいかない。…そういった事を親にも言っただけだね。」

「ふん。それで？」

「条件を出してきたの…。このコルンの森の泉にある、クリスタル

をとって来いってね。そしたら一人前になったってことで結婚はまだしないでいいって…。多分、森の変化もあって、あたしが行かないと思ったんでしょ。」

「なるほどね。……それって一人でとってこいって言われたの?」

「いや、別に言われてないと思うんだけど。今の森が危険って事はみんな知ってるからね。ついてくる人なんていないのよ。」

なるほど。

「俺と一緒に行ってやろうか?」

「え?ほんと?…いや、いいわ。あぶないもの。」

「お前も危ないんだろ?正直放っておけねーよ。」

「でも…。」

「じゃあこういうのはどうだ?俺がついて行ってやるかわりに、俺の質問に3つ…いや5つ、何も聞かずに答えてくれ。」

「質問…スリーサイズとか?」

「それも聞きたいが違う。…まあ、聞くのはお前についてじゃないから安心しろ。」

もちろん、この世界についてだ。いくら地球じゃ天才だとか呼ばれていたとしても、この世界については何も知らない。常識知らずだ。

「まあ、あたしとしては願ってもない提案だけど…本当にいいの？」

「ああ、女の子を一人で危険な目に合わせられないだろう？」

ちよつとキザだったかな…。

「そう…ありがと、ヤマト。」

シャルは顔を赤くして言う。

可愛いすぎ！

なんだか俺まで恥ずかしくなってきたので、目をそらしながら言う。

「それで泉ってどこにあんだ？」

「ああ、ここから半日ぐらい歩いた所よ。」

………一つ言わせてもらおう。

「遠すぎだろ……。」

俺の呟きはどうかやらシャルには聞こえなかったようだ。

第四話 結晶の泉

シャルと俺はあれから少し歩いたあと、野宿をする事になった。因みに晩飯はグリズリーを食べた。意外に美味しいのだ。

この世界でいう、マキのような物を燃やし、焚き火を起こす。雑談をしていたのだが、シャルは疲れていたのか、すぐに眠ってしまった。

「ふゝ、それにしても本当に異世界なんかに来ちまうとは……。」

（俺はこれから何をして生きていけばいいんだろ……。）

そんな事を考えていた俺は、ある事を思い出した。神にももらった力の事だ。

あのメモ帳が体内にあるからか、わかる事がある。身体能力強化。

これは頭の中でスイッチのON、OFFのようなものが出来るらしい……。基本的に戦闘状態になると勝手にONになるらしいのだが、努力すればストッパーのようなものを身につけることも、可能だという。

あと多大な量の魔力と、魔力濃度の高さ……。なぜか魔法の使い方が分かるというオマケ付き。

この世界で魔法というものは一般的に使われているものらしい。

他にも、3つ貰ったらしいのだが、その内の2つはまだ使えない、

努力しろということだろう…。

3つの特殊能力の内唯一現在、使う事が出来るのは一つだ。

ふう、と息をついた俺はシャル同様寝ることにした。シャルが探知型のバリアを張ったと言っていたので多分大丈夫だろう。

それに、魔物に寝てるところを襲われてもシャルはともかく、俺は死ぬ気がしない……。

「なんだか俺が俺じゃないみたいだな……。」

俺は、独り言をぼやき目を閉じた。

。 。 。

翌朝起きた俺は、まだ寝ているシャルを起こさないよう、魔法の練習を試みる事にした。

俺が知る限りでは、魔法の発動しかたは3つある。

まずは、初歩である詠唱魔法。これは魔法によって定められた言葉と魔力を使い、魔法を発動するというものだ。

次に陣魔法。事前にセットした魔方陣や、魔法文字に魔力を込めておき、術者が魔力を大小送り込んだりする事で、魔法発動。

最後に詠唱破棄。これはいわゆる、感情の爆発や、生命的な危機

で発動したり、熟練者は使えたりなど、あまり知られていない。

俺は枝を指で指す。

「エア―。」

無数の空気の刃が枝を切り裂く。

「初級魔法でここまで危険なのか……。当面は肉弾戦でいくかな…。」

その後も初級魔法など、さほど破壊力がないものを練習した。

もといた場所に帰ると、起きていたシャルが、櫛で髪を整えながらこちらを睨んできた。

「どこ行つてたのよ…。」

なんか怒ってるっぽい。

「ちよつと散歩をな…。」

「見捨てられたかと思つたわ…。少しくらい声をかけてもいいんじゃない?」

「悪いな…でも気持ちよさそうに寝てたからさ。」

そう言つと、シャルは拗ねたような顔になり話し始める。

「しょうがないから許すわ。次からちゃんと声をかけるように。」

俺は、分かったと返事をする。

「昨日も言ったわよね？クリスタルがあるのは、歩いて半日の結晶の泉。その道中は魔物も出るし、気を引き締めなきゃダメよ。」

それからシャルは話し続ける。話しによると、シャルは普通の人よりも魔法は使えるらしい。それこそ、苦戦はするがグリズリーを倒せる程。

なぜ苦戦していたかというと、特異体質のせいで、魔力も多く濃度も十分あるシャルは、他の人と違い、一ヶ月の内一日だけ魔力濃度が大きく変わるといふ。濃くなる日もあれば薄まる日もあるといふのだから使い勝手が悪い。

「まあ、調子はもどったんだし、ヤマトもいるしこれならクリスタルもとってこれるわね。」

ああ、因みに俺は駆け出しの旅人という事にしといた。所有物を何も持っていないが。

「じゃあ行きましょうか。」

シャルが歩きだしたので俺はそれに着いて行く。

道中は魔物も出たが、全てそこまで強い個体ではなかった。

「着いたわ……。」

シャルが立ち止まり木々の向こう側を指さす。

「やつとか…。さすがに疲れたぜ。」

泉の前まで来た俺は、疲れていたのにもかかわらず、かなり驚いた。

「驚くのも無理ないわ。すごいでしょ？結晶の泉は。」

結晶の泉は俺が思っていたものより大きかった。真ん中には小さな島があり、そこにはかなりの数の結晶があった。

それらにも驚いたのだが、一番はやはり、綺麗なところだろう。青色に澄んだ泉は、日の光や周りのものを反射させ、キラキラと輝いている。

俺は泉から目をそらしシャルを見る。

「綺麗なところだな。…それで、結晶はどうやってとるんだ？」

陸から小島までは少なくとも10m以上ある。

「泳いで行くつもりだったんだけど、ヤマトがいるしね…。悩んでるところ。」

俺がいたら、困るのか？

…ああ、そりゃそうか。

「じゃあ俺がとってくるわ。」

俺はそう言って準備運動を始める。

「どうやって？泳いでいくの？」

「いや、ジャンプして…。」

「……無理よ。」

「そうか？まあ、試して無理だったら泳ぎって事で。」

俺は頭の中でイメージする。ON、OFFのスイッチを…。イメージしたのは、電気のつけ消しを行うスイッチ、それをONにする頭の中で“カチ”という音がし、体が軽くなる。どうやら成功のようだ。

俺は足に力を入れ跳ぶ。軽めに跳んだつもりだったのだが、小島を超えそうになった…。

島に着いた俺は、小さいクリスタルを一つ持ち、元いた場所に帰るためまた跳ぶ。

「ヤマト……あなた人間よね？」

クリスタルを手に持ち帰還した俺に、驚愕の面持ちでシャルが言う。

（それは俺も大いに疑問だ…。）

シャルの疑問に心の中で答え、俺はクリスタルを彼女に渡した。

第五話 転移魔法

クリスタルを無事入手した俺らは、また帰るために歩き出す。

「めんどくせー。もう歩きたくねえ。」

「しょうがないじゃない。他に方法が無いんだから。」

「方法が、方法うゝん方法。そうだ、移動したりする魔法は無いのか？」

「あるにはあるけど、使えないわ。」

「え？あんの？」

「知らないの？転移魔法や飛翔魔法の事よ。魔力で体を浮かせたり、物体をA地点からB地点まで移動させたり…。まあ、使えるのは熟練者や天才って呼ばれる魔法使いや、魔人だけね。」

魔人とはこの世界にいる種族のことだ。人間と魔人の他に獣人といたものも存在する。魔人はその名の通り、魔法に長けた種族。獣人は身体能力が高い。

「転移魔法に飛翔魔法ね。」

俺は偽りの記憶を漁る。おっ、あつたし……。

「俺転移魔法使えるわ…。」

「え？」

「うん。」

「嘘でしょ？ほ、本当に？……あんた本当にただの旅人…？」

俺は誤魔化すために喋り始める。

「それでこの魔法、最近見た場所にしか行けねーんだ。…シャル、俺らが初めて会った場所から、お前が住んでる場所まで、どんぐらい時間かかる？」

「あそこは街からは近いわ。二時間程で着くはずよ。」

じゃあ転移魔法使った後は、あの方法で行こう。

「シャル、近くに来てくれ。」

「なんで…？嫌よ…。」

「お前の中で俺のイメージどうなってるんだよ…。転移魔法使うのに必要なんだ、手に触れるだけだし、いいだろ？」

シャルが近づいてくる。俺はシャルの手をとる。真っ白でスラリとしていて柔らかい……。俺は一瞬硬直してしまった。

「な、何よ？」

「悪い、何でもない。」

そういつて俺は詠唱を始める。頭の中にある文を吐き出す。

「ええ、と―――動けぬ物、その物の望む場所へ。座標をかえよ、テレプオート。」

シャルと会った場所をイメージし、俺を通じてシャルにも魔力を通す。俺たちを光が包む。だがそれも一瞬の事で、瞬きをする間もなく景色が変わる。

。
。
。

「ふう、どうやら成功したらしいな。」
「そついい、俺は手を離す。」

「転移魔法って便利なのね……。」

「確かにそうだな。でもここから二時間だろ？シャル、街ってどの方角なんだ？」

「あつちよ。あと二時間頑張りましたよ。」

ふうんといい、俺はシャルを前に抱きかかえる。いわゆるお姫様抱っこの形だ。

「きゃっ！な、なに？／＼／＼／」

きゃっ！だってよ。可愛い声出すじゃねーか！

俺は頭の中のスイッチをONにし、シャルが指差していた方向に全速力で走り始める。

立ちはだかる木や岩は全てよける。魔物にも会ったが完全無視。

そうして走っていると森の終わりが見えてきた。街に着いたのだろ。かかった時間は僅か十分。疲れは無い。

俺の全力疾走は完全に生物を超越したモノだった……。

第五話 転移魔法（後書き）

長かった森。だけどそれも今回で終わり！
読者の皆さん、次回からはちゃんとやりますので、どうかまだ見捨てないでください！。。。（ノ）、（。。。。

第六話

シャルの親父は意外に優しい…？

森を抜けようやく街が見えた。俺は放心しているシャルをおろした。シャルはそのまま地面に座り込んでしまう。

街には門のようなものがあり、門番らしき人物が二人、だらけたように門に寄りかかっている。

街に入ろうとしてる人たちは何か、カードのようなものを門番に見せている。

「なあシャル、街に入るのに何か通行証とかいるのか？」

俺は放心したままのシャルに話しかける。

「シャル？おい。」

目の前で手を振る。

「聞こえてるわ……それよりなんて事してくれんのよ…。」

「まあ、いいじゃねーか。こんなに早く街に着けたんだし。」

「それでも突然あんな……こ、腰が抜けちゃったじゃないの！」

どうやら超高速ヤマト号はおきに召さなかったらしい。

「それで？なんか見せなきゃいけないのか？」

「それでって何よ！もう……別に大丈夫よ。あたしのツレって事にすれば。」

「そうか、じゃあ早く行こうぜ。腹が減っちまった。」

そうして俺は歩き出す。

「ちょっと待って！」

「なんだよ？」

「いや、だから……。」

「ああ、腰が抜けて歩けねーのか。」

しゃがみこんだ俺はシャルをおんぶする。

やっぱり軽いな……。シャルはなにも言わずに俺の首に手を回す。背中
中に当たる感触に俺は悟りを開く事を、余儀なくされた。

抱っこしたまま、門へと近づく。シャルは俺の背中から降り、門
番に話しかける。腰はもう大丈夫なのだろうか……。

「この人はあたしのツレで、まだカードを持ってないので。」

そう言って自分のカードを渡す。

俺たちは街に入る。

。 。 。

「おお、結構活気があるんだな。」

街は最初に入ってすぐの所は、建物などがあるだけだったが、進むにつれて店などが現れはじめた。

果物や野菜などを売ってる店。レストランのようなものもある。

「で？ヤマトは今日どうするの？」

「どうするって何が？」

「泊まるとことか。」

忘れてた…。

「シャル、お願いがある。」

「な、何よ？」

俺の真剣な顔にシャルがたじろぐ。

「金貸してくれ…。」

「……持ってないの？」

「ああ。銅貨一枚持ってない。」

気づいた事がある……。神に飲まされたメモ帳はどうやら俺に、基本的な知識を教えてくれているらしい。

金の単位は、銅貨が百枚で銀貨、銀貨が百枚で金貨、金貨が百枚で白金貨というものらしい。

ようするに、銅貨が一円、銀貨が百円、金貨が一万、白金貨が百万と言ったところだろう。

「はあ、まあいいわ。今日は家に泊めてあげる。」

「マジ？悪いな。」

そこから少し歩いた所に、立派な屋敷があった。シャルは躊躇する事なく、扉を開ける。中には、メイドさんの様な人がいて、口々に“お帰りなさいませ”と言っている。

「でっかい家だな。俺だったら落ち着かないぜ。」

「そう？確かに普通の家よりは大きいけど、そこまでかしら。」

「いえいえ、十分大きいですよ。」

いつのまにかメイドさんが一人ついてきていた。

「エイス、ただいま。」

エイスと呼ばれたメイドさん。茶色のロングヘアを揺らしている。顔は…普通に可愛い。

「お帰りなさいませ、お嬢様。そちらの方は？」

俺の事だろう。

「ヤマトだ、よろしく。」

「エイスです。よろしくお願いします。ふふっ、それにしてもお嬢様が男性を連れてくるなんて。」

「ただの友達よ。」

「そうですか。」

エイスはクスクスと微笑んでいる。

「では、ヤマトさんは友人という形でよろしいでしょうか？」

「そう言ったじゃない。」

エイスはこちらを見て微笑んだあと、では、とついてくるように言った。

屋敷のある扉の前で止まりノックをする。シャルは返事も聞かず扉の中に入る。

「ただいま、帰りました。お父様、お母様。」

そう言いながら俺を中に引っ張る。中には大きなテーブルと二人の人物。

「お帰り、シャリウエル。」

そう言ったのは二人のうちの一人、女性であるこの人はシャルの母親だろう。

「ふむ、どこへ行っていた？」

この人は父親だろう。思いつきり貴族って感じのする、ダンディなおっさんだ。

「コルンの森よ。望み通り、クリスタルをとってきたわ。」

そう言ってポーチの中から出した結晶を見せる。

驚愕する二人。

「本当にとってきたのか。なぜだ？なぜそこまで、結婚を拒む？」

「言ってなかったけど、実はあたし、あの人嫌いなの。それにあたしには夢があるっていったでしょ？結婚なんて出来るはずがない。」

親父さんはむうと唸っており、母親のほづは、さほど驚いていなかった。

てか俺場違いじゃね。

「ふう、わかった。結婚はまだいい。それにしてもお前にそこまで
の決意があつたとはな。」

「決意はあつたけど、死にそうになったわ。で、この人が助けてく
れたの。」

シャルの両親の4つの目が同時に俺を射抜く。

「そうか、感謝する。して、君の名前は？」

シャルママも頭を下げてきた。

「ヤマトです。あと気にしないで下さい。当然の事をしたまでです
から。」

ちよつと善人を気取つてみる。

「それで、助けてくれた御礼つて事で、今日泊めてあげたいんだけ
ど…いい？」

「ふむ、いいだろう。夕食はまだかね？まだだったら、森の話の聞
くついでに、用意させよう。」

親父さんは想像してたより優しかった…。その後、シャル一家と
夕食を共にした俺は、フロもいただいた後、エイスに連れてつても
らった部屋で就寝した。

第七話 街は寒い…………

コンコン

ノックの音で俺は固く閉じていた目を覚ます。目に入るのは見た事のない部屋の天井…。

「はい？」

まだ虚ろな目でドアの方へと呼びかける。

「失礼します。」

そう言ってエイスが部屋に入ってくる。そこで俺は思い出した。昨日はシャルの家に泊めてもらったことを。

「おはようございます、ヤマトさん。」

「おはよう。」

「朝食の御用意がなされています。顔を洗った後、声をおかけください。」

ではと言って、エイスが部屋の外にでていった。

俺は部屋にある水道で顔を洗い、貸してもらった服を着替え、俺が元々着ていた服を着る。俺が着ていたのは黒いチノパンに長袖Yシャツという格好だ。因みにネックレスとチェーンといった小物

もついている。何故かこちらの世界は、意外に文明が進んでることがわかった。多分電力などの代わりに魔力を使っているのだろう。ミシンなど服を作る機械もあるらしい。なので、俺の格好はそこまで珍しくない…。

俺は首を鳴らし、外に出るための扉を開く。

その後、朝食もいただき、俺はエイスにシャルの部屋に連れて行ってもらった。

「シャル、ちょっといいか？」

扉をノックし、返事を待つ。

「うん、いいわよ。」

扉を開ける。

シャルの部屋は全体的にピンクの印象が強い部屋だった…。意外にフリフリな物もある。
ファンシーすぎじゃね……？

「そこ座って。」

シャルが部屋にある椅子を指さし、座るように促す。

俺は黙ってそれに腰掛けた。

「で？どうしたの？」

「報酬の話だ。質問に答えてくれるか…？」

シャルはいいわよ、と言って俺に話すよう促す。

「まず一つ目だ。みんなどういった仕事をして、金を稼いでいるんだ？」

まず俺でも出来る仕事を見つけないきゃ話にならん。金が無きゃ、結局何も出来ないんだから…

「仕事はいろいろあるわ。自分でオリジナルの仕事始める人もいるし。でも基本的に旅人名乗るんだったら、商人になったりとか、冒険者ギルドで稼いだりするとかするわ。あ、あとはトレジャーハンターとかもいるわね。でもそういった職業は技術がいるし、危険だつてある。技術といたら王国に仕えるのもいいかもね。給料は安くないし、なにより安定してる。」

「領地とかあるの？」

「もちろん。領地を貸して、お金を稼ぐのもありね。うちはそうだし。」

ギルドか…よさそうだな。

「ふ〜ん。だいたい分かった。じゃあ次は国について。」

「国について？国はこのガンマインでは五つあるわ。まず、あたしたちが居る国はベンガルファйм王国。この街はちょっと孤立してるんだけど、この国に属する。あとは、中立国ナグマとシンフォス

王国にガンシユールっていう魔の国って言われているとこ。最後に謎の国と呼ばれるミズキ国。」

その後もシャルはとどまる事無く、話し続ける。まず、国の配置。ナグマ国を囲むように4つの国がある。右上がベンガルファイム、右下にシンフォス。ナス海と呼ばれる海を挟んで左上にガンシユール、左下に広い海を挟んで、ミズキ国。ナグマ国とベンガルファイムは仲がいいらしい。

だが、シンフォス王国とガンシユールにミズキ国はあまり協調性がなく、特別仲良くというのではないようだ。ナグマ国は中立国と呼ばれるだけあって、技術が進んでおり、大きく発展を見せる国ということ。

ベンガルファイムとシンフォスは物資。ガンシユールは色々な種族が混じっており、魔王と呼ばれる魔人屈指の実力を持っている者が収めているらしく、武力派の国である。ミズキは広大な海である、シユーマ海を挟んでおり、情報があまり無いらしい。ベンガルファイムも調査のため人員を派遣したのだが、大きな波のせいで進めずにおわったそうだ。

正に謎の国と呼ばれており、知っているのは、国王の事だけらしい。過去に五ヶ国会議というものを行ったらしく、その時に国王とその側近を見たという話だ。

あと今現在、国同士の戦争などはないようだ。国同士のは、だが、国中での戦乱は多々あるらしく、国王も頭を痛めているという。

シャルに世界について一通り教えてもらった後は、過去の大きな出来事や、学校などの施設があること等を聞いた。

「それにしても、本当に何も知らないのね。ビックリしたわ。」

「ちよつと事情があつてな…。ありがとな、色々教えてくれて。あつ、泊めてくれたこともな。」

何故だろう…？…シャルの話聞き、この人と一緒にいる理由が無くなった途端、この場から逃げ出したくなつた…。

「…よし、俺はもう行くかな。親父さんとお母さんによろしく言つていてくれるか？」

「それはいいけど…。ヤマトはこの街にいる気はないの？別にこの家にいてもいいんだけど…。」

その言葉を聞いた時、俺の心の奥底がズキつ、と鈍痛を訴えた。

「残念ながら俺は旅人っていう設定だからな…。」

動揺しまくりの舌を誤魔化して、俺は言いきつた。

「設定…？」

シャルが疑問の顔を視線を向けてくるが、俺はその眼を直視出来なかつた。

「まあ、いいや。見送りはいらねーぞ。また縁があつたら会おうぜ。じゃあな。」

そう口早に言って俺は部屋を出て、屋敷も出る。ああ、エイヌも居たから挨拶しておいた。

「ふう。」

この国では今の季節は結構寒く、俺の服装では少し物足りない…。風が吹き付け、俺の体を寒さが蝕む。

（やっぱり…一人のほうがいいな…。）

俺は手をポケットに入れ寒さを和らげる。

（人は暖かすぎる……。）

無理矢理納得させるような考えを持ち、自分を保とうと足掻いた…。

それから、十分程歩いただろうか、王都に行くための門を見つけ。門番は、同様にだらけており、この街が平和だという事がよく分かる。街は入る時には証明書のようなものがあるが、出る時はいないらしい。

俺はその様子を少し微笑みながら見ると、門に向かって真っ直ぐに歩き出す。

「待ちなさいよ！」

大声に区別できる叫びが、俺の耳を貫いた。

「ん？」

俺は声がしたほうに体を向ける。

そこにはシャルが立っていた。息が荒く、走って来たのだろうと悟った。

シャルは暖かそうな格好をしており、リュックサックを背負っている。

「見送りはいらねーって言わなかったっけ？」

シャルの格好に疑問を持ちながらも、問いかける。

「ハアハア…あなたは常識知らずよ…。」

そりゃそうだ…俺はこの世界の人間ではないのだから…

「わかってるよ…。」

「…あなたはお金を持ってないわ。」

この世界に降り立ったのはつい昨日の事だしな…

「それもわかってるよ。」

「今はかなり寒い季節よ…。」

さっき実感したばかりだ…

「確かに…。」

シャルは俺に近づき、優しい顔をしたまま黒いマフラーを巻いてくれた。

もう俺は分かってたのだろう…。シャルの言わんとしてる事を…。

「あたしがいれば、全部解決ね…。」

涙腺が悲鳴をあげる。意思と関係無しに目が潤んでくる…。

「ああ、お釣りがくる程な…。」

鼓動が超加速しているのが分かった。

「あたしの意味は分かかってると思うけど…あなたの意味はどうなの？」

シャルは俺に優しく問いかける…。

俺は…ずっと…独りだった…。本当は寂しかった…。お前は人間じゃないとか…死んだ方がいいとか…そういった類の罵声も沢山浴びせられた…。

苦しかった…誰かに助けて欲しかった…泣き叫んで…助けを求めて…自分のその境遇をぶち壊したかった…

でも俺は、人にすぐるのをかつこ悪いと思っていて、特別だから、
他と違うから…離れていくのはしょうがないと思っていた…。ただ、
無心に、クールを装い…体と感情を分けるように生きてきた…。

「シャ、シャル。」

声が震える。ムカつくぐらい涙が止まらない。別に悲しいわけじ
やない…悔しいわけでもない…ただ…

「俺と…一緒に…き、来てくれるか？」

嬉しかったただけだ…。

「まあ、そんな事言わなくても無理矢理ついていくつもりだったん
だけだね。」

そう言ってくれるシャルが嬉しくて…俺を見ってくれるシャルが嬉
しくて。

俺はシャルに抱きつき泣いた…。

何も言わずシャルは俺の背中に手を回し、背中をさすってくれた。

その日、俺は約四年ぶりに人の温もり、暖かさを感じた…。それ
は俺が今まで怖くて、手を出せずにいたものだ。

体は寒く、指先は感覚が薄れてきている。

それでも感じれる、手の中の温もりを……俺は絶対に離さないと
……損なわないと……そう、強く誓った……。

第七話 街は寒い……………（後書き）

バトルが欲しい方々、申し訳ありませんm（――）m
でも、これは作者が主人公に必要なだと思つた事です…。人には誰しも弱さがあるというコンセプトで書きました。これで主人公に愛着が湧いてくれるといいんですが……。

バトルもこれから出していきますので、暖かい目で見守っててください。

第八話 シャリウエル視点

（シャリウエル視点）

ヤマトを家に泊める事になった。それにしても、銅貨一枚も持っていないなんて…。

絶対に怪しい…。それに旅人って言っても転移魔法を使えるなんて…。それに、グリズリーを倒した強さ。あれは絶対普通の旅人じゃない…。

まあ、でも悪い人じゃなさそうだし…いつか。

その後、ヤマトをお父様とお母様に紹介した。あたしを救ってくれた人として。

泊めてもいいか聞いたけど、心配はいらなかったみたい。夕食の席ではお父様もお母様も、ヤマトを気に入ったようだ。

その後のヤマトの予定は、知らないが普通に寝たのだろう。

ふと、あたしは部屋で不思議に思った。

（どうしてこんなにヤマトの事考えてるの？）

あたしはなんかモヤモヤした気分のまま、ベッドに横になった。

。

。。

翌朝いつものように、エイスが起こしに来てくれた。あたしは起きあがり、櫛で髪を整える。

朝食も昨日のメンバーで食べた。お父様とヤマトは食事中楽しそうに談笑していた。

朝食を食べ終わり、部屋にもどって少し経つと、部屋の扉が控えめにノックされた。

「シャル、ちょっといいか？」

ヤマトの声だ。あたしはベッドから上半身を起こす。

「うん、いいわよ。」

扉が開き、ヤマトが入ってくる。

「そこ座って。」

あたしは椅子に座るように促す。ヤマトは黙って椅子に座ったが、何か納得いかない顔をしていた。

「で？どうしたの？」

あたしは聞く。

「報酬の話だ。質問に答えてくれるか…？」

あたしはいいわよ、と言って話すよう促す。

それから、いろんな話を話した。国の事や仕事の事。他にも色々な。

あたしはヤマトが何も知らない事にビックリしたことを言っただけ。するとヤマトは。

「ちょっと事情があつてな…。ありがとな、色々教えてくれて。あつ、泊めてくれたこともな。」

事情とは何だろうか。記憶喪失とか？いや、なんか違う気がする。そういつた事を考えていると、間を開けてヤマトが言った。

「よし、俺はもう行くかな。親父さんとお母さんによろしく言つていてくれるか？」

え？もう行くの？

「それはいいけど…。ヤマトはこの街にいる気はないの？別にこの家にいてもいいんだけど…。」

何故かこのまま離れたくないと思った…。

「残念ながら俺は旅人って設定だからな…。」

「設定？」

よくわからない事を言っている。

するとヤマトが早口で話し始める。

「まあ。いいや。見送りはいらねーぞ？また縁があったら会おうぜ。じゃあな。」

そう言っでヤマトは逃げるように部屋を出て行った。

だけど、あたしは見てしまった。別れを言う時、ヤマトが一瞬だがとても悲しそうな顔をしたのを。

（なんて顔してんのよ……）

あたしは胸の奥が痛くなるのを感じた…。それと同時に、両親の部屋に向かうため走り出す。

扉を開き、両親の顔を確認し、言った。

「お父様、お母様……話があります…。」

。 。 。

部屋で以前から用意しておいた旅の荷物を持つ。

クローゼットを開き、羽織るものを探す。カジュアルなコートを着込み、マフラーを首に巻く。

あたしは屋敷を出た……。

。 。 。

屋敷の外に出ると同時に寒さが襲ってくる。体が固まり、歩きだそうとする脚を止める。

あたしはヤマトの事を考えていた…。

（あんな薄着じゃ、風邪引くじゃないの！）

黒いズボンにシャツ。この季節に着たら笑の種になるような格好。コルンの森は、なぜか年中暖かいので野宿も出来るが、街は四季が存在し、今は冬だ。

あたしは走る…。それと同時に焦燥感が襲ってくる。

（コルンの森には行かないだろうし、多分王都よね…。）

あたしの脳裏に焼きつくのは、別れ際のヤマトの表情。

諦めたような…それでいて、苦しそうな顔。

嫌だと思った。もっとヤマトの事を知りたいと思った。

「ハアハア、」

久しぶりに走ったからか、口の中がカラカラになり、足が痛みを

訴える。

自分の走る速度に嫌気がさす。

（もっと…もっと速く。）

街の門が近づくにつれ焦りが高まっていく。

「っ！」

その時……門に近づくヤマトを見つけた。

「まっ、ハアハア」

声が上手く出せない……。それでも振り絞って言った。

「待ちなさいよ！」

走ったせいで、体が痛むが、心は安心しきっていた。

「見送りはいらねーって言わなかったっけ？」

ヤマトが言う。驚いているが、どこか嬉しそうな顔。

呼吸がしにくいが、鞭を打ち付け言う。

「ハアハア、あなたは常識知らずよ……。」

国の名前すら知らない……。

「わかってるよ…。」

「あなたはお金を持ってないわ。」

それこそ、銅貨一枚さえ。

「それもわかってるよ。」

「今はかなり寒い季節よ。」

シャツ一枚じゃ、とてもじゃないが耐えられない季節…。

「確かに…。」

あたしは首に巻いていたマフラーを外し、ヤマトに近づく。

ヤマトの吐く息は白く、あたしの心を揺らした。

黒いマフラーを首に巻いてあげると、ヤマトはあたしの目をまっすぐにみる。

そして、あたしは少しの溜めを作り、言ってやった。

「あたしがいれば、全部解決ね…。」

ヤマトの顔が急速に歪む。だが、それを必至で我慢しようとしている顔。

「ああ、お釣りがくる程な…。」

ヤマトは今にも泣きそうだが、聞いておかなければならない事がある。

「あたしの意味は分かっているとと思うけど、あなたの意味はどうなの？」

これは大事なことだ…。

ヤマトは何かを考えているような顔になった。その無表情な顔に次第に涙がラインを作っていく。

「シャ、シャル。」

少しの間を開け、ヤマトが言った。

「俺と…一緒に…き、来てくれるか…？」

あたしは嬉しくなった。求められてるのがわかった。

「まあ、そんな事言わなくても無理矢理ついていくつもりだったんだけどね。」

そう、ヤマトが断ろうが関係なかったのだ。あたしは絶対に着いていく気だった。

そんな事を思案していると、急にヤマトに抱きつかれた。あたしの顔のすぐ横で、呻く声がする……。

少し触れたヤマトの手はとても冷えているのが分かった。あたし

はヤマトの背中に手を回し、さすってあげる。

そうすると、より一層抱きしめる力が強くなる。

街は寒く、彼は冷たい…。

あたしを温めるのには、厚着に着込んだ服があるけれど…彼にはそれが無い…。

だったらあたしが暖めてあげよう…そう…思った。

第九話 王都が近い

俺は今、街から王都へと続く道路のような場所を歩いている。見る限りでは辺り一面360度草原…。もうかなり歩いているが街には着かない。

話では、あと一日かからないらしいが…。

その前に…。

「ヤマト、足が疲れたわ。少し休憩をいれない？」

シャルが言う。

「あ、ああ。」

俺とシャルは脇の草原に座る。今は昼で太陽がポカポカと照りつける。

シャルが俺のそばに寄ってくる。肩は密着していて、はたから見たら恋人同士のようにだ、と思われるに違いない。

「近い…。」

シャルは水筒のような物をカバンから出し、コップのようなものに注ぎながら言う。

「何か言った？」

コップを俺に渡す。

「いや、なんでもない。」

あの時俺はシャルに自分の弱さを見せた…。ガキみたいな泣き顔を…。あれからシャルは俺によく接触するようになり、距離感もかなり縮んだような気がする。

それにしても恥ずかしい…。今すぐ地面で悶えたいくらいだ…。女に泣いて縋りつくなんて、どんだけ女々しいんだよ…。

（俺、あんなキャラじゃないんだけどな…。）

俺は心の中で考える。

「じゃあ行こっか。あと少しで王都につくと思うし。」

俺はああと言って立ち上がり、腰を捻る。パキパキと小気味いい音がして、少し腰が楽になった。

見据えると、とても疲労感が襲いかかってくる前方に伸びる道に戻り、再び歩き出す。

王都に着いたのは次の日の朝だった……。

第九話

王都が近い（後書き）

次回から王都です。

それにしても20話ぐらいまでは毎日更新しようと思ってたんですが、夏期講習が忙しくて……。

読者の皆さん！出来るだけ投稿の間隔は開けないようにしますので、これからもよろしく願いますm（・）（・）m

主人公とヒロイン紹介

〈主人公とヒロイン紹介〉

【志波大和】

身長174cm。細いが筋肉質の身体。長い黒髪に切れ長の黒い瞳。

年は16歳。

好きな食べ物は、ミカン。

日本では妹が一人と両親の4人家族。

地球では父親の務めている開発局にて、天才、鬼才と呼ばれていた。本人は勉強を一種の作業だと思っていて、好き嫌いの観点がない。自分でも、やる意味が分からず、ノートを書き潰していた。

性格は冷静な方で、どちらかというと、他人に冷たい方。だが、親しくなった人間には、接し方は柔らかく、逆に甘えたがる節がある。

異世界にて、人の暖かさを経験し、日本にいた頃より口数も増えた。とある事情により、シャリウエルを意識している。

地球で幼馴染を助け、代わりにトラックに跳ねられ、絶命した。その後、神々の厚意により、異世界ガンマインで生きていく事になる。

その力は異常なもので、神の加護により身体能力を爆発的に上げる事ができる。だが、通常時での身体能力も多少上昇していて、アスリート並みの動体視力と筋力を持つ。特殊保有スキルを3つ所有している。

現在、ベンガルファйм国王都にてシャリウエルと行動を共にしている。

【シャリウエル・ローズ・アルガータ】

昔、国王の側近を務めていた男、ヴァイク・ローズ・アルガータ侯爵の愛娘。

身長166cm。絹糸のような水色の美しい長髪。スラリとした肢体に数多の男を魅了する、絶世の容姿。バストは82と控えめなのを本人は意外に気にしている。

年齢は17歳であり、ヤマトより一年早生まれ。

気位が高く、自分が貴族の娘だと重々承知している。

魔法の才に大きく秀でているが、現時点ではあまり発揮できていない。

変革濃度という特異体質を持ち、稀に魔力濃度が大きく変化する。

水属性の魔法が得意。

嫌いな婚約者と結婚するのを拒み、コルンの森にクリスタルを採りに行った。

そこで、コルンの森の魔物、グリズリーマザーに襲われているところ、通りかかった大和に助けられる。

それから、大和と行動を共にし、助けてもらった事などで、大和に好感をもっている。

街を出て行くこうとする大和に突っかかって行き、結局一緒に旅をする事になった二人は現在王都にいる。

王都到着　　〱ギルドへ〱

ガヤガヤとうるさい人々の喧騒の中、一組の男女は肩を並べて歩いていた。

「流石に王都だな……。あの街も結構活気づいてると思ったんだけど、やっぱり別格だな……。」

今現在俺とシャルは王都の繁華街らしき所を歩いている。

王都には今朝到着した。今は昼時で、昼食を食べるという名目で繁華街に出向いている。

「そりやそうよ。ここは王族や貴族が数多く住んでるし、お金がよく回るからね。その分、街が発展しているのよ。」

見渡せば、色々な店がある。武器屋に防具屋。果物や野菜、料理の材料を売ってる店。アクセサリーショップのような物や、服を売ってる店なども沢山ある。終いには、花屋や占いなどもあった。

ふーんと俺は生返事をして、街ゆく人達に目を向ける。

（王都か。楽しくなりそうだな。……ん？）

俺は衝撃を受けた。

俺の目に止まったのは、三人組のメンバー。男二人に女一人。そ

こまでは普通だ。見渡せばいくらでもいる。

だが、違うのだ。そいつら三人には……動物耳があつたのだ……。

しかも女の耳はあれだった！

ニヤーン

俺は頭の中で猫の鳴き声がBGMとなつて鳴り響いた気がした……。

（スゲー破壊力だ……。）

「ヤマト？どうしたの？」

シャルが心配したような瞳で、俺の顔を覗き込んで来る。

「いや、何でもない、何でもないんだぜ！」

「それならいいけど、何か顔がニヤついてるわよ？」

ハッ！マジか？俺は内心焦りながらも、“冷静”を装う。

「どうしたんだ、シャル？変な事言つなよ。お、お前こそ、疲れてるんじゃないか？」

多分今の俺の顔は、自分で言つのも何だけど凄く不自然だと思う……。

「ん。そうね。あんなに歩いたの久しぶりだったし、疲れてるのかも……。」

シャルは自分の肩を軽く揉みながら言う。

因みに俺は全然疲れていない…。体はまだまだ動く。どっちかって言っと、精神的に疲れていたが、今さっき回復した。

「何だ？本当に疲れてたのか。大丈夫か？」

「うん。でも出来るだけ、早く寝たいわね。だから早く昼食食べて、宿に戻りましょ。」

シャルはそう言うが、実際かなり疲労しているのだろう。

心なしか足取りがフラフラしてる気がするし…。俺は心配する気持を胸に、シャルの隣を陣取る。

シャルと俺はまた歩きだす。

。 。 。 。

俺とシャルは結局いい店が見つからず、宿屋の食堂の様な場所で昼を済ませた。

その後、シャルは疲れを取るために寝ると言って、自分の部屋に入ってしまった。俺たちがとった宿屋は、値段もそこそ安く、設備も充実していて、オマケに部屋が広い。

因みに金はシャルに貸してもらってます…。

シャルもいなくなり、いよいよ暇になった俺は王都を散策する事にした。

宿屋を出て、左に行く。

大通りを歩いていると、人が溢れかえっており、大変息苦しい…。

大通りを少し歩くと、人混みも薄れ、だいぶ歩くのが楽になった。そのまま、店など、面白い物がないか探していると、ある施設を見つけた。

建物には剣や盾、杖などの模型が装飾されている。そう、見つけたのは冒険者ギルドだ。

俺は昂る思いを抑え、建物に向かい一直線に歩いていく。

ドアの取っ手を掴み開け放つ。

ガチャ

「おお…。」

俺は、ギルド内を見回す。

中は思ったより綺麗で整頓されていた。

入って右側に机やら椅子やらが有り、奥には本棚などもある。

俺は昼間にも関わらず、大の大人がどんちゃん騒ぎしてるのかと思ってたが、どうやら違うらしい。

多少は人がいるが、みんな結構真面目そうだ。

俺は左側にあるカウンターの様な所に歩を進める。

カウンターには一人の女性がいて、何かの書類を漁っている。

俺はその人に近づき、話しかける。

「あの、すみません。」

「あ、はい。なんですよ？」

「ここってギルドの施設ですよね？」

「そうですね？」

「ギルドの事について、教えてもらっていいですか？」

そう、まずは情報収集からだ。なんにも知らずに手続きするなんて、そんな無鉄砲な事は俺には出来ない。

「ギルドの事ですか？…あゝわかりました。特に聞きたい事などありますか？」

「いや、別にないです。浅くで良いんで、基本的な事は全部教えてくださいませんか？」

「はい、かしこまりました。ではまず――。」

受付嬢らしき女性が話し始める。

「――という訳です。他にも――。」

それからも受付嬢？は律儀にギルドの事について教えてくれた。

要約して説明すると、こうだ。

まず冒険者ギルド。これは一種の組合…会のようなものから今の事業的なものになったらしい。

ギルドで仕事をするためには、ギルドカードを発行し入会したのち、依頼を受けてしか出来ない。

それと、冒険者にはランクというものが有り、低い方からD<C<B<A<Sとなり、Sランクになる人は、ごく稀で、世界で100人程度らしい。

だが、そのSランクにも上がりがあり、これが、SSランク。人間兵器や国宝人、超越人などと呼ばれたり、一人に一つ、あだ名のようなものが絶対にあるという。

システムはランクが高くなるほど高位の依頼を受けれるというもののらしい。

ランクが高くなると軍や、国立騎士団、近衛など、いい仕事をもらえたりする事もあるという。

他には、ギルドの依頼について。

まず、依頼を受けるといっても色々なものがあり、ただの草刈りから、ドラゴン討伐などもあるらしい。

討伐依頼や捕獲依頼、そういったものは命をかけるだけあって、かなり値が張るという。

それと相対して雑用の依頼などは報酬額が安く、だが危険の少ない仕事としてそれらだけで生計を立ててるひとも少なくないらしい。

あと、依頼を失敗したり、放棄したりすると違約金のような物が払わせられる仕事があつて、これが意外に高めだという。

しかし、どうしようもない場合などは、ちゃんと証明できたら、違約金なども無効化出来る。

そう、普通のギルドだ。

言っちゃ悪いが本当に思った通りのギルドだった。

「……あの、ギルドカードって作れます？」

「はい、新規となるとカード作製は無料となります。ちょっと待っててください。」

受付嬢さんが早歩きで裏側？に入って行つた。

数分後に戻ってきた受付嬢さんが何か箱の様な物を持ってきた。

「この中には、鉄製のカードが入っていて取り出した人によって内容が変わる仕組みになっています。」

「ふん。なんか便利ですね…どんな仕組みなんですか？」

「いえ、私達は知りません。これは先人が作った古代のツールと呼ばれていて、詳細はまったく不明なんです。」

「さすが、ファンタジー…。」

「？なんか言いました？」

「いえ何も…じゃあ遠慮なく。」

俺は腕を捲り、豪快に手を突っ込んだ。

手で探してみると何枚かのカードがある事がわかる。

俺はコレだ！と思ったものを一枚取り出した。

「一枚取りましたか？ではそのカードをこちらにお渡し下さい。」

俺は鉄の板を見ないで受付嬢に渡す。

「…シバ・ヤマトさんですね？…あれ？称号が入ってる…。」

「称号？」

「はい。これは何でしょう…。…ヒーローって読むのかな？」

受付嬢は自信なげに呟く。

「ヒーロー？」

HERO？エイユウ？

てかツールっていう単語があんのに何でヒーローはねーんだよ…
…。

「えっと称号って何すか？なんか意味あるんですか？」

なんか釈然としない…。

「称号と言うのは、他の人に付けられるあだ名と違って、その人が本来持つてる器や、望んでるもの。神様から与えられた役割とも言われています。……正直これについてもあまり知られてないんですよ…。」

じゃあ一種のバグっていう可能性もあるって事か…。

ハハ

俺が英雄って似合わない過ぎるだろ。

俺はそのままカードを発行してもらい、教えてもらってなかった詳細などを聞いた後、宿に戻るため歩き出した。

第一話 これからについて??

コンコン

ドアを叩く音で俺は目を開けた。
正直にいうと、足音で気付いてたのだが。

「どうぞ。」

ガチャリとドアが開くと、現れたのは俺がこの世界で最もよく知る人間だった。

「ヤマト、ちょっといい?」

俺はベッドから起き上がり、ああ、と返事をするとき軽く背骨を鳴らす。

「あの時から、あんまりはつきり話してないじゃない?これからどうするのか。」

あの時とは多分あの時だろう。

わざわざ言うのは、野暮だ。てか恥ずかしい。

「そうだな。でも折角長つたらしい道歩いて来たんだ。王都に滞在すんのも良いんじゃないか?」

「うーん、そうね。まあ、でも…。」

歯切れが悪いが何かあるのだろうか…。

そんなシャルを見てるとふと疑問が浮かび上がる。

「そういえば、なんでシャルは俺と一緒に来こうと思ったんだ？」

「ツツ！」

なんかめっちゃ動揺してるな…。至極まともな疑問だと思ったんだけどな。

「べ、別に理由なんてどうでも良いでしょ。……直感よ！直感！」

直感？まあ、いいか。これから一緒に行動するんだ。いつでも聞けるしな。

俺は何故か嬉しくなり、つい笑みを作ってしまう。

「な、な、何、笑ってんのよ！ああ、もう！もう、いいわ！とにかく王都にしばらくはいるのね！？」

早口でまくしたてるシャルに俺は肯定の意を示す。

「じゃあ、アレよ！もう、遅いから寝るわ！お休み！」

ボタン！と音を立てて、部屋から出て行くシャルは、アイドルなんかより、まったくもって可愛かった。

「さて…どうなるかな。」

第二話 初めてのクエスト受注

宿から出ると、体を朝の寒さが襲う。世間一般では着込む程の気温だろう。

俺にとっては、全然我慢出来るぐらいなのだが…。

さて、何故俺が朝早くから外に出て来たのか。正直にいうと、何でもないただの散歩である。

俺は、欠伸をしながら朝の清々しさを一身に受ける。

そうやって歩いていると、俺はまだこの世界があの世界と違うモノだとは思えなかった。

異世界に来た…。

この世界に来てから、早二週間。俺は未だに自覚が持てずにいた。本当はこれは夢で、瞬き一回する間に、住み慣れたあの部屋のベッドに転移するんじゃないかとさえ思っている。

この事はまだシャルにも言っていない。信用していない訳ではないし、話したくない訳でもない。

ただ、踏み出せないのだ。これまでも話そうと思った事は何回かあった。

でも直前になると、喉が詰まり、全く別の話題を提示してしまう。

「どうしたもんかな……。」

俺は、空を仰ぐ。

「まあ、いいか……。その時がくれば自然に話せるはずだ。」

どんな存在かも分からないこの世界のお日様は、あの世界のより、一層眩しかった。

。
。
。

「うし！シャル！今日こそギルドに行つて来る！」

大和だ。何でこんな事宣言してんのかというと、俺はこの一週間、ずっと本を読んでいた。

図書館で借りた本をガンガン読みまくった。

この世界は文字が基本日本語であり、たまに外来語が出てくると言う、果てしなくルーズなモノだ。

てかもろ現代日本文化だ……。

だが、一応英語もあるらしい……。

今では使われならしいが。

まあ、そのおかげで本を読みまくれるのだから、感謝するべきだろう。

正直、英語なら全然良いが、全く知らない言語とかが出て来たら、諦めるつもりだった。

別に覚えようと思えば、覚えられるだろうが、それじゃ不自然すぎる。

旅人がいきなり、読み書きの勉強し始めたなんてなったら、いよいよシャルに怪しまれる。

まあ、もう充分怪しまれてると思うが。

そのおかげで、色々な事がわかった。国の歴史や、その他諸々。

それにしても色々な事に驚かされた。

まず魔法。

魔法については、どっかの神様に飲まれたメモ帳のおかげで、基礎知識は持っていたが、いざ、調べてみると本当に訳が分からなかった。

結論から言うと、“魔力”とはこの世界での未知のエネルギー粒子“魔素”の事を言う。

基本このエネルギーは魔素も総合されて魔力と呼ばれているらしい。

科学者共が揃って研究を投げる程の、本当に訳の分からん物質。

魔力についてわかつてる事。

それはとにかく魔法という、奇跡を使える事：。
種類がある事。人体に影響を及ぼす事がある事。濃度が存在する事。粒子を魔素と呼ぶ事：。

こんな未知の物質が日常的に使われているのは、ひとえに先人たちの言葉だろう。

未知であるがゆえに神秘とされた。
実際この魔力で悪も善もあつたのだ。

人は、いい事を重点的に考え、この力に頼る事にしたのでだろう。

魔法は人体や物体に眠る蓄積魔力と空气中に存在する純生魔力と
いったものを共鳴させる形で起こすらしい。

魔法には系統があり、基本的にはそれぞれ、火、水、氷、土、風、
雷に分かれる。
だが、高位の魔法となると、闇、光、幻、時、空といった属性もある。

そして魔法を使うのに、この上なく必要な
物。

それが精神力である。

今では根性や苦痛に耐える力として使われているが、元々は一点に集中し、氣力を高める力と言われていた。

この一点に集中するというのが魔法を使うのに、大切な事だという。

まあ、ひとえに取り合えず、魔法を発動したい、とかあれを燃やしたい、といった意思が必要という事。

あとは魔力の種類。さっきも言ったが、“蓄積魔力”と“純生魔力”。

こういったものの事をいうのだが、他にも種類はあるらしい。

シャルの魔力は多分そう言ったものだろう。

あと魔力薬に魔法具。

魔力についてはこんなものだ。

あとは精霊やら何やらが存在する事……。

特殊スキルと言った、魔法とは違う力を使える人たちの事。各国のパワーバランス…政治の仕組み……

一週間とにかく勉強？をやった。そのおかげで、随分この世界の事にも強くなったと思う。

「ギルド？何しにいくの？」

シャルが紅茶を飲みながら、質問をして来る。

「え…依頼だけど。」

「…ふん。でも何でわざわざあたしに言ったの？」

「…いや、なんとなくだけど…」

「なんとなく？……まあ、いいわ。それじゃあ、あたしも着いて行く事にする」

シャルが飲み終わったカップを置き、出口の方へ歩いて行く。

「え？ついてくんの？」

俺が質問をすると、足を止めたシャルはチラリとこちらを見ていった。

「暇なのよね…」

一言そう言つと、シャルは俺の部屋の扉を開け、何でもないふうに出ていった。

。 。 。

ガチャリ

一週間前に触ったのと同じノブを、俺は気合充分に開け放つ。

ドアについているのか、チリリン、と鈴の音が鳴り、耳に中々心

地よく響く。

「でもなあ、シャル。俺がギルドで依頼をこなそうと思ったのは、お前に金返すためなんだぜ？」

「ふん。そうなんだ。」

シャルは興味なさそうにクエストボードを見つめている。

「そうなんだ、って……はあ。まあいつか。」

俺がうなだれていると唐突にシャルが聞いてきた。

「そういえば、ヤマトはランクは？」

「ランク？俺のはDだけど？」

「クエスト受けるの初だっけ？…うん。じゃあ、難易度低いのか
らやらないといけないかも…」

「シャルはランクは何なんだ？」

「ん。一応B。」

「結構高いな…。」

何となく凹む。

「ああ、でもBランクに昇級すんのはあんまり難しくないわよ？
そもそも、ギルドなんかあんまり利用しないあたしがとれてるんだか

ら、ヤマトなら全然大丈夫。」

「うーん。そんなもんか？」

「そんなもんよ。」

俺たちはクエストを探す事にした。

昇級の方法。

それはそのランクの昇級クエストと言ったものがあるらしく、その依頼を達成する事で、ワンランク上がるといふ。

それが、クエスト外、集団クエストなどで強力な魔物を狩ったりしても上がるらしい。

依頼を達成したのち、ギルドで上げてもらうのではなく、勝手に上がるといふ、なんとも訳の分からないシステムだ。

あとは飛び級など…

「うーん。昇級依頼は確か一人じゃないと受けれないのよね…よし！じゃあ、これいっとく？」

シャルが選別してくれたクエスト。ランクBクエスト。

【ガルラの討伐】

ガルラとは鳥類型の魔物で風系統の魔法を使う、結構厄介なやつ

らしい。

なんでBランクかというと、おれはDだとしても、シャルはBであり、クエストを受けると集団クエスト扱いになるからだ。

集団クエストはメンバーで一人でもそのランクの人間がいれば、他の人は関係なくそのランクの依頼を受ける事が出来る。

「風の鳥ガルラか……いいぜ、狩ってやろーじゃねーか！」

俺は“討伐”という言葉に感化され、テンションはもう冒険者だ。

「なんか、気合入ってるとこ悪いけど、武器は？防具は？魔法薬とかは？」

沈黙が数秒続いた。

「……ひ、必要ないぜ！！」

「…そう？まあ、グリズリーを生身で倒せたんだから、心配ないかもね。」

ああ、そうだったな。

「…グリズリーと、ガルラではどっちが強いんだ？」

「ガルラの方が上ね。グリズリーは筋力とかをみれば危険だけど、魔法は使ってこないし。」

「なるほど、確かに魔法は強力だな…。」

うん。その点ではやっぱり防具とか付けた方がいいのかな…。

「まあ、ものは試しよ。Bランクだし、そんな無茶なのは出てこないはずだし。」

結構適当だな…

「…まあ、いつか。そうだな。とりあえず殺つてやるぜ!」

俺とシャルは依頼書をカウンターに持って行き、集団クエスト扱いで受注した。

【ガルラの討伐】

鳥類型魔物ガルラ一匹の討伐

ベンガルファйм王都西、ライル草原

報酬額：銀貨80枚

違約金無し

依頼主：ベンガルファйм王国ギルド

第三話 賢い鳥？（前書き）

感想などございましたら、よろしく願いますm（―）m

第三話 賢い鳥？

寒風の吹き荒れる草原を俺とシャルは並んで歩いていた。

「なあ。いつたいどこにいった？」

俺はシャルに問いかける。

何でかというと、いないのだ。もう二時間以上草原を歩き回っている。

「確かに…どこにもいないわね…」

シャルは首を傾げる。

「おいおい、対象の魔物が指定場所にいないなんてありえんのか？」

「……あり得る。けど全然ない事ね。うゝん、ガルラは鼻がいいからすぐ現れると思ったんだけど……」

と、シャルが頭を痛めていると草陰からガサガサと音がした。

出て来たのは、角を生やしたウサギだ。名前はホーンラビット。その俊敏性で攪乱しながら襲ってくるという、結構厄介な奴らしいのだが。

ガシ！

噛み付こうと俺に飛びかかって来た所を首根っこを掴んで捕獲す

る。

「フン！」

全身運動で体を回転させた勢いで、そのまま地面に思いっきり投げつける。

グシャ！と生々しい効果音が耳をつく。残骸は頭が潰れ、なかなか悲惨な絵面を演出している。

「これで6匹目か…まったく…目標探すのにこんな面倒くさいものなのか？」

そう、このウサギ野郎は6匹目だ。初めの方はもうちょっと面白味があったのだが、流石にこんだけ殺せば、飽きも回ってくる。

そういえばそうだ…。こいつらを殺しても罪悪感など欠片も感じなかった。

ガリバが何かしたのだろうか…。

まあ、この世界では殺しは結構一般的なのだろうから、ありがたいと思うべきだろう。

「うーん。依頼ミスかも……一回ギルドに戻ってみる？誰かに狩られたのかもしれないし…」

確かにこのまま探してたらきりがないだろう。

「そうだな…じゃあ一回戻ってみようぜ。」

俺は落胆しているのを自分で感じていた。
そうだ。あの世界で味わえなかった快樂…

複雑に動く生物を圧倒的な力で粉碎する。

俺…戦闘狂だったのか…

俺とシャルは来た道を戻る。道などないが…。

。 。 。

「ん？」

草原にそびえ立つ岩山。その近くを歩いている時…

「どうしたのヤマト？」

視力の上がつた俺の眼が捉えたのは、今正に探していた風の鳥獣
ガルラの顔だった。

「シャル…ガルラだ。岩山の所にいる…」

だが、不思議に思ったのは、好戦的だと聞いていたガルラの眼が、
まるでこちらを伺っている様な冷静な物だったからだ。

「え？……本当だ。それにしてもよく分かったわね…」

シャルが驚嘆したような声で言う。

「まあ、視力はあつちにいた時から悪くはなかったからな。つと来たか！」

ガルラが岩山の山頂からから羽を広げ、勢いよく下降してくる。ガルラは俺たちの前で速度を落とすと、ゆっくりと地面に着地した。

「キシヤアア！」

これがガルラか……。対峙しているだけで魔力の濃さが伺える。

俺はスイッチをかけると軽くファイティングポーズをとる。まるで根本から筋肉の質が変わった様な感覚。

「あれ？」

シャルが声を出す。

「どうした？」

俺は怪鳥を見据えたまま、シャルに問いかける。

「いや、これガルラじゃないっぽい……」

そして、たつぷり五秒間硬直した。

「へ？……ええと……じゃあこいつは何？」

正直俺からして見ればギルドで見せてもらった大怪鳥と瓜二つな

のだが…。

「いや…ガルラは…もっと小っちゃいはずなんだけど……」

「いや、こいつもそんなデカくはな……くないな……」

俺たちが対峙しているのは、全長20mぐらいの最早鳥の範疇に収まらないモノだった。

「それにこの色…通常は緑と黄色の筈なんだけど……」

確かに目の前のこいつは緑なんていう生易しい色じゃない…もっと毒々しい、色素の濃い紫色だ。

「でも違うつてんならこいつは何なんだ？こんな目立つような奴ならシャルなら知ってんじゃないの？」

俺は未だにこちらの様子を伺っているその鶏をでかくした様な不細工ヅラを睨みながら問う。

「いや…こんな奴は見た事ないわね…もしかしたら突然変異かも……」

シャルは腰に差していた剣を抜きながら一つの可能性を提示する。小さめの剣は魔法剣と言う物らしい。

「突然変異？まあ、どっちにしろギルドに首を持ち帰ればわかる事だろ？」

拳を打ち鳴らすと、乾いた音が響き、俺を戦闘モードに切り替える。

「そうね…なんか相手さんも敵意ビンビンだし。」

「ちょっとは楽しませてくれそうだぜ。」

俺がそう言うと、理解したのか鳥は大口を開け高らかな鳴き声を上げる。

「キィイオエエエエエ!!!」

それが戦いの合図になり、俺は地面を力一杯蹴った。

。 。 。

地面を蹴った勢いで素早く懷に突っ込むと、一撃で終わらしてやるうと拳を握るが、読んでいたのか、ガルラは意外に丈夫な尾羽を俺に打ち付けてくる。

意外に早い速度で叩かれた俺の体は、その力の流れに沿ったまま、空中に投げ出される。

「うお!？」

そしてその隙にガルラは魔法をたたきんで来る。

初級魔法『ウィンドカッター風の刃』だ。

空間を歪めながら幾つもの風の刃が飛来して来る。俺は体を捻り、

首を傾け、風刃を回避する。

だが、火や水などと違い姿の見えない風は完全に避ける事は叶わず、空中であつた事も関係して、俺の頬肉を引き裂いた。

頬の熱さを感じながら地面に着地した俺は僅かに息を吐いたあと言う。

「……あつつつぶねえー！」

頬に手を当てると浅くであるが、大きく切れているのが分かる。手に滴る血液が慣れない俺の鼓動を早める。

因みに魔物はどんな原理が分からないが基本、詠唱破棄らしい。出発前にシャルに聞いていたのだが、すっかり忘れていた。

「大丈夫 ！？」

シャルが心配してよって来る。

「大丈夫だ！来るな！」

戦闘状態を解いたシャルは俺の方を見て目を離さない。だがまだ戦いは終わってないのだ。

その隙を逃さずガルラもシャルに向かって魔法を放つ。

その魔法は俺の管轄内である風の中級魔法、『ウインド風の巨弾』。

「シャル！」

俺は横に佇んでいる大岩に指を埋め込むと、その勢いのまま、地面から引きずり出し、遠心力を利用して力一杯ぶん投げる。

岩は見事、シャルとガルラの間で飛んで行き魔法を阻止する事に成功したようだ。

俺は走ってシャルに近づくと肩を抱き、怪鳥と距離を取るため跳躍する。

「やつは魔法が厄介だな…一発で終わらず自信はあんだけど、こっちも一発もらったら終わりだからな…」

なんとかなんねーかな〜と考えてると不意にシャルが口を開いた。

「ありがとう、ヤマト……」

「ん？ああ、なんか言ったか？」

俺は怪鳥の起こす風音でシャルの声が聞き取れなかった。

「なんでもない……」

「え？」

「なんでもないって！」

「おお……そうか。」

俺は抱きかかえてたシャルを降ろすと、また鶏に向き直る。

「さっきの一発はデカいぜ……？この傷も合わせてな…千倍返しにしてやるよ。」

俺がそう言うと、挑発だと分かったのか、ガルラは突風を巻き上げてこちらを威嚇してくる。

（といつてもどうするか…拳じゃあ打ち込むのにも、リーチがたんねーし…うん…いや、そういやあれがあつたな…あゝでもな…
……）

俺はシャルをチラリと見ると、ゆつくりと口を開く。

「……シャル、援護頼めるか？」

「別にいいけど、何するつもり？普通に近づいても、また、魔法でスライスされるだけよ？」

ぐ、俺の黒歴を……

「まあ、普通に近づけばな。」

「何か策がある様ね…わかった。じゃあ、あたしは水の魔法で隙を作る事にするわ。」

頼んだと言い、俺は再度ダッシュする。スタート地点の地面が地割れを起こした様に亀裂を走らせたのが見えた。

俺は、鳥に近づき、距離を10m程に詰める。そして、軽くステップを踏むと、再度鶏に突っ込む。

甲高い声をあげて、風を巻き起こすガルラ。俺はそれをギリギリでよけ切り、高速で後ろに回り込む。

当然ガルラは俺を追い、後ろを向くと俺と対峙する。

そこで、シャルは既に詠唱を終わらしていたのだろう。

シャルの剣から魔法が、打ち出される。

水の中級魔法『アクアビーム水線』。

魔法は水の道筋を作りながら、ガルラの背中へと到達する。

だが、込めた魔力が少かったのか、すぐさま態勢を立て直し、今度はシャルに向き直る。

それを見計らって俺は今期初となる人外技の発動に掛かる。

『嘘の剣を』

その言葉を紡ぐと途端に俺からオーラのような物が浮き出る。

それは真っ白な煙のようで、現代風に言うと、ドライアイスの様な物だった。

ガルラもシャルも異変に気づいたのだろう。

通常魔法使いは魔力の探知をする事が出来る。当然魔物であるガルラも。

そして、驚いたのは俺の状態に対してだろう。

俺は今現在常に魔力を体から放出している状態だ。

これは単なる副作用だが。

俺が片腕を横に開くと、途端に手のひらに集まってくる感触。

そう、俺から出ている魔力のオーラが剣を形どっているのだ。創り上げられた剣は、オーラと同じく真っ白で構成された物だった。形は普通の両刃の西洋剣。

そうして、出来上がった剣を俺はガルラに向けて全力で投げ飛ばす。

スタイルは槍投げだ。

「キシヤアア！」

ガルラはすぐさま飛んで回避しようとしたが、間に合わなかった。剣はガルラの足を貫き、勢いそのままに飛んで行く。

剣が地面に刺さった事を確認すると俺は走ってその場所へと向かう。

すると…

「キ…サマ…イマノハイツタイ……」

鳥が喋っていた。舌つたらずな感じで。

.....
.....

「ヤマト！」

シャルが走って駆け寄ってくる。

「シャル……」

「ガルラは、仕留めたの？……まだ生きてるじゃない！？」

「あ、うん。そうなんだけど……」

「何？どうしたの？何か様子変よ？」

「いや、シャルさん……この世界の鳥って……喋るんですね……」

俺は空に浮かぶ雲を見ながら言う。

「は？？本当にどうしたの？鳥は喋らないわよ？てか頭打ったの？」

「いや、ちげーし！こいつが……！」

「はいはい、いいから、さっさとこの魔物仕留めて、医術師の所に行くわよ。」

シャルは剣を鞘に収めると、後ろを向き街への方に体を向ける。

「キサマ……サッキノシツモンニコタエンカ……！」

また、鳥が喋った……。

通訳すると『さっきの質問に答えんか……！』だな。

「何か凄い声がしたけど、ヤマト、あなた喉もやっちゃったの？」

シャルさん…気付いて下さい……

「いや、だからガルラが喋ったんだよ！」

「はあ、んな訳ないでしょ？いい、ドラゴンとかと違って魔物って言うのは知能が低いから基本喋れないの？バカな事ばかり言ってるな
いでさっさと行く「キサマ！ワレヲラブジヨクシタカ！」わ……
…よ。」

そして、沈黙する二人と一匹。通訳すると『貴様！我等を侮辱したか！？』だろう。

いつまでも続くと思われた沈黙劇場だったが、均衡を破ったのはシャルだった。

「何喋ってるのよ……殺すわよ……？」

怖っ！！何だあの眼……。多分思い通りに行かなかったからイラつ
いてる眼だ……。

「シャル…それはいくらなんでも「何……？」
何でもありません……」

俺が眼をそらすとシャルはごもつともな事を言う。

「てか、実際依頼で来たんだし、殺しに来たんだからさっさと殺しなさいよ……」

「……そうだな……悪いな……そういうわけだ。賢い哀れな大きい鳥よ……来世はインコにでも生まれ変わってくれ……」

俺はそう言っていると、もう一度、今度は五本の剣を空中に漂わせる様に浮かすと、剣先を鳥に向けて、一斉射撃をする。

「キヨ！？」

その後の描写は……いないだろ？

てか、キヨ！？って何だよ……。

依頼目的の魔物をたいした怪我もなく討伐出来たのに、俺とシャルは帰り道、何故か終始無言だった……。

第三話 賢い鳥？（後書き）

何かギャグな感じになりましたが、一応重要な事がこの話には組み込まれています。

第四話 魔法が使えない

あれから俺達はナイフでガルラの尾羽を切り取ると、ギルドにそれを持ち帰った。

普通は取れる素材は全部取り尽くし、それを道具にしたり武器の加工材にしたりするらしいが、いかんせん、あのガルラはデカすぎた。

そういった巨大討伐依頼の魔物は、目標を打ち倒した後、ギルドの調査隊やら何やらが回収に向かう。

「ねえ、ヤマト…そういうば、さっきのって結局何なの？魔法…ではないわよね？」

何の事を言ってるのかは俺には十分わかっていた。俺はギルドカウンターに肘をつくとき、「幻影の剣」の事について話し始める。

その前に、俺は上級魔法が使えない。

初級魔法はほぼ、全属性が何のつまづきもなく使用する事が出来た。因みに転移魔法は空属性の枠に入る。

だが、上級魔法を使おうとするとどうだ？まるで抑えられているかのように全く発生する気配がなかった。

魔法は得意不得意があるらしいが、俺は全属性の雑魚魔法を平均的に使えるが、強力でド派手な魔法は使えないという事だ。

俺は魔法が使えないが、蓄積魔力がないわけではない。むしろ、普通の人は及ばない程の量を有している。

だから、使えないのは多分特殊保有スキルのせいだろう。

この世界の人には本来スキルスロットという物があるらしい。

スキルスロットとはその名の通り、いくつかの才能を持てるか、という事だ。

俺は神様に与えられた能力のせいで、上級魔法などが使えないというふうに解釈した。

多分、上級魔法を使う才能が、3つの特殊保有スキルの場所取りで入らなかったんだろう。

そして、その上級魔法の才に匹敵する程の能力。

「幻影の剣だ：自分の魔力で剣を創り出す能力。」

そう、魔力で剣を構成する。

これだけ聞けば魔法のように聞こえる。

だが、これは魔法と違い、外の純生魔力を一切必要としない。

「聞いた事ないわね……」

「まあ、かなりズルい能力だ。なんたって詠唱が必要ないんだからな」

詠唱が必要ない。それは、初めてガルラに使った時。

『嘘の剣を』。俺もこれがこの能力を使うために必要な詠唱だと思

っていた。

だが、これはこの能力のインストールのような物らしい。今は皮膚の下を何かが、覆っている様な感じで、出そうと思えば何時でもあのオーラを出せる気がしている。

本来は気づかれず、相手を殺害するための暗殺能力らしい。

何時どこでも自由に刃物を出せるのだからかなり物騒なものだ。

「詠唱が必要ない…？じゃあ魔力が必要ないって事？」

「いや、自分の蓄積魔力だけを使う能力だ。一応は消費する。」

「ふーん、それにしてもかなり強力だったわね…」

「まあな…」

俺はシャルに引かれる事を恐れたのだが、なんら心配はなかった様だ。

「えー、ガルラの討伐ですが…とりあえず、報酬の銀貨八十枚です。」

ギルドの受け付け嬢が、袋を背負って持ってくる。その袋は集団討伐だったからだろう。

律儀に二袋に仕分けされていた。

それを俺とシャルは一つずつ受け取る。

「引き続き、ギルドをよろしく願います。」

俺とシャルは決まり文句を聞くと、ギルドを出た。

。 。 。

俺はシャルに借りてた銀貨を三十枚返すと直ぐに部屋に帰ってベッドに横になる。

(ふゝ)

眼を閉じると浮かんでくる戦闘シーン。

俺は高鳴る心臓の鼓動を子守唄に、浅い眠りへと没頭する。

。 。 。

「ギルドマスター…やはり…」

ギルド、ベンガルファйм王都支部。

一人の女と一人の老人が深刻な顔で話している。

老人の名はラッサム。ベンガルファйм国ギルドのギルドマスターである。

「ああ、恐れていた自体が起こった……あのガルラこそが、その証拠…。」

「それでは早く対策を練らねばいけないのでは？」

「いや、無駄だ…これは運命なのだ…人が簡単に覆せるものではない…」

「ギルドマスター……」

「だが……何時だって…神は破壊を望まない…」あれ”が現れるならば同時に、対極の者も現れる。そう英雄は現れる…。」

ギルドマスターは願う様に眼を閉じた。

第五話 神々の対談

真っ白な空間に浮かぶようにある長机。

長机の脚は白のこの世界では地面についているか判断する事は出来ない。

その長机に座るのは四人の男女。

その中でも一位、二位を争う程姿勢が良いのは目つきの鋭い最高神ガリバだ。

「結局、またこの時が来ちつたなあ？」

ヘラヘラしながら言う痩身の男は、死神と呼ばれる魂を操る神、タナトスだ。傍にはその細身からは持ち上げる事も叶いそうにない程の、巨大な刃を持った鎌。

「ああ…」

素っ気なく返すのはガリバがこの男をあまりよく思っていない事に関係している。

「はあ…憂鬱です…なんであたしがこんな…」

高いソプラノボイスで喋り始めたのは天使長、リビオン。

「嫌ならやんなけりゃいいじゃん？それに、少なくとも墮天使共にソウルアロー撃つだけよりは、やり甲斐があると思うけど？」

挑発的な声色で言うのは、自由を司る神、ガーナ。

「な…！？それを言うならガーナさんこそ、いつつも仕事が面倒だ、
ってばやいてるじゃないですか！」

「言っていないわよ！変な言いがかりつけないでくんない！？」

女共は二人でぎゃあぎゃあと言い争いをし始める。それを終わらせる
気もなく続けていると、業を煮やしたのか、ガリバが行動を起こ
す。

ダン！と長机が細かな振動を伝える。

「言い争いは他所でやれ。…それにここに集まったのは理由がある
だろう？」

ガリバが言くと、静まり返る二人。

「んな事言ってもよお。対策なんてうちようがねーぜ？なんせ、魔
の变革はもう起き始めてんだからな。」

ニシシと笑う死神。

「え！？…それってもしかなくてもやばくないですか！？」

天使長は羽をパタパタさせながら焦りを表現する。

「心配するな…とつくのとうに対策は練ってる…」

「前も対策って言って世界一つ消えてなくなっちゃったけどね。」
ガーナは机に肘を置くとガリバに向けて言う。

「おいおい、流石にガンマインが消えたらやべーだろお？今でもギリギリなんだ…主力が無くなっちまったら俺らも消えるぜ？」

ご自慢の鎌をスリスリ撫でながら大した緊張感もなく言い放つ。

「大丈夫だ……ヤマトの方には“ガブリエル”を寄生させた。」

この瞬間、その場の雰囲気が変わる。

「ハハ、マジかあ？てかあのなり損ないにそんなのブチ込んでも暴走するだけだと思うけどなあ。」

「そうよ……てかあの子は何にも知らないんでしょ？…皮肉な物ね…

…」

「まあ、ガリバさんが大丈夫って言うなら大丈夫なんじゃないですか？そもそも私は神じゃないので、世界が滅びようが関係ありません……まあ、でもヤマト君には気の毒…としか言いようがありませんね……」

三人が三人の意見を述べる。それを眼を閉じて聞いていたガリバはリビオンが話終わるのを聞いてから、ゆっくり椅子から立ち上がった。

「心配は無用だ…俺も出来る限りの手助けはするつもりだし……解散だ…リビオン、報告書を頼んだ。」

そう言うと、ガリバは手を振り扉を出す。

ドアを掴むとためらいも無くガリバは闇の中へと消えて行った。

第六話 装備購入！（前書き）

感想や、指摘などがありましたらお願いしますm（
—
）
m

第六話 装備購入！

「ふん！」

俺は灰色の毛を持つ猛獣に右ストレートをかます。

今回の討伐依頼、シルバーウルフの一匹は眉間を殴られた衝撃で長距離をぶっ飛んで行った。

残りの三匹は、仲間がやられた事に気づきすぐさま連携を取ろうとする。

だが、俺は手を掲げると幻影の剣を三本召喚する。

それを一匹に突き刺し、その剣の柄を持ち地面に叩きつける。

無色の剣に血がこびりつき、刀身が真っ赤に染まる。

仲間が次々やられて行く事に恐れを抱いたのか、残りの二匹は逃亡を図る。

だが、背中を向けたのは間違いだ。

空中に浮遊させている剣を二匹の背中に突撃させる。

二匹は走り出そうとしていたからか、背中への衝撃で壮大にコケる。

俺はそれにゆっくりと近づくと持っていた幻影剣で二匹を上からブスブスと突き刺す。

勢いよく血が噴出し緑の地面も真っ赤に染まる。

俺はしゃがむと、4匹の解体に取り掛かる。

シルバーウルフの解体部位は牙と耳。

幻影剣（極小）を取り出し、次々とちぎっていく。

「ふう」

疲れた……

この幻影の剣。

便利だが、逆にかなりハイペースで使ってしまうから魔力の消費が激しい。

魔力の扱いにそんなに慣れてない俺にはこの、魔力酔い、と呼ばれる疲れとダルさと気持ち悪さの三連コンボがかなり苦手だった。

「…帰るか…」

俺はシルバーウルフの部位を入れた袋を担ぐとゆっくりと歩き出す。

転移魔法を使えば一瞬なのだが、流石にそんな気にはなれない。

。 。 。

王都の門をくぐり、宿に戻る道の途中。

俺はある店を見つける為に視線を泳がしていた。

少し進んだ所で、諦め、果物を売っている店の店主に尋ねる事にする。

「すみません。”武器屋”って何処にあるか知りません？」

俺が声をかけると、それまで木箱に入っている果物を取り出してい

た親父さんが振り向く。

「兄ちゃん冒険者か？」

「はい。まだ新米ですけど。」

「ほう…珍しいな…」

親父さんは驚嘆した様に俺の眼を見る。

「どういう意味ですか？」

「どうもこれもそのまんまだよ。冒険者っつーのはプライドのたけー奴らばっかだからな。それに兄ちゃん、まだ16ぐらいだろ？」

親父さんが言うには冒険者はあまり人に頼らない性分の奴らが多いらしい。それと、俺の若さも関係したのだろう。

「それで、何処かいいお店ないでしょうか？」

「おう、普通の奴らは知らねーがな。この店の横に細い道があんだけどよ。そこをずっと行って突き当たりを右にまた、ずっと行くとあるぜ。」

「へえ、ありがとうございます。それと…その果物、一個買っていますか？」

俺が言うと、親父さんはそれを一個放り投げてくる。

「代金はいらねー。持って行きな。」

そう言い、親父さんは人の良い笑みを浮かべる。

「ありがとうございます。じゃ！」

礼を言い、店の外に出ると、親父さんの言っていた細道に入る。
道は薄暗かったが、まだ昼間だからだろうか、明かりには困らなかった。

。
。
。

俺は武器や防具などを買う為に”シルバーウルフ”や”岩トカゲ”などをひたすら屠りまくった。

そのおかげで、今の残金は金貨三枚に銀貨五十枚だ。

なかなか美味しいぐらいの一食で銅貨二十五枚と考えればかなりの金額と言えるだろう。

武器や防具を買いたいと思ったのは、やはり幻影剣だけでは頼ってられないということ。

あれは魔力で作られているから、魔力抵抗の強い個体や魔法を消してしまう個体には通用しない。

ていうか一気に絶対絶命の状況になる。

当分は冒険者ギルドで稼ごうと思っている。

だからこそ自分の命を預けられる剣や防具が欲しかったのだ。

防具の面ではガルラの時に思い知った。

俺は言われていた通りの道を進んで行き、遂に念願の武器屋に着いた。

ドアを開け、中にはいると金属の匂いが鼻に届く。

「いらつしゃい…。つてガキじゃねーか…」

カウンターで剣を手入れしているのは、バンダナを巻いた30ぐらいの男だった。

「すみません。一応冒険者なんです。」

俺がそう言つと、男は一瞬訝しげな眼をしたが、すぐに口を開く。

「で？誰の紹介だ？」

「紹介？」

「ああ、ここは一応紹介制だからな。」

これはあの人の事を言うのだろうか。

「果物屋の店主に…」

「果物屋の店主？…ああ、グラウの事か。分かった。で？何を探しに来たんだよ。」

「武器と防具を。」

「あん？そりや当たり前だろ？てかうちには武器と防具しかねーぞ

？」

いちいちムカつくヤローだ……。俺はイラっとした頭を直ぐ様クールダウンさせる。

「すみません。じゃあ武器って何がありますか？」

「ああ、剣だろうが、ムチだろうが、槍だろうがあるぜ？そこに適当に置いてあるから勝手に探せ。」

適当な店主の答えを聞いて、俺は店主の指差したら辺を探す。

デカイ樽に詰め込まれた武器の数々。

適当に引つ張り出してみると、剣だったり、モーニングスターだったり様々だ。

でもどれも俺にはしっくりこなかった。

あまりにもだったからだろうか、つい、口をついて出た言葉。

「微妙だな……」

「あ？」

そりゃきれんのも当たり前か〜と思っていたらその後の言葉は俺の予想の斜め下をいく言葉だった。

「お前、その武器共微妙つつつたか？」

「あゝ、まあ、はい」

「ちょっと来い。」

男はそう言つと他の部屋へとつながるドアを開けて入る事を促す。

そしてその部屋にあつたのは。

カウンターのある部屋を超えたかなりの量の武器だった。

「いや、最近の冒険者はクズばかりだと思つていたら、ちゃんと武器を見分けられる奴もいるとはな。」

「???」

顔に疑問を貼り付けていると、店の店主が悪い悪いと言つてヘラヘラ笑う。

「お前さんが言つた通り、あっちの武器はそう、微妙なんだよ。この店はこっちが本店なんだ。あっちは武器の価値も分からねー奴らのもんだ。実際他の店にも売ってるもんばかりだしな。お前さんは中々力持つてそうだし。こっちの武器を譲つてやるよ。」

え、男が言うには、自分が認めた奴にしか武器は売らないらしいです。

まあ、そんな事はどうでもよく、俺は新しい部屋の武器を漁る。

こっちは、樽に押し込まれてたりはせず、きちんとガラスケースの様な物に入っていたり、壁に掛けてあつたりと大事に扱われている。

一つずつ見ていき、最後の方に差し掛かった時、途轍も無く俺の心を驚掴みにする武器があつた。

「親父さん……これは？」

俺は一つの刃物を指差しながら言う。

「ああ？それか。そりゃ刀つつーもんだ。殆どの奴らは地味だつつて目もくれないんだけどな。かなりの業物だぜ。」

刀………超かっけー！！

てか何でこの世界に刀があんだよ！

中世ヨーロッパだぞ！？刀は平安時代末期からだぞ！？

いや、関係ねーか！？

取り合えず欲しい！欲しすぎる！！

「店長！！」

俺は俯き、声を張り上げる。

「何だよ？うるせーな。」

うるさくもなるだろ！現代の若者の憧れが今目の前にあるんだぞ！？

「この刀は何円ですか！？」

俺が言うと、眼を見開き少し考える店主。

「お前……これ買うのか？」

「勿論です。」

「言つとくが…今までこれを買った奴はみんな体の何処かを欠損してる…口々にこう言つてたぜ。この剣は呪われてるってな…」

何だ、そりゃ？いわくつきって事か？

……

いや、買うだろ…でも呪いつて…。

「因みに何円なんですか？」

値段を聞かない事には何も始まらない。

「金貨二枚でどうだ？」

金貨二枚……え？かなり高いジャン？

でも、日本刀は芸術品って言うぐらいだから……。

「…買います…高くても呪いがあっても手に入れない訳にはいきません…」

「そうか…なんか訳ありっぽいな…ちっ！やっぱ、金貨一枚でいいよ！刃こぼれでも何でもうちに持ってたきな。手入れはしてやる。」

「ありがとうございます。」

そして俺は人生初の武器を手に入れた…。

頭の中でファンファーレが鳴ったような気がするが気のせいだろ。

「で？防具はどうすんだ？」

店主が刀を布にくるみながら言う。

「機動力が高いのが良いんですけど。金貨二枚で買えるのはいですか？」

「ああ、じゃあこつちだな。この棚にあるのがオススメだ。」

見渡すと、金色の防具やなんかトゲトゲした防具やら色々あった。

うーん。

お？

「あの、これは？」

俺が指差したのはなんか無骨な感じのシューズだ。

「それか？…また、マイナーなの選んだな。そりゃエアリアルシューズ（AS）だ。履いて魔力を流す事で、空を蹴る事が出来る様になる。つとまあ、かなりの低人気だ。扱いが難しいらしい。」

「へえ。」

「だが、普通の防具としても使えるぞ？少々値は張るがな。」

店主は武器の並びを直しながら手で金のマークを示す。

（うーん。空を蹴るってどういう意味だ？）

俺は想像する。

まあ、でも戦いの幅は広がるな…。

「じゃあ、これも下さい。」

「おう」

そして俺はASを買った後、手甲に魔力抵抗のある手袋と胴当てにジャケットを買った。

因みに全部黒と銀で統一されている。

「そんな目立たなくても、損傷したら持って来いよ？じゃあな。」

俺は無愛想に手を振る店主を見ると、ハイと返事をし、店を出た。意外に悪い人ではないようだ。

（それにしてもいわくつきの刀ってどういう意味だ？…なんか物凄いテンプレ臭がするな……）

俺は布にくるまれた”憧れの武器”を見ながら一人、首を傾げていた。

第六話 装備購入！（後書き）

ASっつーのが”アレ”のパクリじゃね？って思った人は、きっと
気のせいです。エア アじゃないです。（ー×ー）

第七話 パープルワイバーン

俺は次の日、買った武器や防具などをつけて早速依頼に向かった。クエストボードを見ると、心なしかいつもより依頼の数が多い気がした。

何か、手頃なのはないかと探していると、Bランクにしては珍しい、ワイバーンの討伐があった。俺は依頼書を掴むとカウンターにそれを持って行く。

あつ。因みにシャルは少し気分が悪いとかで、昨日から顔を合わせ
ていない。

依頼が終わったら、何か買ってお見舞いに行くつもりだ。

。 。 。

俺は今道具を入れたポーチを腰に携え、ワイバーンの出没場所を
目指している。

ワイバーンがいるのは、ガルラを始めに見つけた岩山を超えた先
のジャングルらしい。

俺はため息を吐きながら黙々と草原を歩いて行く。

今回は道を知っていただけに一時間程で着いたが、岩山を見た途端に座り込みたくなって来る。

かなりの高さだ。

頂上では1000mは楽々越すだろう。

岩山の端まで行くより突っ切ってった方が速いと考え、肉体強化をかける。

フっ、と体が軽くなりこれまでのダルさが吹き飛ぶ。

俺は跳躍し、岩山の段差に脚をかけると岩を崩しながら幾度も跳躍する。

かなりハイペースで岩登りしたからだろうが、岩山は6分で超える事が出来た。

………

岩山まで強化して走ってくればよかったと、今になって切実に思った。

その後、大した問題も無くワイバーンが発見されたという密林に到着した。まず俺は武器となる刀を布包から出し、腰の剣帯に鞘ごと収める。その時手甲と刀がぶつかり、キン、という金属音が発生する。

俺は思わずにやけてしまった。

そして、俺は少し……ほんの少し……刀を鞘から出してみた。シャラン、というとてもかっこいい音が鳴り、俺が今掴んでるのは

刀なんだな」と感慨に耽る。

そして、刀を鞘に収めると、次に俺はASに魔力を込めてみることに。

幻影の剣と同じ容量で、魔力を靴に注ぐ。

だが、いっこうに変化が訪れる気がせず、俺は少し強めに魔力を込めることにした。

途端に無骨な靴が、キュルルと音を立てた。これでOKなんだろうか？俺は蹴りを繰り返してみる。

フォン、という音がするだけで、何も分からない。

??

俺は次は大ジャンプで空中に飛び上がろうとする。

地面を思いっきり蹴り、空へと飛び上がる。

そして俺は、蹴りを繰り返す。

薙ぐような蹴りではなく、ケンカキックのような脚をピンと伸ばすような蹴りだ。

その瞬間、トン！という床を蹴ったような音が鳴り、俺の体が空中で横にスライドする。

（は？）

もう一回、次は遠い地面に向かってキック。

また、妙な感覚といっしょに少量の煙を出しながら、今度はさらに空中へと飛び上がる。

（なるほど！こういう感じが！）

俺は、ちょっと出来たことが嬉しく思い、ドラゴンを忘れ空中で幾度も蹴りをはなった。かなりの爽快感だ。

調子に乗りすぎて、態勢を崩し、地面に落下したのは忘れたい黒歴になった……。

俺はASの使用法を少し習得し、ワイバーンの討伐に取り掛かることに。

密林に飛び込むと、ジメジメした嫌な空気を体全体に感じた。

だが探してもあまり見つからない。まだ2、3分しか探してないが、ガルラの時の様にめんどくさい感じになるのではないかと、嫌な考えが頭を過ぎった。

密林を進み、一層樹が生い茂っている所に出た時だ。そこで何かの気配を感じた。

俺は下位だろうと、ドラゴンはドラゴンと、気を配りながら探索をしていたのでそのどでかい魔力と重圧は勘違いしようのない物だった。俺は耳を済ませながら、音源を探る。

ドスンドスンと重量級にしか出せない豪快な音を立てている。

ワイバーンだろう。俺はギルドで見た赤色の竜を狩りに、密林を進んで行く。

次第に開けてくる密林に、俺の緊張感も高まってくる。

そして、俺は見た。

紫色のドラゴンを。

.....

（おい、お前赤色じゃねーのか？）

俺は大木の陰でそんな事を思った。

少々出鼻を挫かれた感があるのは否めないが、それでも気を取り直して、俺は息を潜めたまま、奇襲の隙を伺う。

どうせなら刀でケリをつけたいと思い、鞘から刀をゆっくりと抜く事にする。

そこで俺はある事に気づく。

さっきは少し抜いただけだったが、全容を見てみるとどうだ？

途轍もない美しさだ。

刀身の輝きもそうだが、その波紋。

俺はワイバーンの事も忘れ、その刀に魅入っていた。

。 。 。

（ん？）

俺は刀から目線を外すと、何時の間にか、ワイバーンを見失って

いた事に気づく。

何故かククラとする頭を抑えながら俺は降ろしていた腰を上げる。

ヤバイな、と思い音を立てない様開けた所を見るが、やはりない。

俺は振り返り、再度ワイバーンを探そうとしたのだが、どうやらその必要はなかったらしい。

振り返ったその目の前に…探そうとしていた紫色のドラゴンがいたのだから……。

何故気づかなかったのかは分からないが、俺が気づくまで待っていてくれたらしい。

優しい奴だ。

……
って、

そうじゃねえええ!!

俺は肉体強化を瞬時にかけると、距離を取るため後ろに跳躍する。

「お前……いつからいやがった……?」

……
……

俺は本当に何をしているのだろうか？

自分の言葉に訳の分からなさを感じる。

「貴様が刀を見始めた時からだ。」

.....

.....

今こいつ.....

「お前喋れんのか？」

「今の我には知性が宿っている。.....それより貴様はギルドの冒険者と見て間違いないな？」

「ああ。」

その瞬間、ドラゴンが豪快に火を吹いた。

「うおー！」

メラメラと燃え盛る密林の一带。肌に伝わる温度がその炎の獰猛さを伺わせる。

何とか転がりながら避けたが、ヤバイ。かなり熱い…。

「てめえ、コラー！！話してる最中にブレス吐いてんじゃねー！！」

俺がドラゴンの横から言うと、ドラゴンは少し、顔を傾けて、言った。

「貴様は我を殺しに来たのだろうか？何かを話す意味はないと思うが？」

そりゃごもつとものです。

「まあ、確かにお前の考えは間違ってる。油断していた俺が悪かったな。」

「ふん。だが、我も少し人間とは語りた事がある。しょうがない。」

どっちだよ、コラ？

「不意打ちはやめろよ？」

「貴様もな？」

俺は刀を鞘に収めると、口を開く。

「まず、お前はワイバーンで合ってるのか？」

俺が言うと、ワイバーン（仮）は少し口から煙を出しながら言う。

「貴様は狩る敵の容姿も調べんのか？」

って事はこいつはワイバーンで合ってる筈だ。

「調べたわ……てか、お前が大人しく赤色だったら俺も間違っ事はなかったんだよ。」

少し怒気をはらんだ声で言う。

「今の我は種族で言えばワイバーンだが、ワイバーンではない。ワイバーンよりも上位の生体と成っている。」

どういう意味だ？ワイバーンだけどワイバーンじゃない？じゃあお前何だよ？

「じゃあお前何でここにいの？帰れば？」

俺が言うと、フンと口を鳴らしてワイバーンは言った。

「帰れ、とはまた上からだな。一応我は魔物で、貴様は冒険者だ。顔を合わせたら、牙をぶつけ合う他なかるう？」

俺は思った。

厚意で言っただけの物。やはり、こいつの事が少しわかった。俺と、戦いたがってる。

まあ、実を言うと俺もだが…。先程見た威力ではこいつは、他の雑魚モンスターとは格が違う。あのガルラより、大幅に強い筈だ。

「じゃあ話は終わりだな…ギルドの依頼は猛り狂ったバカドラゴンの首を差し出せ、との事だったが、まあ、屍にすりやどっちも同じだろ？」

ワイバーンは少し笑った後、言った。

「猛り狂ったバカドラゴンか……ふ、あながち間違いではない。」

その言葉を聞いた後、俺は瞬時に刀を抜くと、猛然と走り出した。

。 。 。

ギンギン！！

高低の金属音が密林に木霊する。俺は刀をワイバーンの体に無数に叩き込む。

だが、ワイバーンの体は鋼鉄の鱗で守られており、それなりに力強く打ち込んでいるのにその刃を通さない。だが、全くと言う訳ではない。少しずつだが、鱗が剥がれ落ちていく。

全力で切ろうとすると、どうも隙が出来、その隙に鋭い爪で引き裂かれそうになる。

俺は襲いかかって来た牙の軌道を、刃で逸らすと、後ろに大きく跳躍した。

確かに…刀では届かない。使ってみてわかったが、やはり扱いが難しい。唯一攻撃をヒットさせられそうなのは、その大きな頭なのだが、刀は脳天に届く前にブレスを吐かれる。

幻影の剣も隙あらば叩き込んでいるのだが、体を振動させる事で、その鱗を盾にして剣を弾いている。

刃物ではない拳を叩き込めば、少しは戦況が変わるかもしれない

が、それはプライド的なアレが許さない。

どうする……どうやったら……あの首を叩き落とせる……

そう考えていた時だ……右手に違和感を感じた。その手は今現在刀を握っている方の手だ。

何故か、刀身に強く視線を惹きつけられる。体が思うように動かない……。

「ふ……諦めたか……!」

ワイバーンはそう叫ぶと超高密度の火炎を吹く。

不思議とヤバイ感じはしなかった。

ただ頭にあるのは”これ”を使えばあの炎は全く俺の身には届かないという事。

俺は眼を閉じると、刀を思い切り横に一閃した。

そして、眼を開けると、ブレスは少しも俺の体を焦がしていなかった。

その代わりに見えたのは、驚愕を貼りつけたワイバーンの顔。

「驚いたな……力だけかと思っていたが……剣術も達人級か……?」

俺は刀の柄をさっきより、断然強い力で握るとワイバーンに向かって斬りかかる。

高速で飛び上がり、上段から思い切り、一刀両断するよう振り下ろす。

「ム！？」

狙いは少しズレ、ワイバーンの左目を深く切り裂いた。

「グウオオオオ！！」

尻尾で薙ぎ払ってくるが、刀の柄と刀身の真ん中を押さえる事で防御する。

途轍もない圧力を感じたが、刀は折れる事がなかった。今まで目を奪われる程美しかった刀身は、血を浴びたことで、破滅的な美を宿した。

「ふん…我に傷をつけたのは貴様が初めてだ……少し悔っていたか。」

俺は刀を構える。

沈黙が場を支配した。両者が一気に間合いを詰めようとした所で、ワイバーンが言う。

「済まないな。貴様の体を食らいつくしてやりたいところだが……我はもう時間だ。」

翼を大きく広げるワイバーン。

「時間ってなんだよ……？雌と逢引でもするつもりか？」

「貴様とはまた今度決着をつけよう。その時は、我も死力を尽くして戦うだろうからな。」

大きく羽音を立てると、ワイバーンは血を垂らしながら遥上空へと消えていった。

「何なんだよ……。」

俺の頭には戦闘を終了させる事の出来なかった、不完全燃焼感が漂っていた。

それを無理やり頭から追い出すと、俺は手に収まる刀を見つめる。

あの時、一瞬だが、この刀について分かった気がした。その場で、銘を調べる為に刀を解体する。

美しき鉄に刻まれてあったのは……

……村正、の二文字だった。

第八話 笑えない…

妖刀村正。

村正は、伊勢国桑名（現在の三重県桑名市）で活躍した刀工の名だ。または、その作になる日本刀の名。同銘で数代あるとみられる。別称、千子村正……。

まさか、そんなにたいそうな物とは思わなかった。

徳川には妖刀と畏怖された、呪物であつたが、本来は他と一線を引いた名刀の中の名刀だ。

刀について興味をもった時に、刀剣博物館に村正を見に行った事もある。備前長船や正宗、虎鉄の造形も素晴らしかったが、やはり村正は他とは違う魅力を放っていた。

だが、考えてみると、この刀はおかしな物だ。村正の特徴は元来、不規則な波紋である。だが、この刀の波紋はおかしい。規則性のあるうねり方をしているのだ。

（うーん？）

俺はまあいいか、と考えると立ち上がり、ギルドへ報告する為に重い足を上げた。

。 。 。

「ああ、クソ……」

そんな呟きが自然と口から漏れ出していた。理由は至極簡単。あの、ワイバーンが逃げたせいで、討伐依頼の違約金を払わされる事になってしまったからである。

「次会ったらか……。」

俺の耳にワイバーンの声が響いたようだった。

「お。」

俺は、果物店を見つけた。あるのはリンゴやミカンという日本と変わらない物だった。

俺はやっぱお見舞いは果物だよな、と考えると籠にヒョイヒョイと色鮮やかに果物を入れていく。

店主に銀貨を渡すと、果物の入ったバスケットを肩に背負った。

。 。 。

現在シャルの部屋の前だ。

コンコン

………… ドアを規則的にたたくが返事が無い……

「シャル？」

ドア越しに話しかけるが、依然部屋の中は沈黙が支配している。

俺は、入るぞ？と声をかけると控えめにドアを開いた。

中は想像していた通りに俺が借りている部屋と同じだった。綺麗なタイルのような物が床を形作っており、大きめのベッドや、陣魔法のかけられた冷蔵庫のような物に、大きめの棚が鎮座している。

シャルはベッドに横になっていたようで、布団の端から、シャルの綺麗な水色の髪が見えていた。

「大丈夫か…？普通の食いもんはキツイだろうから果物買ってきてやったぜ？」

バスケットを掲げるが、反応を示さない。布団にくるまったまま
で、顔が見えない。

「どうしたんだよ…？」

俺は心配になり、シャルに近づく。

大きめの布団に手をかけ、ゆっくりとどかしてみた。

「シャル……！？」

シャルは顔を紅潮させており、息は荒く、苦しそうに呻いていた。

「どうしたんだよ。おい！シャル！？」

肩を揺ると、シャルは少し薄目を開けて、呟く様に言った。

「ヤマ…ト…？」

額に手を置くと、凄い高熱だという事がわかる。

「クソ…！」

俺はすぐさま、宿を飛び出し、医院に向かった。

。 。 。

「シャルはどうですか？」

部屋の外で待っていた俺の前に現れた医者に尋ねる。

「すみません……あの病状は私の知識には無いのです……」

一瞬、は？と思った。

「た、唯の熱ではないんですね…？」

俺が聞くと、一拍おいて、初老の医者が話し始める。

「あんな病状は初めて見ましたが、原理は分かりました…。仮説ですが、彼女の中の特別な蓄積魔力が彼女の体に悪影響を及ぼしてい

ると見て、間違いないでしょう。」

「シャルは…どうなるんですか…？」

俺は躊躇しながらもそれを聞いた…。

「正直このままでは…命が危険です…ですが…」

「何か方法があるんですか…？」

初老の医者はあご髭を触りながら、はっきりと言った。

「もしも…ポアリアの葉があれば…治す事は可能でしょう…。」

ポアリアの葉…俺がこの世界の事について調べている時に、偶然手にとった資料に乗っていた最高級の薬草だ…。

ポアリアという植物型の魔物の、後頭部に稀に生えている事があるという希少なアイテム。

「それで…シャルは…あと、どれくらい…」

「治療時間も加えるとあと四日が限界でしょう…」

医者はキツパリと言った…。こうやって医者は憎まれていくんだろつな、と目の前の人の職業に哀れな感情を抱いた。

「先生…医院で、シャルの事お願いできますか？」

俺が言うと、少しも考える素振りを見せずにハイ、と力強い声で

言った。

「絶対に……ポアリアの葉を……採ってきます……!!」

俺は駆け足で、宿を出ていく。

。 。 。

ギルドに着くと、資料の中でポアリアを探す。そうすると、植物型モンスターの資料の3P目にそれはあった。

ベンガルファイムの密林に多く生息する肉食植物。甘い匂いを発生させる花を頭頂部につけており、それで獲物を頭上におびき寄せて食す。だが、密林を歩き回っている個体もいる。レア：出現アイテムはポアリアリーフ、別名ポアリアの葉。

俺は手続きを済ますと、高速でギルドを飛び出し、街の外を目指す。

第九話 ブラッドトルネード

今現在、俺はワイバーンと戦闘を行った密林を走り回っている。

（全然いねえだと……！？クソ！！）

木を蹴って登り、ASを使い、空中を走ったりしながら、ポアリアを探す。

ふと、視界の端に桃色の大きな花が見えた。ピュアローズと呼ばれる花だ。甘味のある匂いを漂わせる花。

「見つけたぜ……。」

本日三匹目のポアリアだ。この密林に着いてから、約六時間が経過しており、六時間に三匹と見ると、かなりの少なさだという事がわかる。

因みにポアリアというのは、常時、後頭部を緑の膜が覆っており、葉がついているか調べるには、膜を切り裂くか、殺して確認するか手段はない。

地面に降り立つと、身体強化の恩恵を受けた状態で、カ一杯石ころを放り投げる。

石が地面に到達すると、派手な砂煙を上げて地面に小さなクレーターが出現した。それと同時に、甲高い鳴き声を上げて、怪物が土中から姿を表す。

「てめえが本日三匹目だ……。」

足を前後に大きく開いて、刀を鞘から流れる様に抜き出す。

「死ね……」

。 。 。

「ハアハア……ウオアアア!!」

顔面に大開の口が何個も存在するポアリア。その脇腹を力一杯切り裂く。

か細い鳴き声を発しながら前のめりに倒れるポアリア。その後頭部を容赦なく、引き裂く。

「ハズレか……！ちくしょう！」

今は密林に来て二日目だ。始めに足を踏み入れてから今まで、約五十匹を殺して回った。密林は俺が見る限りではとてつも無く広大で、歩いたならば二週間かかってようやく横断できる広さだ。

ポアリアの亡骸を踏みしめて、俺はまた走り出した。

あと二日……。

その言葉が、俺の寝ずに働かせている脳みそを覚醒させる。その今ではありがたい意識が、飛びそうになる意識を、しっかりと掴んで離さない。

「う……」

目を感じた事のない激痛が走る。村正の刀身を見たからだ。あの店主の言っていた言葉。

『所有者が体の一部を欠損している。』

この意味がようやくわかった。多分この刀は、所有者に力を与える代わりに、見返りとして血を差し出せ。という名目で武器として成り立っている。そのせいか、この刀は流れ出た、敵と俺の血液を吸って刀身を再生させている。

ズキズキと、唸りを上げる首から上の激痛を無理矢理忘れる様に刀身を鞘に収める。

目の痛みが僅かに引くのを確認すると、俺はまた走り出した。

。 。 。

三日目だ……。もう何匹殺したか覚えていない……

これ程殺しても……ポアリアの葉は俺の前に姿を表す事がなかった……。

目の前の植物の、何もない後頭部の膜下が、無慈悲に俺の心を痛めつける。

それでも俺は探した。それこそ満身創痍になった体を無理矢理引きずって。

フラフラとした足取りで、密林の一角に差し掛かる。

その時だ。俺の視界に30本は下らない、という数のピュアローズが姿を表したのは……

驚愕していると、ボコボコと地面が音を立てて、数十体のポアリアが悪趣味な顔面を覗かせた。

「待ち伏せか……？……お前らにも仲間意識つてのがあるんだな……」

その口しか存在しない顔には、なぜか”表情”という物が見て取れた……。恨んでいるのだろうか……。同族を数多く殺害してきた俺を。

「キシヤヤアア！！」

一匹が、先端に赤い針のついた触手を伸ばしてくる。俺はそれらをズラしてよけると、伸び切った触手に向き直り、それを両断する。

血しぶきが舞い、ここ何日か聞き慣れた鼓膜をつく絶叫が響く。

「俺は謝らない……始めから……見つかるまで殺すつもりだった……だから……俺を恨んだまま……死んでくれ……！！」

俺は飛び上がる。ASで空中を走りながら、村正を両手で握りし

め、幻影の剣を多く出現させる。

手当り次第に命を散らしていく。

多量の血液が俺の、体全体を真っ赤に染め上げた。俺の頭に残っているのは、ただ、シャルを救うという思いだけだった。

触手で四肢を絡め取られ、大口から体内へと飲み込まれる。

又メ又メとする胃の中で俺は、村正の斬撃を四方八方に切り放した。

ドバ！！という生々しい音と共に、ポアリアの体内から出現した俺に、反応が遅れたのか、疑問視している同種の脳天を切り割る。

前方から到来する触手を手で掴むと、思い切り引つ張る。そうする事で、俺の目の前へと強制召喚された体を本能のままに殴って切った。

「フウフウ……。ウ……。ウウオオオアアア！！」

残りの体力を忘れる様に、無理矢理腹の底から咆哮を吐き出す。浮かせてある幻影の剣を左手で掴むと、目の前に広がる軍勢に向けて、無数の斬撃を繰り出す。

びちゃびちゃと飛び散る血液や、肉片の中には俺の物もあったかもしれない。だが、俺は気にしなかった。

これから受ける事になるかもしれない痛みに比べれば、カスの様な物だったからだ。

斬り、殴り、蹴り、噛みつき、踏みしだき、捻り上げた…。

。 。 。

「おうえ…!!」

俺は胃の中の物を盛大に吐き出す。この密林で見つけた動物の物が大半の吐物。

俺は緑色で微かに自己発光する薬草を手繰り寄せ、優しくポーチに入れた。

「俺の体……大丈夫か…な…?」

俺はまだ血を欲しがっている大食いの刀を鞘に収めて、目尻を抑えながら走り出した。

ろくに動かない脚をしつこく使用している俺の後方には、血液の湖と、ピンクのピュアローズが散乱していた…。

。 。 。

「医院……は…。」

鞘付きの刀を杖にしながら、俺は街中を闊歩していた。

道行く人達が俺を見て、顔に驚愕を貼り付けているのを見ると、俺も案外危ないかも、と他人事のような事を考えていた。

。 。 。

医院に入ると、受付で止められた。先生を呼ぶように言うと、受付さんは躊躇しながらも、早足で走り去って行く。

「何だね…？全…く…。」

先生が俺を見てカルテのような物を取り落とす。

「先生……シャル…は…？」

「あ、ああ、まだ何とか魔力の暴走を抑えられている…。」

俺はそれに、ふう、と息を吐くと、ポーチから瓶に入ったポアリアの葉を取り出す。

「先生…これ…お願いします…。」

俺がそれを出した瞬間、医院の人全員が目を見開いた。

「ポアリアの葉を…こんな短期間で…？」「嘘だろ…？」「ハハ、普通は一ヶ月単位で収穫する物なのに…。」

だが、満身創痍の俺の体を見て、医院の人達は拍手をくれた。

なん…で？

「……よくやった…よし！！これなら助かるぞ！」

その言葉を聞いた時…俺の意識はすっかり暗転してしまった。

第十話 病室にて

「絶対安静ですが、まあ一命はとりとめました。多分発症の原因は彼女の魔力濃度が原因でしょう。次からは魔力濃度が上がったと思ったら、キュリス液を飲むようにしてください。」

調べてみたところ、シャルは魔力濃度が人間の限界量を超えそうだったらしい。

ポアリアの葉は魔力濃度を安定させて、魔力量を増やす効果に、内外の外傷を治癒させる効果があるらしい。

「シャル……」

俺は真っ白に澄んだその手をずっとずっと握りしめていた…。

。 。 。

病室で目を覚ましたシャリウエルはズキズキと痛む頭を抑えながら起き上がった。

右手に違和感を感じたせいでそちらに目線を送ると、ヤマトが手を握っているのが見えた。手を力強く握りしめたまま、ベッド上に頭を置いて寝ている。

不意にドアの開く音に気付いたシャリウエルは、その音源を見るため、顔をそちらに向ける。

「気がついたかな？君はこの四日間、死地を彷徨っていたのだが…

…どうかな？体の調子は。」

シャリウエルは頭を振って必至に思い出そうとしていた。

突然部屋で本を読んでいる時に襲った頭痛。頭をハンマーで思い切り殴られたような、不快感と嘔吐感の連続攻撃。

起きてられずベッドに眠り込んだあたしに、ヤマトが果物のお見舞いを持ってきてくれた事。

そこからシャリウエルの記憶は曖昧で、ただヤマトの声だけが、彼女の無意識の中に入り込んでいた事だけを覚えていた。

「彼に感謝したまえ…なんたって彼はこの四日間の間ポアリアの葉を自力で手に入れてきたのだからな。」

医師はそう言つと、失礼、と言つて部屋から出て言つた。

それにしても驚いた。ポアリアの葉は滅多に手に入る物ではなく、また、手に入れようとして、手に入る物でもないからだ。

だが、その言葉が嘘ではない事は、ヤマトの身体中に巻かれた生々しい治療跡と包帯を見れば一目瞭然であつた。

「ヤマト……」

いつもはクールなその顔に目に見えて、安心感が漂っており、いつもより幼く見えた。

「ん…？」

まだ握られたままの右手を逆に握り返すと、気がついたのか、薄目を開けてこちらを見るヤマト。

「シ、シャル！！起きたのか！？」

ヤマトの目が覚めた事で、触れていた手が離れた。それに少し、不満を感じた自分に驚く。

「体は！？熱はもうないのか！？」

早口でまくし立てるヤマトに、あたしは何だか感じた事のない感情に動かされた。

「え、ええ。もう大丈夫よ…。ありがと、ヤマト…。」

あたしが心配ない事を伝えるように、手をかざすと、何故かヤマトは深く俯いた。

「よかった……本当に…」

俯いたその瞳から一粒、一粒と雫が落ちているのを見た時、この感情は偽りではない、という事に気づいた。

そう思うと、あたしの目からも涙が零れ落ちていた。こんなに心配してくれる人がいる事が、今だに信じられなかった。

ヤマトとは一緒に旅をし始めた。それにはあまり理由という理由が存在せず、自分でもこの人と一緒にいる訳が見つからなかった。

でも、気付いてしまった…この感情に。

「ヤマト…。」

「何だよ…？」

鼻のすすする音が病室に響く。

「なんでもないわ…」

「何じゃそりゃ…？」

あたしは頬を伝う涙を拭った。

まだこの気持ちを口に出す事は出来ない。それでも気づけただけ、良しとする。ヤマトの赤く腫れた目を見て、あたしもあぁなっているのだろうか？と少し恥ずかしさを覚えた。

「ヤマト…？」

「ん？」

「ナグマに行きましょう…。」

あたしが言うと、え？と疑問を貼り付けるヤマト。

「中立国ナグマに。」

ベンガルファームはもう見て、回ったからである。次はナグマに向かおうと、ついこの前から考えていた。

「そうだな……ナグマへ行こうか。」

ヤマトが優しく微笑みかけてくれた。

取り合えず、今はいろんなところを見て回りたいと思った。

初めて出来た…大切な人と…。

第十一話 死神を見た

「ところでさあ。ナグマってどうやって行くんだった？」

ベンガルファイム西から王都までで、数日かかったのだ。ベンガルファイムからナグマまでとなったら、徒歩では辛いものがある。

「まあ…必然的に馬車になるけど。」

地図のような物を見つめながら、シャルが言った。

因みに今現在俺とシャルは王都の城下町を歩いている。旅立ちの準備をしているのだ。

「なあ、やっぱり一応、証明書作った方がいいんじゃないか？」

それは勿論、これから中立国ナグマへと向かうからである。ナグマに着いて、そのまま帰れ、など本気でシャレにならんと思う。

「何いつてんのよ…証明書ならあるでしょ？」

何のこっちゃ……

「はあ。…ギルドカード。作ったでしょ？あれが国間での証明書にもなるのよ。認証装置に当てれば、最後に何処で依頼をこなしたかも分かるし。」

そこで俺はようやく思い出した。そういえばギルドの受付嬢が、そんな事を言っていたような気がする。

俺はボーチに入ってるカードを取り出すと、日にかざして見てみる。銀色のカードにはAという文字が浮かんでおり、そのギルドでのクラスを教える。

俺のギルドランクがAになったのはついこの前の、ポアリア大虐殺が原因だ。

経験値のようなものが一定を超えたのだろう。カードは勝手にそのアルファベットを変えていた。

「じゃあ何が必要なんだ？ 証明書もあるし、金もあるじゃん？」

「ベンガルファイムからナグマへは馬車でも、最低五日はかかるわ。その間の食料とかも必要でしょ？」

言われてみれば確かにそうだが……まだ、現代日本の感覚が少し残っていたらしい。流石に道中、コンビニは無いか、と実際有つたら不気味な事を考えた。

「確かに……それで、いつ出発するんだ。」

「今日中に出発しようと思っただけ。」

シャルの言葉にふん、と適当な返事を返して俺はナグマについて考えていた。

。。

。

「じゃあ、これでナグマまでお願い。」

シャルが箱馬車を引いてる人物に交渉をしかけていた。

俺は今馬車に繋がれている馬を見ているのだが……

「なあ、シャル。」

交渉を終えたシャルが変な紙の様なものを持ちながら近づいてきた。

「ん？」

俺は疑問に思った事があった。それはこの馬のことだ。

「何でさあ……この馬、こんなにデカイんだ……？」

俺は目の前の馬を見据える。デカイ……通常の馬の二倍はあるんじゃないだろうか？

「別に大きくないと思うけど……？そう感じるのは多分馬車が大きいからじゃない？」

うーん。納得出来ん。確かに馬車はデカイけど……馬も超デカイのだ。こんなのが日本にいたら間違いなく、世界最速だろう。それ程の逞しさを持つてる。

「まあ……いいか……」

細かい事はどうでもいい。取り合えずナグマに向かうのだ。
ナグマは全国を中心に位置しており、1番発展している国だとい
う。この世界に来て、いろんな物を見たが、他にも沢山、俺が知ら
ない物があるという事実が俺の胸を高鳴らせた。

。 。 。

ガラガラ

馬車の、俺達客が乗る所は、荷台のようになっており、構造は俺達
が乗ってるその大きな荷台を屋根が覆ってる、といった感じだ。

これが馬車か〜と思いながら、過ぎ去っていく草原の景色を見て
いるのだが、やはり綺麗だ。この世界の物は…綺麗な物がとても多
い。

「景色を見ているのもいいけど…何だか暇だな…。」

俺はつい、退屈だということを漏らしてしまった。

「まあ、ナグマに着くまでの辛抱よ。」

そう言ったシャルは、書物を片手に冷静な面持ちを崩さない。

「まあ…そうだけだよ…」

俺も本持つてくりや良かったかな…

「ねえ…?」

「ん?」

シャルが少し目線を上げて話しかけてくる。

「本当にありがとね? 医師から聞いたの。詳しい事。」

シャルが言ってるのはあの、病状の事だろう。別に礼などいいのに…

「ああ…それにしてもこっちも本当に心配したんだぜ?」

俺は何故、あんなに頑張れたのだろう、と後から思ったのだが、それは多分シャルの為だから出来たんだろうな、という考えに辿り着いた。

「そうらしいわね。だってあの時、泣いてたし。」

シャルが少しニヤリと笑いながら言った。俺は何だか苛められる予感がした。

「俺は…案外涙もろいんだよ…」

「それだけ?」

一層笑みを強くしながらシャルが俺に近づいてくる。

くっ!! 恥ずかしい…。

「ああ、そうだよ！！シャルの事が心配でたまらなかったから泣いちまったんだよ！！勝手に笑えよ、ちくしょう！！」

クソ……。また、眼が潤んできた。シャルさんSなんですもん…

だが、俺の予想と違い、シャルは微笑を浮かべたまま言った。

「ううん、嬉しいわ。ありがと、ヤマト。」

その笑顔を見た時、本当に助けられて良かったと思った。肉食植物を殲滅している時に、何度も俺の脳裏を過ぎった”もしも”の描写。どうにかなる、と信じている俺と裏腹に、もしかしたら、と弱気になる俺。結局勝ったのは信じた俺だったから、良かったんだけど…。

何故か、シャルのその在り方は俺の眼に、とても危なっかしく見えた。シャルに……。まるで大振りな鎌を持った、死神が付いているような……

俺は背筋が急に寒くなった。

そんな最悪の考えを払拭するように、退屈が支配していた頭を少し振った。

第十二話 馬車でのお話

「くそ、暇だな」

俺は今、クールな仮面を取り去って、馬車の中でゴロゴロしている。

あつ、言ってなかったけど、馬車の中には別に他の客もいます。てか、馬車の中はスペースが決められており、その中で過ごすというものだ。どんな原理かわからないが、一応トイレも水洗式だ。まあ、そこはファンタジーということだ。

依然、シャルは本を読んだり魔法についての勉強をしている。何だか、暇なのは俺だけって感じで癪だ。

「きゃっ!？」

シャルの髪に触れてみた。一本孤立しているのがあったから、気付かれないと思ったのだ。

シャルがジト目で見てくる。俺はそれに対して、目を逸らし、他の客へと目を向ける。

すると、一人のおじさんと目が合った。おじさんは優しく微笑みながら、ぺこりと会釈してくれた。俺もそれに返すと、おじさんは少し間を開けて喋り出す。

「そちらのお兄さん。どうやら退屈しているみたいですが、よろしければ私と話をしませんか？」

俺はその言葉に、一瞬シャルの顔を見た後、強く頷いた。

。 。 。

「へえ。じゃあナグマは最初は1番小さかったんですね。」

俺とおじさんはそのまま、話をしていたのだが、どうやらこのおじさんはとても物知りらしくて、色んな面白い話をしてくれた。

「他には何かないんですか??」

「うーん。そうですねえ。では最近の事について話しましょう。」

そのまま、俺はおじさんと談笑していた。

「まず、ナグマへの通行手段ですが、ベンガルファイムからナグマまでは陸続きなので、このように馬車で向かえるわけですが、他の国からはそうはいきません。」

それからもおじさんは話し続ける。まず、シンフォスからはベンガルファイムを経由して向かうか、船で向かうという事。他の国も同様らしい。ガンシユールも同様だ。ミズキはまず、来客が来る事がないらしいが、こちらも行こうと思ったら船になるだろう。

飛行系の魔物を使役する事も出来るらしいが、そんなのは稀で、何より国間の移動は滞空時間の関係で不可能に近いらしい。

だから、とりあえず船での移動が大元になるというが。

「それですね。ここからが本題なんですが、ナグマの船なんですが、その殆どを令、一人の男が占領しているのです。」

航路を占領。それはスゲー儲かるんだろうと、思っていたが、でも天候などで状況が変わりやすいのが船だからな、と同時に思った。

「ふん。それがどうなんですか？」

「それを占領しているというのがですね。ヒューザック・ベイ・レリエンスその人なんですよ。」

その言葉を聞いた時、何故か反応を示したのは俺でなくシャルだった。

「今……ヒューザック・レリエンスって……」

そのシャルの様子に怯む事なく、おじさんは言った。

「ええ。あのヒューザック・ベイ・レリエンスですよ。高級貴族の。」

シャルは何かを思案しているような、苦虫を噛み潰したような顔をしている。

その時のシャルの表情の意味を、俺はまだ知る事は無かった。

第十三話 ナグマ到着と波乱の予感

やっとだ…やっと着いた

「ここが…ナグマか……」

俺の目の前にそびえ立つのはナグマの大門だ。門番はあの街と違い、なんだかキチンとしてる感じがした。

「ほら、行くわよ。ヤマト。」

シャルが少し先で手招きをしているのを見て、俺は村正の柄を弾き、ナグマに向かって走り出した。

。 。 。

ここが中立国か…

今はナグマの東北街だ。馬車を降りた所が、東北門であり、俺とシャルはそのままそこで宿を探している。

「王都の方に行ってみたいけどな。今日はもう遅いし、ここで宿を取りましょう。」

シャルの提案に頷き、俺達は繁華街を歩いて宿を探した。

。

。。

「ふう」

宿付きの風呂から上がった後、俺はフルーツジュースを手には部屋で身体を冷ましていた。

明日はいよいよ、シャルとの観光だ。

俺は楽しみだな～と思いながら、半分残ったフルーツジュースを煽った。

。。

「スゲーな…」

国内での馬車に乗り、俺とシャルは早起きして早速王都に向かった。

時間はかかったが、着いたのは昼過ぎだった。俺とシャルは店に入ると、遅めの昼食を食べ始める。

「まず始めに、どこ行く？」

シャルがパスタのような物をフォークにクルクル巻きながら尋ねてくる。トマトや、バジルなどが入った色鮮やかな物だった。

「そうだな…おじさんに聞いた話だと、中央広場の銅像とか、訓練場とか、西の花畑なんかもいいって言ってたな。」

俺とシャルはうん、と唸る。実際近いのは中央広場の銅像だけど…銅像については全部で16種あるとかで、過去に活躍した英雄達の彫像らしい。

「うん。とりあえず…街を見て回りますか？」

俺が言うと、軽く頷くシャル。俺達はそのまま、そこで昼食を詰め込むと、街を観光する為、椅子から立ち上がった。

。 。 。

今は街の外れで、建物の屋根で日陰を満喫している。因みに俺の手には串に刺さった豚肉が握られており、シャルは何かの飲み物のような物を持っている。

「なあ、シャル。そういえば昨日だけどさ。おじさんが言ってた、ヒューザックって奴だけど…」

「あたしの元婚約者よ。」

シャルは日向の向こう側を見たまま、俺の疑問を一蹴した。

「元婚約者って…お前が嫌いって言ってた奴だよな？」

ヒューザック・ベイ・レリエンス。俺もベンガルファイムの新聞

を読んでいた時に、目に入ってきた事がある名前だ。

レリエンス家とは、ベンガルファイムの高級貴族であり、国間の政界にて強い発言力を持つ名家だ。実際に、マブルス・レリエンスは政治関連の問題を、独創的な考えで、次々に解決していった名だけではない、力を持った御仁である。

ヒューザック・レリエンスはマブルス・レリエンスの息子だ。他の兄弟と違い、いまいち力が無い、という見出しで書き出される事の多い名前。

「マジかよ。でも、なんで嫌いなんだ？」

俺は少しの好奇心程度の感情で聞いただけだった。

「正直嫌いな理由なんて挙げようとすれば山程あるけど……とりあえず、強欲。この言葉に尽きるわね……」

それから、シャルは時々嫌な顔をしながらもヒューザックの事について話してくれた。

まず初めて会ったのは王主催のパーティーだという。元々、現在のベンガルファイム国王の前に、国王を務めていた男と、シャルの父親は大親友だったらしい。

国王の右腕、心眼のヴァイクの名前は王の名実と共に、民間だけでなく、他の国々にもその実力を轟かせたという。

だが、前国王が死に、ベンガルファイムを背負って立つ人間が代わる事によって、シャルの父親は、辺境に飛ばされたらしい。その

理由は現国王の行いに、ヴァイクが反発したからだというが……何だか腑に落ちない。

これが起きたのは丁度、シャルが産まれた時期らしい。何か関係があるのかもしれないが……

「だから……正直ベンガルファームの国王とその関係者にはあまり良い印象が無いの……」

それからシャルは話し続けた。世間体として、一応呼ばれた王室状況の報告のパーティーに出席した時、紹介されたのが、ヒューザック・ベイ・レリエンスだったという事。

双方の両親には好青年を演じていたが、実際は大きく違った事。ムダな計らいとして、二人きりにさせられた時に、襲われそうになった事。

そんな経験をしていながら、シャルは全く表情を崩さなかった。

「とりあえず、ヒューザックは手に入れたい物は何をしても手に入れようとするわ。関わらないのが1番よ。」

いつも冷静なシャルを見ている俺にとって、取り乱すシャルの顔は正直レアだ。

だけど……

こんなシャルの顔は見たくないと思った……。

「随分酷い言われようだねえ。」

シャルの声が終わった後に、数秒の猶予も開けずに、粘着質な声が俺の耳に届いた。

シャルは俺の後方を見ながら、目を見開いている。一瞬何が起きたのか、分からなかったが、話の流れでおおよそ理解出来た。

俺がそれを感じ取り、後ろを振り向くと、そこにいたのは、金髪を伸ばした青年だった。

「ヒューザックっ!？」

シャルが、小さいながらも鋭い声色で言う。

ヒューザックは造形だけ見ると、顔は整ってると思ったが、何だか俺には隠しきれない悪相が滲み出てるような気がした。

それにしても、こいつがヒューザックか…確かに…好きになれそうにないな。

「盗み聞き？全く良い趣味してるわね…？」

シャルが警戒しながら言った。

「まあ、必然的にそうなるけど。これは新作の魔具の実験なんだ。」

ヒューザックが、玉に何本かの針金を付けた様な、小さい模型を摘まみながら見せてくる。

その模型はまるで蜘蛛を模った様であり、目の前の男の趣味の悪

さが伺えた。

「これはねえ。魔力を通した人がその範囲内でだけ、自由に操作出来るっていう隠密情報収集機器なんだ。残念ながら、視覚はつけられないけど、聴覚だけで、頑張ってここまで作り上げたんだあ。」

「詳細なんて聞いてないわ。それより、何でここにいるのよ？」

シャルが怒気を含めた視線をぶつける。

「ククク。久しぶりに見たねえ。その目は。何で僕がここにいるかって？決まってるだろう。今はこの国の港が僕の商売場所なんだから。」

ククク、と喉を鳴らす様な笑い声を響かせて、今度はヒューザックが尋ねる。

「それにしても、こっちこそ、聞きたい事があるんだ。……何で僕との婚約を破棄したんだい？」

その時、一瞬だけヒューザックの眼が鋭くなっただ様な気がした。

「あんたと結婚するぐらいなら、猿と同棲した方がまだマシよ。それに……………」

シャルはヒューザックに向けていた強い視線を緩めると、俺の方を少し見た。

「出来ない理由」だって出来たわ。」

シャルの言葉にヒューザックが俺の方を見てくる。

「じゃあその男が理由って事かい？」

シャルは何も言わない。警戒心を持ったまま、ヒューザックを見据えている。

「シャリウエル。君は知っているよねえ？僕は欲しい物は手に入れる。君の美しさは…僕だけの物だよ。」

その場を去るまで、ヒューザックは俺の方を力強く睨んでいた目を閉じる事はなかった。その眼光の雰囲気はまるで毒蛇のようで、言いようも無い気味悪さを漂わせていた。

シャルがため息を吐くと、俺の方に向き直り言った。

「ごめんなさい…何だか、巻き込んだじゃったかもしれない…」

俺はシャルが俺を”理由”として見てくれている事が何だか嬉しかった。

「大丈夫だ…気にすんなよ。」

その日の俺の瞳には…シャルの申し訳なさそうな顔が焼きついていた。

第十四話 花の丘

「おお……」

俺とシャルが今立っている場所は、ナグマの商業区が一望できる、フラント丘、別名、花の丘だ。

遠足がてら、ハイキングをしながら登ったこの丘だが、この景色はどう言った物が……

人々が点に見えるほどの高さで、遠くにワイワイと賑わうナグマの人達を見る。

眉毛に手を合わせて遠くを見据えるモーションをする俺を尻目に、シャルは持つて来ていたバスケットのような物の中身を出し、準備をし始める。

「ヤマト。昼にしましょう?」

俺は、手を上げて返事をする、花畑の開けた所に座り込む。花の良い香りがして、僅かに俺の鼻腔をくすぐる

「爽やかな風だな……」

肌に気持ちの良い、穏やかな風だ。決して強く吹き付け、髪を乱したりする事はない。

「そうね……何だか……ここにいと……嫌な事忘れられそう……。」

俺はシャルの手作りサンドイッチを一つ摘まむ。柔らかなパンが、僅かに指の形に潰れる。

「いただきます。」

俺がそう言うと、どうぞ、と手の平をこちらに向けるシャル。

それを口に含むと、一気に口内に広がる甘じょっぱいバーベキューソースのような味に、シャキシャキと小気味良い音を立てて、水気を出す新鮮な野菜。ベーコンが程よい塩気を出しており、それが俺の食欲を刺激した。

「美味しいな……」

俺が言うと、得意げな顔で微笑するシャルの端麗な顔。その顔の美しさは、俺が知る中で間違いなく一位二位を争う程の美顔だ。

「そう？よかった。」

俺はこの笑顔が……

「シャル……。言っておきたい事がある……」

俺は今ここで……この場所で……”あの事”について……話しておきたいと思った……

「何？」

首を傾げるシャルに、喉をつまらす俺。俺はふう、と息を吐くと、空を少し仰いで彼女を見た。

「俺さ……この世界の人間じゃないんだ…」

。 。 。

シャルは俺の話を笑う事なく、最後まで聞いてくれた。疑う事なく、怒る事なく…

「ごめんな……俺、君に嘘ついてた…旅人なんてまるっきり嘘だったんだ…本当に…」

何となく、俺はシャルの顔を直視出来なかった。

自分の汚い場所を見せた事で何だか、冷静でいられなかったのだ。

本当に……どうしていいか分からなかった…

そもそも、他人と関わるのなんて俺にとってみれば久しぶり過ぎる事なのだ。

本当に……こういう時の…心の保ち方なんて…忘れてしまった…。

「ヤマト。」

俯いたままの俺の耳に、シャルの聞き慣れた声が届く。この俺に返事など、出来る筈がない。

「何で謝るの？」

俺は顔を上げる。

「だって…嘘ついてたし…」

俺が言うと、少し考える様な顔をするシャル。

「じゃあ、こう聞くわ。何でその事をあたしに話してくれたの？」

シャルの顔は真剣さの中にも優しさを持っており、その表情に俺の舌はスムーズに言葉を紡いだ。

「嘘ついてるのが、何か嫌だったんだよ…」

「どうして嫌だったの？」

どうして？そんなの……

「これからも一緒にいたいからに決まって……悪い今の無しで。」

シャルがまたもや、得意げな顔をする。今度のは、からかう様な視線も付属されてる。

俺は自分の頬が熱くなるのを感じた。地球にいた頃は、こんな感情はなかった。人と関わる事さえ無かったのだから。

「別に怒ってないし、謝らなくてもいいわ。むしろこっちが礼言いたいぐらいよ。」

その言葉に今度こそ俺は疑問を浮かべた。

「どうして？」

俺が聞くと、食べ終わった後のバスケットを片付けながら言った。

「それを話してくれたって事は、あたしを信頼してくれてるって事でしょ？だから。」

俺は、座ったまま後ろに仰け反ると、手をついて空を眺める。雲は穏やかに流れており、太陽？は神々しく煌めいている。

結局のところ、俺が心配する事など無かった。俺が思っていたより、シャルはずっと大人で、ずっと優しくかった。

近くの花を見ると、蝶がヒラヒラと羽を動かしながら蜜を吸うために近づいて来ているのが見えた。

その様子を見ながら、俺は深く息を吐いた。

。 。 。

そして、その日の翌日、宿屋の俺の部屋に、シャリウエルを誘拐した、という一通の手紙が届いた。

第十五話 嵐の前の静けさ

「クソ…!!」

間違いなく…ヒューザックの仕業だろう。それ以外に誰がいるのか…。

手紙の内容を見て、シャルを捉え、俺にそれを報告するって事は、あいつが何らかの方法で俺を殺そうとしているのが分かる。

俺の実力を知らないだろうし、先に保険としてシャルを捕まえたって事だな。

それにしても、シャルは魔法師だ。そんな簡単に捕まる筈がないのだが…何か裏があるのか…

「どうしたもんかな…」

ヒューザックはシャルを殺す事はないだろう。そもそも、奴はシャルを手に入れようとしている。殺す可能性は皆無と言っていい。

それでも侮る事は出来ない。そして、奴が去って行く時に見えた、少しの狂気。あれは間違いなく、俺に向けられていた。

とりあえず…情報屋のどこだな。

馬車で会ったおじさんに情報屋の事についても聞いておいたのだ。情報屋はいつの時代も存在する。情報とは、それ程大事な物だ。

「情報屋は、城下町の第三通りか…」

ナグマの王都地形図を見ながら、おじさんの話と結びつける。

「行くか…」

。 。 。

第三通りと言われる割には人の数が圧倒的に少ない。

だが、それもそうだ、と思う。

ここは裏道をグルグルしながら抜けた後の、寂れた道だ。

人の数なんて数えるほどしかなく、店など構えてる人は存在しない。

俺はそんな中で、物乞いの様な占い師を見つけた。体の色々な場所に水晶を付けており、椅子に座りながら、机の様な物の上にある一際大きな水晶、それを見つめている様子だ。

俺はその占い師の様な人物に近付くと声をかける。

「情報を売ってくれ。」

俺が言うと、少し顔を上げてこちらを見る、その爺さん。

「はて？何の事かの？」

「とばけんなよ爺さん。その台の下に隠してる看板に書いてあるだろ？情報屋って。」

俺が言つと、被っていたフードの下で目を見開く爺さん。

「ふむ…どうして分かった？」

その言葉に俺は少しの感情も持たずに答える。

「カマかけたただけだ。その水晶が鏡になってくれたが、文字まで読み取る事は出来なかった。まあ、間違ってたとしても、次を探せば良いだけだ…つっても、こんな日が照ってる日にフード被ってんのも不自然だと思ったしな。」

再度驚愕する爺さん。

「ふむ…貴様…相当キレるな…？まあ、許せ。最近では情報屋もめつきり危つい職業になってしまった訳じゃ。貴様の様な険しい顔つきの者が来たら、そりゃ隠れるじゃろ。」

爺さんの言葉に、俺は少し辺りを見回してから呟く様に返す。

「確かにそつらしいな…。」

そんな事、全く気にせず、貧困率の高いこの場所で、俺は目の前の男に再度呼びかける。

「もう一度言つぞ？情報を売ってくれ。」

。 。 。

宿屋に帰った時、店の店主に渡されたのは預かり物の手紙だった。

内容は、屋敷へ来い、というタンパクな一文。

情報屋に金を払い、とりあえず、分かったのはヒューザックのバックについてる組織の事だ。

組織名は、”ブラッドネイル”。略称でライル、と呼ばれる事のある犯罪者集団。噂では港を占領出来たのも、こいつらの動きがあったからではないか？という話もあったらしい。

「ブラッドネイル…。」

ブラッドネイルのリーダーは暗殺者ギルドの、上級者らしく、そのせいで港を占領されても、いまいち反撃に出られないらしい。

リーダーの名前は、グラッツ・ボードレイ。業鉄の暗殺者と呼ばれた、懸賞金、金貨五枚の超大物だ。

バックがいるとは思っていたが、厄介な事になったな……確かに、ヒューザックの財力を考えれば…あながち……いや…

「どうでもいいか……」

俺は、宿屋の部屋で手に持った村正を見つめる。その黒塗りの鞘でさえ、鈍い光沢を放っており、ただ一つの”感情”を鋭く研ぎ澄

ますようだ。

「シャルに手を出した奴は殺す。それだけだ。」

第十六話 領民からの襲撃？（前書き）

お気に入り登録1000人突破です！！

登録してくださった方々、感想にて指摘や、嬉しい御言葉を下さった方々！！誠にありがとうございます！！

文才の無い、矮小な作品ですが、読んでくれる人達の為！！小説が大好きな自分の為！！これからも執筆に励んで行きたいので、どうかこれからもよろしく願います！！

m (— —) m

第十六話 領民からの襲撃？

俺が今いるのは、王都南地区のレリエンス家領地だ。数多くあるワザとらしい屋敷の屋根を駆け回ってる。

「まったく…独立区かよ…」

領地に入るのに、真正面から行く必要はない。ムダな誇りなど、この際捨て置く。

そんな精神で攻略に挑んだレリエンス家領地だが、実際に入ってみると、領地内の全ての人間が俺の事を狙ってるのが分かった。

屋根から人気の無さそうな一つの屋敷の裏道へと降り立つ。だが、魔法で、聴覚を強化している奴がいるのか、何処へ隠れても、わりとすぐ見つかる。

「いたぞお！！」

なんて言ってる間にも……

それにたまに結構な使い手がいる。侮れん……

そんな事を考えていると、槍の矛先が目の前に迫る。それを首を傾けて避けると、その槍の先端から、相手にとって少し手前を掴む。

「なに！？」

その槍を掴んだまま、容易く上空へと持ち上げる。男は意地か、それとも恐怖か、持ち上げられた槍を離せずに宙ぶらりの状態で錯乱している。

男が騒いでくれたおかげで、寄ってくる数人の武器持ち。その姿を確認すると、俺は槍（人付き）を思い切り自分を中心にぐるりと円状に振り回す。

槍を降った事で発生する風切り音はぐるり、などと生易しいものではなく、ブウォン！！と聞いただけでその速さが伺える音質だ。

「ガオエツ！！」「ゲハツ！？」

振り回した槍が直撃した2人はそのまま、人間らしい悲鳴をあげて転がったが、槍に付いてた人間は悲鳴が聞こえない所まで飛んで行ったのか、様子が伺えない。

「大丈夫かな…？」

数秒後、バギン！という音がして屋根の石片が落ちてきた所を見ると、無事に屋根の上に落ちたらしい。良かった。

「くううう……ば、バケモノめえ！！」

力一杯剣を振りかぶって俺に叩きつけようと迫ってくる。だが、その動きは単調で、避けるのに、大して重労働は強いられなかった。

どうしようかな……

迫り来る剣閃をヒョイヒョイと回避しながら考える。

この人達の大半は多分だが、ただの領民である。別に魔法に秀でてる訳でも無く、武器を手に持っただけの存在。ブラッドネイルの面影など見える筈もなく、単純にレリエンス家領地に住んでる人達である。

別に進んで人を殺したい、と思わない俺に、武器を抜く意味は無い。それに村正を抜いたら多分止まらないだろう。

領民の武器を大した苦労も無く、取り上げると、両端を持って折る。

「なあ、あんた。」

「ヒイイ!？」

若干傷付いた…正直、自分に敵意を持つ奴は慣れているが、恐怖心や、疑心を持つ奴は一向に慣れない……

「質問に答える。別に傷つけたりはしない。」

俺が言つと、首を痛めるのではないか?と思える程力一杯頷いた。

「まず、お前らはブラッドネイルでもなければ、冒険者でもないだろう?。」

「お、俺は、ヒューザック様に魔具製造工場の、し、仕事をさせてもらってる…。」

魔具製造工場?さっき見たどでかいコンテナの様なものだろう。

「何で俺を狙う？」

辺りを警戒しながら問う。こいつらが、素人だとしても、中にはちょこざいに魔力探知やらを持つてる魔法師がいることも確かだ。

「お、お前が、俺達を、こ、殺そうとしてるからだろ…!？」

「は？」

煩わしい前髪を横に流しながら、意味不明だ、というアピール。だが、実際には意味不明などではなく、ヒューザックの糞虫ヤローが領民を使役し、俺を抹殺しようとした事は理解出来た。

「他の奴にも言っとけ。別に攻撃して来なければこちらも危害は加えない。」

「嘘だ!!モリアの親父は、あんたが殺したんだろーが!!モリアの親父は優しいんだよ!!そんな人を…あんな惨い…あんた、恥ずかしくねーのか!？」

誰だよ……はあー。

知らねーけど、多分そいつヒューザックに殺されたる？

だが、俺は、その言葉を口に出す事はなかった。

「はあー…もういいや。どっか行けよ。」

そう言って手を振る。その言葉に男は声を張り上げ、絶叫する。

「どっか行けだど！？舐めんじゃねー！！」

「死にたいのか？」

背中を向けた状態で、顔だけを半分振り向き、片目を見せて行つた。その言葉を言っただけで男の顔は青ざめ、武器を取り落として泣き始める。

俺は、それを一瞥する事無く、またアーマーコートのフードを被ると、脚を上下運動させて走り出した。

ふと、シャルの言つてた言葉が蘇る。

「確かに…いい性格してるな…早く会いたいぜ…」

第十六話 領民からの襲撃？（後書き）

感想や、ご指摘などございましたら、頂けると、とても嬉しいで
す。〇（＾　＾）〇

第十七話 業鉄の暗殺者

「フッ!!」

短く息を吐いて、前方から到来する鉤爪を回避する。横に避けながらスウェーバックをする様な態勢で、そのままバク宙しながら村正を抜き放つ。その勢いで、片膝をつきながら着地し、地面を勢いよく蹴る。

「フン!!」

大上段から村正を振りかぶる。だが、相手はそれに合わせて、両方に持つ鉤爪を頭上に掲げて、それを防ごうとした。

俺はその守りに対し、真っ向から轟音を立てながら村正を振り下ろした。

相手は防御出来るとふんだらしいが、それは間違いだ。体に染み付いてるかの様に、動く一連のモーション。

それは正しく村正の恩恵。

鉄を切る刀法。

斬鉄剣だ…

二対の鉤爪からなる六枚の刃。それを、一つ残らず切り落とす。

「なに!？」

武器が破壊された事で、動きが止まった目の前の男に対して、躊躇せず、村正の柄で打撃を与える。

「ゴフっ!!」

懐に入っていたおかげで、一撃で顎を打ち抜く事に成功した。上手く入った様で一発で気絶してくれた。

俺は今、領地内を走り回りながら、シャルを探していたのだから、今頃になってあるトレードマークを頻繁に見かける様になった。

それは、十字架に紅い爪痕が刻まれている、ちゃちいデザインだったが、確かな危険性を持っている気がした。

”ブラッドネイル”……。確かに戦闘力は個人個人でも中々のものだった。だてにリッチ価格で討伐依頼を出されてないと思った。

「まだ先か…?」

村正をクルリと回して鞘に収める。戦闘の余韻で多少熱くなった体を落ち着かせる様に、俺は髪をかきあげた。

。 。 。

律儀に自分の脚だけでシャルを探していた俺だったが、途中からイライラして、優しいおっさんに案内をしてもらった事にした。

一見すると、普通の光景だが、後ろへ回ると、おっさんの後頭部は俺の腕に掴まれている事が分かる。

「ったくよお……。今日は、ナグマの不思議グルメツアーの予定だったのに……」

シャルと並んで屋台のおっちゃんに声をかけるビジョンが目には浮かぶ。

「いたただだ!!」

おっと……知らないうちに、力が入っちゃってた……

そこで俺は後頭部にめり込んだ指を外す。すると……

……手形が付いていた。おっさんの後頭部に……

ぷっ!!

いきなり笑い出した俺に困惑と恐怖の表情を向けるおっさん。

ま、前向くんじゃね、ぶふっ!!

何とか跡がついた場所にピンポイントで指を重ねる事で、それを視界から消し去る事に成功した。

「っ、着きました……」

「ここか……」

目の前にそびえ立つのは大きな青い大扉だ。扉の前には、まさに門番と言った様な、全身鎧の人間が2人立っている。

「ありがとよ。」

礼を言くと、そのまま後頭部を手刀打ち。おっさんはグルン、と白目を見せると地面に倒れこんだ。

俺が突っ立っていると、ガチャガチャと重装備をひけらかして、寄ってくる二つの鎧。

俺は音高く、村正を抜くと下段に構える。

少しの硬直の後、敵の内の1人が戦斧を振り上げた。それが振り下ろされる前に、俺は高速で戦斧の射程距離の内側に入る。

しゃがんだまま後ろに回ると、鎧の継ぎ目を確認し、村正の逆刃を思い切り足に叩きつける。

「ぐうあ!？」

身体強化の恩恵を受けた打ち込みだ。せいぜい味わって欲しいと思う

倒れこんだ戦斧持ちを眺めていると、後方から到来する槍。

その突きは意外に鋭く、俺の肩口を掠った。

「中々…いい突き出すな…」

俺が言つと鎧は、兜の奥でニヤリと笑みを浮かべた気がした。

そのまま、超高速の”点”が俺目掛けて飛んでくる。

一秒間に三発か……いつまでも逃げ仰せられないな。

俺はダラン、と脱力すると同時に村正を地面に突き立てる。

その姿に諦めたと思ったのか、鎧が高速の突きを放ってくる。

俺はその瞬間、目を見開く。

予想通り、自分の顔面に真っ直ぐに飛んできた槍の先を回避し、それが射程台に戻る前に、飛び込む。

「っ!？」

槍の持っているその手を掴む。勿論両方とも。

「ぐうおお!!」

槍使いが唸る。俺はそれを無視して、腕を握り潰す為に力を込めた。

グギヨメキヨ!!

「あがいああ!!」

鎧が手にめり込んでいるのだろつ。その様子を見ていると他人事

ながら、さぞ、痛いんだろうなあ、と淡泊な考えを抱く。そのまま、手を気にしている鎧の側頭部をハイキックして気絶させる。

俺は少し眼を閉じた後、遮る物の無くなった大扉を見据え、勢いよく扉を蹴る。破碎音を響かせ、パラパラと音を立てて石片が飛び散り、粉煙を巻き起こす。

俺はその中を歩き、扉が守っていた部屋へと入り込む。

。 。 。

「あれえ。本当にここまでたどり着いちゃったんだねえ、ヤマトくん…。」

ヒューザックの怒りを増幅させる声が耳に届く。王座の様な物に腰掛けており、そこまでの段差のせいで無理矢理な上から視線を實現している。

「そこ座ってんのは…随分気分良さそうだな…」

自分でも、不思議なくらい冷めてるのがわかった。こいつになら、何の罪悪感も感じずに罵倒を浴びせ続けられるだろう。

「確かにねえ。気分いいよ？」

そこから一拍間をとって言った。

「何たって、君が跪く所が良く見えるからねえ？」

肩肘をついたままで、こちらを見ながら粘着質に笑うヒューザック。

「そうか…じゃあ、そんなお前に俺から最高のアトラクションをブレゼントだ……すぐにそこから、引き摺り下ろして、王都の街灯に飾ってやるよ。」

俺が言つと、高らかに笑うヒューザック。

「今までの雑魚共に殺されなかったからって、調子に乗っちゃいけないなあ。」

ヒューザックが指を鳴らすと、天井から降って来た1人の男。

黒い髪をオールバックにしており、左目にも同様、黒い眼帯をつけている。服装はまるで燕尾服だが、執事のような雰囲気ではなく、それは生粋の殺人者の物だった。

「そうか…どこにいるのかって思ってたら、ここにいたのかよ。」

目の前の男が、無骨なナックルガードの付いたサーベルを鞘から引き抜くと、横に携える。

「業鉄の暗殺者、グラッツ・ボードレイ。」

第十八話 双閃の殺人鬼

「業鉄の暗殺者、グラッツ・ボードレイ……」

広大な屋敷の一角で、一人の男が微かに笑う。男はウェーブのかかった後ろ向きの黒い髪をさらに後方へおいやると、声を出さずに少し笑った。

「その渾名で呼ばれたのは久方ぶりだな……それにしても……」俺の顔を知ってるとは……」

整った顔。年齢は二十代後半だろうか、鋭い瞳に見られると、体が少し硬直する。

「まあな……高い金払って仕入れた情報だ。間違ってたなら笑いもんだけどな……」

ボードレイは眼帯を撫でながら、瞳を閉じる。

「どうやら、いい情報屋を訪ねたらしい……」

その様子を見ながら思っていた疑問を打ち明ける。

「グラッツ・ボードレイは……暗殺の達人……殺られた事にすら気付かない、なんて言ってたから、何処から来んのか警戒してたのによ……」

グラッツ・ボードレイは背後から一振りのダガーを取り出す。

「飽いたのだ…」ただ、命を散らす事に…何の疑問も抱かずに倒れ伏す屍の表情に…」

その言葉を聞いた時、俺の背筋にゾワ、と寒気が走ったのが認識出来た。言葉の節々から滲み出る凶悪で分厚い獣のような殺気。これが本物の殺人鬼と言っのだろう。

その眼は人を殺す事だけが生きがいであり、意味であると語っている様な気がした。

「パキってんじゃねーよ……」

こんな男を、使役できる者がいるのだろうか？この男の、破壊的な性格は誰にも縛られる様な物ではないと、脳でぐるぐると疑問が巻き起こる。

「知りたいのか…？何故あの男についているのか…？」

心読まれた？

「……貴様が考える様な…濃厚な理由など存在しない…さ……。俺が求めるのは強者との絶対的な取り合い……。命尽きるその時まで…少しも霞まずその炎を上げる…力のぶつけ合い……」

ようやく分かった…。この男の行動原理。深層心理に眠るエンジンを発熱させるガソリン。

根っからの戦闘狂らしいな…

俺は村正を鞘から抜く。シャンドリアの光を反射させる刀身は、

確かに目の前の男の血液を望んでいる。

「貴様は…俺の炎を消せるか…？」

グラッツ・ボードレイが、構えを取る。サーベルの切っ先をこちらに向け、ダガーを顔の横に携える。静かな声の語尾が、少し強まったような気がした。

俺も村正を中段に構える。少し眼を閉じて、呼吸を安定させる。まるで、自分の手と、その刀が混ざり合うような感覚。左手で力強く握り、右手を添える。足幅を確認し、幻影の剣を最低数の五本出現させる。

目の前の男に、俺は今まで1番の恐怖を感じている。だがそれだけではない。腹の底で唸る確かな歓喜。

目の前の恐怖の塊の様な男の向こう側。派手な装飾の施された偽りの王座に座るその男は、俺がボードレイに負ける事を確信している様な眼をしている。その安心に身を浸した様な顔を、地面に擦り付け、踏んづけてやりたいと思った。

「……返してもらっ」

俺はそれだけ言うと、浮かせておいた幻影の剣を直進させた。

。 。 。

ガキン！！

ボードレイの右手に握られたサーベルを打ち落とす。チャンスと
思い、後方に隠してある幻影の剣を脇下から飛ばす。

だが、ボードレイは薄目をしたままダガーでその剣の中心部を砕く。俺の魔力で作られた剣が地面に粉となって落ちる。

少しは効果があるとふんでいた幻影の剣を防がれた事で、驚愕を隠せない。

ボードレイは体を捻りながら、俺の村正を自身の後方へと引き付ける。

（ヤバイ！？）

村正を手元に戻すのが間に合わない。

ボードレイのサーベルが眼前に到来する。俺は身を捻りながらどうにか回避したが、ボードレイの猛攻は止まらない。ダガーで斬り刻もつと、超高速で振り下ろされる鉄の板が、僅かに俺の髪を落とした。

村正を手元に戻すが、ボードレイは片方しかない眼でそれを見つめると、高く上げた脚で踏みつける。

ガラ空きになった俺の身体にまたもや、二刀流の流麗な剣技が舞注ぐ。

（は、速…過ぎ…る…！）

こちらも蹴りを繰り出し、隙を作ろうとするが、ステップを踏みながら避け、最早意に介さない。

「むん!!」

一際強い殺気のこもった剣閃が、俺の肩を貫こうと光る。

村正から右手を離し、背後へと送る。半身になったおかげで刃を避けられたが、その後も終わる事無く、連続攻撃が俺を決ろうとする。

「ちっ!!」

幻影の剣を一斉放射し、いったん後方へ飛んで、距離を取る。

(強っ…………。)

右目に付けてる眼帯が行動を制限すると思い、右側からの攻撃を多く振舞ってやったのだが、ボードレイは気にする事なくそれを防御しきった。

たまに、サーベルとダガーを持つ手が逆になっており、簡単に間合いを計れない。

本当に…強い……

「ふむ…」

目の前の男が殺気を緩めずに、考える様な顔をする。

「中々に奇妙な術を使う…」

幻影の剣を言っているのだろう。俺の後方に控えてある剣を見ている。

「最低五本らしいな…」それ”を出せるのは……」

観察眼も半端じゃない。戦闘中の薄目が何を意味しているのか分かった。

「うるせーよ…」

地面を思い切り蹴る。轟音を立てて、地面が大破した後、目の前にボードレイの姿が迫る。

「速いな…」

ボードレイのつぶやきを掻き消す様に、また刃のぶつけ合いが巻き起こる。

「おら！」

左手に持つ村正を、サーベルに打ち付け、空いた右拳でストレートをぶち込む。

パン！

乾いた音が鳴り響き、音速を打ち破った拳骨がボードレイの顔面目掛けて打ち込まれる。

「むう！？」

拳はボードレイの頬を掠め、すりむいた様な腫れを作り出す。

（避けられた！？）

殺す気で繰り出した拳は掠めはしたが、避けられた。そのせいで出来た致命的な隙。

目の前の強者がそれを見逃す筈がない。

下方からサーベルが刃を上に向けて、唸りをあげながら起き上がる。

ブシュ！！

サーベルは、は？と思える程鮮やかに俺の胸板を斜めに切り裂いた。

「がつ、は！！」

胴当てとセットでスライスされた俺の胸は、少しの熱と、鋼の冷酷さを感じた後、思い出したかのように赤い粘液が溢れ出す。口からも、多量の血液が吐き出され、空气中に舞う。

「うつ！！」

幻影の剣を放射し、ヨロヨロと距離を取る。打ち出した剣は一つ残らず打ち落とされる。

「さっきの拳は危なかった…」

拳で擦りむいた場所は、血がしたたっており、そこだけみると、優勢の様に見えるから不思議でならない。

俺は眼をボードレイに向けながら、ポーチの中を漁る。指に当たった瓶を取り出し、蓋を指で弾いて外すと、苦味のある薬を一気に煽る。

「イテエな…」

それにしても…奴の剣技は正しく人を超えている。少しだけ傷を浅くできたのは幸運だろう。

「あははは！！啖呵きつたわりには大した事ないじゃ無いかヤマトくん！！やっぱり、グラッツには勝てないかなあ！？」

ヒューザックの声が耳に響く。

血を大量に流した事で、ぶれる視界を安定させながら鼓膜をつく声を聞いていた。ふと、視点を合わせると、ヒューザックが何かを握りしめているのが分かった。棒状の筒の様な物で、昔見たアニメの遠隔起爆装置に酷似していた。

「ここからが、ショータイムだよぉ！！」

高らかに笑いながら、立ち上がりスイッチを押し込む。

その途端、ウィーンと現代の機械的な音が鳴り、ヒューザックの後ろの扉が一人でに開き、椅子が流れる様にスライドしながら出て

来る。

その椅子に縛り付けられていたのは、正しく、シャルの姿だった
……

第十九話 怒り（前書き）

感想などございましたら、頂けると嬉しいですm——m

第十九話 怒り

（中々……おもしれえ事してくれんじゃねーか……）

俺は手の中にある村正を強く、強く握り締める。手袋越しの、生物を殺すためのだけの鉄の塊に、今までで1番の感謝の気持ちを抱く。縛りつけられたまま、眼を閉じているシャルの端正過ぎる顔。それに突如、横から無遠慮に到来した手が触れる。頬をさすり、前髪を分ける。

「っ!？」

ふと視線をずらすと、いきなり目の前にボードレイのサーベルがあった。弧を描きながら俺の頭を両断しようとして降り注ぐ。

それを村正で力一杯弾く。ボードレイはその衝撃をいなしつつ、回転するとダガーを顔面に突き立ててくる。頭を下げ、それを回避し、起き上がる反動で切り上げる。

ガギン!!ギン!

全方向から打ち出した剣撃を防御されるのを気にせず、打ち付ける。

「動揺してるな…甘い…!!」

振り下げた村正を横から伸びてきた蹴りで弾かれる。轟音を上げる蹴りは勢い強く、彼方へ飛ばそうと村正の剣先を明後日の方向に

強制的に向けさせる。

切り込んできたダガーが俺の頬を掠める。線状に傷を作り出し、血液を噴出させる。

始まる乱舞を止めようと無理矢理に、村正を打ち付ける。

俺の村正を二対の剣で交差させながら受け止めるボードレイ。火花を散らす鏝迫り合いを演じながら、ボードレイの眼を見ていた瞳をヒューザックの方へ向けた。

その光景を見て、俺はまもなく冷静さを失いかけていた眼を見開く。

「クク……！！戦闘を見ながらというのも、中々に乙な物だねえ……」

ヒューザックの手が、シャルの肩ら辺を撫でながら下降する。

体を触る感覚に違和感を覚えたのだろう、シャルの眼が眠りから目覚め、数秒後、驚愕に染まる。

だが、ヒューザックの手は止まる事なく、スラリとしたシャルの体を這う様に蠢く。

「んっ！？」

塞がれたままのシャルの口から漏れた嗚咽が、強化された俺の耳に鮮明に届く。ヒューザックの手がシャルの胸を揉みしだいたのだ。そのまま、それを押し上げ、口を押し倒した三日月の様にして、楽しそうに笑う。

シャルは顔を真っ赤に染め、怨念を込めた眼でヒューザックを力強く睨みつける。

「ヒ、ヒヒ、イヒヒヒ！…たまらないよお、シャリウエル！…！…！…
そうだよ…この体は、あの男には勿体ない…僕だけの物だよ……」

そのまま、シャルの顎を乱暴に掴むと、口に当てられた布を外し、その唇を……

…自らの口で塞いだ。

シャルの頬を一筋の涙が、静かに伝った。

「き、貴様ああ……！！……貴様ああああ！！！！！」

罅迫り合いをしていた目の前のサーベルとダガーを力一杯上空に弾き、その横を絶叫しながら抜けようとする。

だが、走り出した俺の足は突如、降り注いだダガーにより、地面に縫い付けられる。

「ぐうおお！！！」

ボードレイが投擲した切れ味の鋭いダガーが、的確に俺の足を貫通した。

意識せず、自分の口から痛みの方が漏れ出す。足の甲に刺さった

ダガーを抜こうと、手を伸ばすが、その手でさえも、サーベルで閃のもとに射抜かれる。

「つつ!!」

そのまま死角から飛んできた足で、力一杯頭を蹴られ、地面に踏みつけられる。

「う、ぐう……。」

地面に伏せられ、顔の左半分を地面に押し付けられているせいで、物事を見るのに、右目しか機能しない。

「はぁ…今回はここまでにしようと思ってたけど…我慢出来ないなあ。」

そう言つて、派手な装飾に、赤と金という眼に痛い色のズボンを下ろし始める。下半身を覆う物が何も無くなった時、シャルが目に見えて、その表情に恐怖を宿す。

ギリギリリ!!

行き場のない感情が歯軋りをさせる。

「フン…悔しいか…?」

ボードレイが人を足蹴にしながら訪ねてくる。その眼はあきらかに落胆していて、俺に対しての失望を表してるのが分かった。

「いい事を教えてやろう…あの娘っ子を捉えたのは…この俺だ…」

ブチブチ!!

自分の中で、何かの糸が一瞬にして分断されたような気がした。頭が沸騰を通り越し、炎を宿したかの様に、かつてない程の熱を持つ。

「…殺す!! 貴様らは絶対に殺す!!」

体の底からあり得ない殺意が湧き出て止まらない。射抜かれ、真っ赤に染まる右手と、それと相對する左手で地面を掻きむしる。

ヒューザックの手が、シャルの股の辺りをゴソゴソと探る。シャルは眼を閉じたままで、顔を上気させて俯く。隠しきれない、鼻をすする音と、微かに届く呟きの様な悲鳴。

俺は今だかつてない程怒りを爆発させていた。シャルの見慣れない、少女のような悲痛な顔。あんな顔をさせたこいつらを、生かしておく訳には絶対にいかない。そう思った。

(くそ!! 動け!! 動けよおお!!)

思い通りに行かない自分の体にさえ、殺戮的な怒りを覚える。

その時、その場に似合わない声が、俺の耳に聞こえた様な気がした。

『求めるのか…?』

。

。。

時が止まった様な感覚がした。いや、感覚ではない。広大な部屋にいる人間は、1人の例外を残し、その動きを実際に止めていた。

『オレを…求めるのか…？』

頭の中に隅々まで響く、聞いた事のない声。超絶的に低く、ドス黒く、下っ腹に響く様な重量のある獣的な声。

『お前は…創られし存在だ…闇を切り裂く為だけに鍛え上げられた…ただ一つだけの業を背負った…愚かな刃物…』

…訳わかんねえ事ほざいてんじゃねーよ……

『オレは…誰にも従わない…オレを縛れる奴など存在しない…いつの時代でも…どの世界でも…たとえ神だとしても…』

お前は何なんだよ！？てめえの声なんか聴きたくねーだよ！！俺が聴きたいのは！！

『オレはお前であり…お前はオレとある…その殺意も…その歓喜も…その嘆きも…その体も…全て俺の物だ…』

俺が聴きたいのは！！

『……食らう事が許されるのはこのオレだけだ……他の誰にもやらせない……全ての存在に食らいつき…噛みちぎり…果てるまで蹂躪を続ける……殺意が湧くなら殺せばいい……その力が無いというな

ら……ただ一つの契約……」

獣の声に、熱気のような物を感じ始める。呼吸が荒く、その欲望を今すぐにでも発散したいと俺を奮い立たせる。

『お前は……オレだ……滅する事により……快楽を感じる……求めるなら……そう、たった1つの行動を起こせ……』

俺は、頭にあつたあらゆる感情が燃え上がるのを感じた……

『……神に創られし……その口で……ただ一匹の……オレを呼べ……』
『……!……!……!』

第二十話 黒獣のロンリーパーティー

時は動き出す。

嘲笑うヒューザックに、ヤマトを踏みつけ、支配しているボードレイ。その全てが、一つの絵画の様に儚く写った。

突如部屋の空気が一変する。地面に伏せられたヤマトが咆哮する。

「あああああ……………ああああああ！！！」

バチバチと音を立てる真紅の雷をその身に纏いながら、ヤマトはゆっくりとした動作で必死に起き上がろうとする。

「…何だ…！？この魔力量は……………！？」

その様子にボードレイはサーベルだけをヤマトの手から引き抜くと、その場から後ずさった。

尚もヤマトはその手で頭を抱えたまま獣の様な唸りを上げる。瞳は金色に変わり、その金を、眼から溢れ出した血の粘液が染め上げ、ギラギラと煌めく銅色を作り出す。

「ウウワオオオオオ！！！」

一際大きく、ヤマトが叫んだ。

その瞬間、体を取り巻いていた、真紅の雷が、高圧力の雷球の様に、ヤマトの頭上に集まりだす。

ヤマトの頭上ではバチバチと音を鳴らしながら、光で書かれたどでかい円状の魔法陣が出現した。それに次々と紅い歪な字が、浮き上がっていく。

それを見たボードレイが、いつもは冷静で物事を観察する様な眼を見開き、小さく声を上げる。

「……まさかな……召喚術……？……いや、違うか……！！」

珍しく動揺を示すボードレイに、ヒューザックが舐める様に喚き立つ。

「ねえ、グラツツくうん。もういいからさあ。そのガキをとつと殺してよお？メインディッシュはシャリウエルの絶望顔なんだからさあ。」

ヒューザックの苛々としている様な口調が、シャルの悔しさを倍増させる。そんなシャリウエルを知ってか、ボードレイが頬に汗を垂らしながら言った。

「……………どうやら、そう簡単にはいかなかったらしい……」

その時、ヤマトの頭上に浮かんだ不気味な陣魔法から、1つの生々しい黒色の肌と体毛を持つ獣が、もがきながら顔を出した。捻れた二本の角が、真っ正面に向かって突き出されており、耳はピンと立ち、何処か狼のような雰囲気も漂わせる。

口が銀色の鎖の様な物でグルグル巻きにされており、その間から唾液がとめどなく溢れている。眼は現在のヤマトと同じ、銅を丸く

削って埋め込んだ様な血色のワインレッド。

俯いたままのヤマトの上空から現れたその首は、開くのを遮っているその鎖をものもしない様に、口を開く事でその束縛を簡単に解く。

バキン！！

遮る鎖がなくなった事で自由になったその口で何をするのかと思いきや。

バクン！！

その獣はいきなりヤマトを飲み込んだ。舌で口周りを舐め上げ、ゲップをする様に熱の塊を吹き出す。

「な、何だい、あれはあ！？」

ヒューザックが今更恐怖を感じた表情をする。

「ヤ…ヤマト…？」

シャリウエルはヤマトがいきなり、獣にその体を飲み込まれた事を信じられない、という風な顔をした。

「グルルル……ギャロロロオオン！！」

猛々しい咆哮が、その場にいる全ての人間の精神を恐怖に叩き落とす。

業鉄の暗殺者とまで言われた、ボードレイでさえ、口を半開きにしたまま、足を僅かに震わせている。

一回の咆哮の後、獣が首を振りながら、その体を魔方陣から出そうともがく。

「グルルルロウオオ……」

その絶対的な、力と恐怖の塊に、その場にいた人間は誰1人として動く事が出来なかった。次第に露わになる獣の胴体から四肢に至る、その姿。

黒い光沢を放つ体毛に覆われた、全身の内側から張り詰める筋肉。四肢に生える研ぎ澄まされた爪。獰猛な雰囲気漂わせる鋭牙。

魔力は、魔法を使わないにしろ保有量の多いボードレイの、二百人分に相当する程だ。それを見て、ボードレイは一言声を漏らす。

「……ありえん……」

ただでさえ多かった蓄積魔力は、そのまま膨大に膨れ上がり、体から溢れ出しながら、獣を中心に嵐を巻き起こす。口からはエネルギーが溢れているのか、熱気がモクモクと滲み出していた。

「ヒ、ヒイイイ！！ヒイイ！！」

その魔力量と魔力濃度、圧倒的殺意にヒューザックも気付いたのか、地面に打ち捨てられているズボンから、筒を取り出す。

筒についているボタンを押すと、部屋の両脇の大扉から、武装し

た兵士が流れ込んでくる。

「殺せえ！！そいつを殺した奴には、領地の一角を分け与えてやる！殺せえ！！」

ヒューザックが喚く。

「なんだこいつ…？」 「魔物か？」 「動かないぞ？」

兵士達も、その獣の姿に各々の恐怖を覚える。

「早く殺せえ！！」

そのヒューザックの命令に、始めから逆らう事など出来るはずがない兵士達は、雄叫びを上げながら獣に向かって自らの武器を突き立てようと、前進する。

そして、事は起きた。

ビシャ！！

「は？」

その場にいる人々は、皆一様に保けたような顔をする。大した事ではない。獣が、自身の極太の剛腕を地面に水平に薙ぎ払っただけだ。

それだけで、数十人いた兵士の内、十人程の体が、一瞬にして、ミンチへと変えられた。

誰もその出来事に、驚愕する事さえ出来なかった。それ程一瞬の出来事だった。

地面には横に一直線上の血と臓物の列が出来上がり、それが一撃の元に葬られた、兵士達の姿だとは誰も思わない。

「グルルルロロオウ……」

微動だにしない獣に動いたのは、暗殺者ボードレイだ。地面を蹴りながら、背後へと回り込み、自身のサーベルで獣の足に斬り込む。

パキン！！

いや、斬り込めなかった。ボードレイ自慢のサーベルはその中心から、儚く真つ二つに折れた。

「！？」

獣の剛腕が超高速で振り回される。屋敷の床に、ミミズのようなクレーターがいくつも出来上がり、その度に轟音が耳をつく。

「グルルルウオオオン……」

それに対して、ステップを踏みながら華麗に避け、窓枠へと降り立つボードレイ。

「依頼を放棄したのはクリヤ・ミズキ以来か……」

獣の攻撃を掠め、血塗れに成ったボロボロの手を抑えながら、ボードレイは窓口から飛び出して行った。

「グラツツウ！！貴様あ！！依頼はどうしたあ！！」

ボードレイが窓口から逃げ出した事に、ヒューザックが叫ぶ。

「グルルル……」

何処か機械チックな鳴き声を上げながら、その獣が動いた。

「「う、うわあああ！！」」

部屋に兵士達の悲鳴が大音量で木霊する。兵士達は、半ば狂乱状態となつて一斉に黒い獣に向かって武器を振りかぶる。

「げふうう！！？」

1人の兵士が、その華奢な体を獣に掴まれる。口から血液を吐きながら、か細い悲鳴を上げる。

「ひいあああ、いびや！！？」

そして、その体を指全体が覆い、ついにはその兵士の体は手の中に飲み込まれる。最早悲鳴は欠片も聞こえなかった。

パキパキ！！

その代わりに、死を伝えるメッセージとして、獣の暴力的な程筋肉質な指の間から、大量の血がドロドロと流れ出てくる。

まるでメニューについてるレモンを手で絞った様なビジョン。誰

もが肩を震わせ、その殺戮劇場を眺めていた。

一瞬にして、兵士達全員に恐怖が伝染する。

その間にも兵士がドンドンと殺されていく。頭を潰された人間。壁に体をめり込ませた姿。シャンデリアに引っかかった誰かの腕。

最早、誰も止められなかった。

。 。 。

何だこれ？

俺は今、人間を殺している。1人残らず殲滅するように死を振りまいている。

不思議だ……全然悲しくない……いや……むしろ……この感覚は……？

俺は自分の口が、笑っている、という事を認識した。

楽しいぞ……何でだ……楽し過ぎるだろ……こんなに興奮するのは初めてだ……たまらない……もっともっともっともっと殺したい……。

俺は兵士を摘み上げると、口の中に放り込む。顎を動かすと、パキパキと骨が折れる音が耳をつく。

また顎を動かすと、プチプチという破裂音を響かせる何かの歯に引っかかった様な感じがした。何だ？と思ったが、多分人間の腸

だろう。

これは…悪くないな……

そのまま、兵士達を思い思いに蹂躪する。胸を指で貫き、首を掴んで捻った。腕を引っ抜き、膝を潰す。

その度に、俺の耳に届く悲鳴が、俺を益々おかしくさせる。胴体を千切り、その紅いジュースを飲み干し、中まで舐め尽くす。

ああ…これが人間ノ味力……………ン？

俺の眼に1人の男の姿が映った。下半身を覆う物が何も無く、無様に地面にのうち回りながら絶叫してる。

ああ……アノ醜い顔ハ知ってル……俺が1番殺したガツてる人間だ………アイツハイテハいけナイ……殺セ……ソノ命ヲ散ラセ……オレには出来ル……

オレが動き出すと、悲鳴を上げながら、四つん這いになって、裏口へと向かおうとするヒューザック。

なぜ逃ゲル……？

その足を、オレは自身の足で思いつき踏んづけた。

「グギイギヤイ！！？」

足を外すとペリペリと音がなり、潰れた後の足が露わになる。まるで、中身を抜いたウィンナーだった。血で真っ赤に染まり、皮が

ダルンダルンになっている。

「アアアアウウアア……」

その足を引きずったまま、出口へ向かおうとする。

その頭をオレは摘み上げると、こちらへと振り向かせる。

「ヒイイイ！！許ひて…ゆるひてくらひゃい……」

何ダ？詰マラナイ……

腕をもぐ。まるで、人形遊びをする様に。

「アギイイイ！！？」

悲鳴を上げ、よだれを垂らしながら失神した。大量に失禁しており、鼻を突くにおいが充満している。

興味がなくなったので、その頭を噛みちぎる。ぶちぶちと肉の繊維が千切れる音になり、オレの口の中にいっぱいに広がるミソの味。

不味イナ…？…モット美味イ奴ハ…。

そんなオレの眼に、澄んだ水色が映る。

椅子に巻きつけられており、とても整った顔をしている。

何ダ…？コイツハ…？コノ眼……なぜオレヲ恐レナイ…？

全てを知った上で包み込む様な顔。

コイツハイテハイケナイ！！コイツヲコロサナケレバ…俺ガオレジ
ヤナクナル……

「グルルル…グウオアアウウオ！！」

椅子につながれたままのその体を、掴む。

……………ソノ眼デ見ルナ……………食ラウ……………食ラッテヤル……………！！

そして、オレは大口を開けて、体内に吸収するべく、その体を口
の上に持つていく。

「ヤマト……………」

ズキ！！！！

オレの頭を感じた事のない鈍痛が襲う。最深部まで、メラメラと
焼かれた様な感覚。

コイツハ殺シテはいけナイ！！コノ存在がいなければ、俺は自分
ヲ保てない！！

名前は何ダった！？この女の名前！！

思い出せ！！思い出せ！！思い出せ！！

。 。 。

突然獣が頭を押さえ、蹲る。

「グウオオオオ！！！」

バラバラと音を立てながら、獣の外殻が崩れ落ちていく。大出力の魔力が、段々と静まっていき、部屋中を支配していた殺意が消え失せる。

「ウウウオオオオアオオ！」

ガラガラと地面に落ちた外殻は砂の様に消え失せ、地面に染み込んでいく。

その中から、姿を表したのは……

「ぐ、ううう……」

血塗れのヤマトの姿だった……

「シ……ハアハア……」

何時の間にか、ほとんど解けていた縄を放り捨て、シャルは駆け

出していた。

「シャ……ル……」

倒れ込むヤマトをそつと抱きとめる。

自分の服にもヤマトの血がつくが、気にしない。

そして、気絶する前に見えたヤマトの眼の色は………そのまま金を埋め込んだ様な………眩いばかりの金色こんじきだった。

あの獣は何だったのだろうか？もしかして夢だったのかもしれない………いや、夢でいいのではないだろうか？

だけどヤマトが無事だったという事だけは………決して、夢にはしたくなかった。

第二十話 黒獣のロンリーパーティ（後書き）

長くなりました…。文才もないですし…読者さんには、うわ…、
、（）ってなるかもしれませんけど、よかったら感想下さいm
| |) m

第二十一話 獣の檻

（何だ……こ…こは？）

俺は今、黒を敷き詰めた様な空間に立っている。真っ黒。360度、四方八方何処もかしこも真っ黒だ。まるで、眼を閉じた後の闇の世界。

（暗い…何も見えない…？）

オロオロしていると、突然目の前に光が灯った。左右に別れたまま立った口ウソクが、進む道を迷わない様に、平行して真正面に続いている。

間の道は、どこか階段のようで、段差をつけて少しずつ奥へ入って行く造形になっている。

俺は躊躇しながらも、その階段を降りて行く。一步一步進む毎に、確かに俺の体は闇の奥深くに沈んで行った。

（これは…？）

何時間ほど階段を降りただろうか？いや、数分かもしれないし、はたまた数秒かもしれない。

俺の目の前に、血にまみれて錆び付いたドアが姿を表した。ドアの前、現在の俺の足下には、何かのチェーンや、鍵の様な物が、碎けて落ちていた。

俺は行こうか、行くまいか、迷ったが、結局そのドアを通り、その部屋に入る事にした。

手で触れると、微かにサビが指に食い込み、多少の痛みを伴う。取っ手を掴み、ゆっくりと回す。ギギギつ、と長い間開けられなかったドアの様な、年季を感じさせる音が鳴り響く。

ドアを開ききり、その中に体を滑り込ませる。

「ここは…」

それは、ただ広いだけの空間。部屋の天井や、壁には細部に当たるまで、小汚いシミがついており、紅いペンキの様なものが無造作に塗られていた。

不快なビジョンに肩を竦めている時だ。

「グルルルルウウ……」

不意に、獰猛な何かを感じた。

部屋の奥だ。光が一寸も通らない、本当の最深部。

「何だ……お前……？」

俺が見たのは、爛々と光る血色の眼を瞬かせた、一匹の獣だった。捻れた二本の角は途轍もない鋭さを醸し出しており、中々放置するには危なげだ。

馬ほどの大きさの狼。黒い体毛を逆立てグルグルと唸っている。

その大きな体で地面に横たわり、俺の方を伺っている。

「何ダ、ダト……？才前ガ1番良く知ッテル筈ダ……」

目の前の獣は、口を歪ませながら言う。

「俺が知ってる？お前を？……じゃあ……ここは何処だ？」

このまるで深夜の廃墟の一角の様な、一筋の光明も刺さぬ闇の世界。いるだけで、体が震え、口の中の水分が無くなる。

「ソレモ……才前ハ知ッテル……」

こんな部屋を？冗談じゃない。俺はオカルトなど微塵も興味ないし、ホラーなんて、見てるだけで、CGと、特殊メイクのオンパレードが丸わかりだ。

こんな場所、俺が知ってるはずがない。

「グルロロロオオ……才前ヲ呼ンダノハ理由ガアル……」

俺を呼んだ？この獣が？

「理由って……？」

俺が聞くと、四足歩行で立ち上がる黒色の獣。

「言ッテオク事ガアル……才前ハ……オレダ……ソノ眼ガ……オレヲ感ジサセル……今ハマダ……コノ部屋デ……血ヲ待ッテイル……」

血？誰の？何で？

「存在ヲ殺セ……殺シテ殺シテ……タダノ殺戮ノ塊ト成リ果テロ……。
…ソシテ……オレハ…コノ部屋カラ…滲ミ出ル……。…覺エテオケ…
…才前ハ……殺スタメダケノ存在ダ……。」

突如獣が、一瞬にして巨大になり、黒い塊となって俺の視界を覆った。

。 。 。

「うわああー!!」

俺は飛び起きる。そして、それと同時に驚愕する。俺がナグマに着いてから、毎日寝る為に使っていたベッドだ。

「ハアハア……。」

自分が、物凄く寝汗をかいているのが分かった。シャツがビショビショになり、肌に吸い付いて、冷たさを感じさせる。

「夢……？」

だけど……どこからが……？……確か……俺は屋敷にいたはず……そう
だ！！

シャルを助けるためにヒューザックの所に向かったんだ。

俺はベッドから跳ね起きる。かかっている布団を剥ぎ、置いてあるスリッパを履く。

そして、何故か気怠く強力に痛む全身を引きずりながら、俺はドアの外に向かおうと歩き出す。

コンコン。

ノックの音が鳴り、ドアが一人でに開く。返事聞かないなら何でノックしたんだ？と疑問に思ったが、この際は捨て置く。

動いたドアの向こう側から入ってきたのは、俺が今一番顔を見たかった人物だ。

「シャル？」

水色の髪を束ね、曇った表情のシャルが部屋に入ってきた。手には、器の様な物にタオルを持っており、何だか家庭的な感じがした。

俺が名前を呼ぶと、驚愕に眼を見開き、その後、顔を俯かせる。

「無事だったのか…？」

俺が、ひとまず安心してしていると、シャルが怒気をはらんだ声で言った。

「無事だったのか？じゃないわよ…。どれ程！！どれ程心配したと思っ…！！…！！うっ…。」

何故か分からないけどシャルが唐突に泣き始める。地面に力無くへたれこんで、手で顔を覆い隠す。

（何だ…この状況…）

泣き崩れるシャルに、状況が全く読めない俺。

「いつっ！…？」

不意に俺の眼を、村正の波動など話にならない程の激痛が襲撃する。

俺はヨロヨロと体を揺らし、壁に音を立てながら手をつく。

「ヤマト…！」

俺の脇の間に自分の体を入れながら、シャルが支えてくれる。

何だ？この激痛は…やばい…超痛い…

「悪いシャル…ありがとな…」

ベッドまで運んでくれたシャルに精一杯の礼をする。

「別にいいわ…それより、凄い汗かいてるじゃない…」

先程気づいたばかりだ。少し、気恥ずかしさを覚えながら、遠慮気味に俺は頷く。

すると、シャルがいきなり、躊躇なく俺のシャツを脱がし始めた。

何故!?

「早く脱いで…体拭かなきゃ。」

シャルはなんと、俺の体を拭いてくれると言っているのだ。だが、圧倒的にコミュニケーション能力が欠損している俺は、大慌てで断ろうとする。

「いや、大丈夫だから!!汗拭くぐらい、自分でやるって!!」

そう言ったが、逆に大丈夫、遠慮しないで、と言われ体に力が入らないのも関係して、アツサリと脱がされてしまった。

「結構筋肉質ね……」

背中を拭きながらシャルが感心した様な口調で言った。

俺は、ああ、と少し赤くなる頬をごまかす様に返事をし、現在の状況について思案していた。

「なあ、シャル…何で俺は、ここに寝てたんだ?」

俺が言つと、一区切りなのか、タオルを水に浸す音が、俺の耳に届く。

「助けてもらったの。」

え?理由になつてくないか…?

「誰に…？てか、何から？」

俺がそう返すと、少しの間を開けて、部屋に見た事のある一人の女性が入ってきた。

「お久しぶりです。ヤマトさん。」

栗色の髪を惜しげなくなびかせるメイドさん。

「エイス…？」

第二十二話 エイスがいる理由

「どうしてここにいるんだ？」

俺は目の前のメイドさんに尋ねる。と言っても、今はメイドの格好ではなく、チェックのスカートの様な物を履き、上も普通の桃色のシャツを着ている。

「それを話すには、少し遠回りをしなければなりません。」

エイスはそう前置きをすると、滑らかに話し始める。俺が座っているベッドの前に椅子が二つ並び、目の前にエイス、もう一つの方にシャルが腰掛けている。

「まず、私は旦那様からのお預かり物を、ある方に届けようと、ベングルフアムの王都に向かいました。…それと同任務で、お二人の様子を確認する様に言われたのです。ですが、私が到着した頃には王都に滞在していると思われたお二人は既におりませんでした。」

「既におりませんでしたって…それどうやって知ったんだ？」

単純な興味を貼り付け、エイスに提示する。

「……………情報屋です」

怪しい……………てか、情報屋便利だな……………色んな意味で……………

「向かった先も調べて、そのままナグマへと向かおうと思ひまして、馬車を使ったのですが、着いた頃には、東北街にも、お二人の姿は

ないらしく、そのまま情報屋を経由しながら詮索しました。」

情報屋……

「なるほどな……」

「そして、ようやく王都に到着し、心身ともに疲れ果て、お二人様の行方を探したのですが、腕のいい情報屋が、ヤマトさんが、レリエンス家の別領地に向かったと言っじゃないですか。」

腕のいい情報屋って…俺が使った場所か……あの爺さん。何でも売るな…てか、俺がヒューザックのどこに向かったって何で知ってるんだよ…。

「そして、様子を見ようとレリエンス家に侵入したわけです。」

簡単に言っな？まあ、エイスは学校に行く事の無かったシャルに魔法について、教えていた家庭教師の様な物だったらしいから、それなりに使えるんだろぅが…

「そこで、ようやくヒューザック宅に到着したのですが、私が見たのは、泣き喚いてるお嬢様と…」

エイスが言うと、シャルが顔を赤くして俯いてしまう。

「肉片の残骸でした。」

は？

「そこには人間の遺体が数多くありました。その全てが、何か…圧

倒的な力で粉碎された様な悲惨な物でした……」

何を言ってるんだ…？

「それから、衛兵が来るのを知ってた私は、お嬢様とヤマトさんを連れて、王都へと戻ってきたのですが…ヤマトさん…いたい…あの場所で…何があったんですか？」

……あの場所って…ヒューザックの屋敷だよな…俺に言われても…

「何か…よく、覚えてないんだ……」

「ではその眼の色は何ですか？」

エイスが目線を鋭くして、俺に問いかける。

それにしても眼の色とは何の事だろう？

「眼の色って…？」

俺はエイスの観察する様な目線に、何となく目を逸らしてしまう。

てか、そんな見んな…慣れてないんだ。

俺が訳がわからない、と言った風な感じで疑問を返すと、エイスが自分の目尻を指差して説明し始める。

「その、金色の瞳の事です…前に会った時は黒色でしたよね？」

金色？何が？眼が？

「映し出すは真実の複写…水を介して我、双晶に目さん…水鏡。^{アクアミラー}」

いきなり詠唱し始めた事に驚いたが、どうやら鏡の魔法らしい。水の輪が出現し、その輪の中で、周りを反射している。

「失礼…」

そう言つて、エイスに接近し、彼女側から鏡を見ると、そこには”見慣れた”俺の顔があつた。

ある一点を除いて…

「ええっ…と…何で金色？」

そう。エイスが言った通り、俺の両目は鮮やかな金色へと変色していた。

長い黒の前髪から、その金は突出して目立ち、まるで人間ではない、別の生き物の様な風貌に見えた。

「それを聞いているのですが……はあ、どうやら”それ”も分からないみたいです…」

エイスが手を払って魔法を打ち消す。かなりの水量だと思ったのに、水は一滴も地面に落ちる事なく、空気へと帰った。

「お嬢様も覚えてないみたいですし…」

俺はその言葉に、何気なくシャルを見た。シャルはカップを片手

に、険しい表情でティータイムを満喫している。脚を組み、中々に偉そうだ。

「まあ、いいです。では、とりあえず経緯だけでも伺ってよろしいですか？」

俺はシャルがヒューザックに攫われ、それを助けに行った話を話した。ボードレイの事と、ブラッドネイルの事も。

「…では、グラッツ・ボードレイと、ヒューザック・レリエンスはあそこから逃亡した、と考えてまず、間違いないですね…」

エイスが、可愛く首を傾げながら結論を導き出す。その姿に、俺は思っていた疑問を打ち明けた。

「なあ、エイス。」

「はい？」

「俺たちの様子を確認、っていうのと別に、シャルの親父さんからの預かり物を、”ある人物”に渡すって言うてたよな？」

エイスの眉が少し動いた様な気がした。

「ええ、それが？」

あくまで冷静な口調で返すエイスだが、俺の金色の眼には何だか焦っている様に見えた。

「ある人物って誰だ？」

俺は自然に問いかける。

「……すいませんが、それは言えません。旦那様に外部には、決して漏らすな、とのお言葉を頂いておりますので……」

エイスが申し訳なさそうな顔で、ぺこりと頭を下げる。撫でそうになったが、やったら、痛い事になるだろうから自制した。

それにしても……俺はヒューザックの屋敷で何をした？この体が覚えてるのは、圧倒的な怒りの余韻……

ベッドに座る俺は、何時の間にか手に汗をかいていた。やせ我慢しているが、眼の激痛もさつきから繰り返されている。

これは、もしかしたら……確かに俺の中に存在する、あの”獣”が、俺の光を奪おうと、ひたすら、あの部屋のドアに齧りついているのかもしれない……

少し、眼を抑えると、痛みが止んだ。俺はそれにふく、と息を吐くと、掛け布団を纏めはじめた。

その時の俺は、全く気づいてなどいなかった。いや、気づけるはずがなかった。だが、今だから言える確かな真実がある。

この時、歯車はゆっくりと静かに、だが確かに、動き出していたんだ……

第二十三話 黒と青の口づけ

あれからエイスは少し他愛ない話をした後、ベンガルファイムへと馬車で帰還して行った。シャルの家に帰るのに、まだ用事が残っているらしいが、そこは聞かずに送り出した。

それにしても結局ヒューザックはどうしたのだろうか？ボードレイも……なぜ、あんなに沸騰する程怒っていた俺の頭はこんなに澄んでいるのだろうか。

いや…理由は出ていた。シャルがここにいるからだ。俺の近くに俺の手が届く範囲に。それだけでもう何もいらなないと思った。

「シャル…あのさ…大丈夫か…？」

俺は書物を片手に、知性を高めているシャルに、少し遠慮がちに尋ねる。ヒューザック家で最後に見たのは、シャルが傷つけられる手前のビジョンだった。

「大丈夫じゃないわ……あんな男にファーストキス奪われて……」

そう言いながら、両手で挟み込むように本を閉じる。パタンとい音がなり響き、静かな部屋で反響する。

唇を奪われた事に言うのは、それ以降は何も無かったという証明に他ならない。

よかった、と思う心と同時に言い様もない、喪失感に襲われる。脱力し、何もかもから逃げ出したくなる。

「俺は……」

だが、俯いたシャルに俺は何も言えなかった。それはそうだと思う。あんな強姦紛いの事されて…傷ついてない訳がなかった。

あの男を今すぐ殴りつけ、土下座をさせて、シャルの前に突き出したい衝動が生まれる。頭の奥で獣が、息荒く俺の殺意を感じ取り、一鳴きした気がした。

「なーんてね。」

は？

俺は顔をだらしなく呆けさせ、シャルの顔を見る。疑問がグルグルと脳内を駆け巡り、答えを出そうと四苦八苦する。

「別にいいわよ、キスぐらい。ヒューザックには腹が立つけど、別に大丈夫。」

その一転して明るい口調に俺は胸を撫で下ろした。同時に、目の前の女性の強さに感服した。

「俺に出来る事あったら言えよ?」

それはそういう場で使われる常套句だった。でも、最大限の優しさを込めて目の前の女性に贈る。シャルの為に役立ちたい心が俺の体を支配していた。

「あ、じゃあ早速いいかしら?」

シャルが閃いた様に手を鳴らす。椅子から立ち上がり、上から俺を見る。その様子に苦笑しながら応えた。

「おう。」

シャルは飲み干したカップをトレイに乗せると、髪を弄りながら言う。青色の前髪がさつ、と分けられ、小さく光を反射する。

「ちよつと眼閉じてくれるかしら？」

俺は疑問に思いながらも、言われた通りに金色を瞼の裏側に隠した。暗い世界に一瞬だけ、言いようもない不安感を感じるが、気にせずに、願い事を待つ。

どのくらい時間が経っただろうか、何をしているのだろう、と思いい、眼を開けてしまいそうになった時だ。

俺の唇に何か、暖かい物が触れた。僅かに水気があり、とても柔らかい。

何だ？と思いい眼を開けると、あつたのはシャルの綺麗な顔だった。瞳を閉じて、顔を上気させ、俺の唇に自らのそれを押し付けていた。

驚愕していると、僅かに震えながら俺から離れていくシャルの顔。

俺が見ていると、シャルは静かに瞼を開き、俺の眼を見ながら言った…

「口直し…ゴメンね？」

シャルは顔を真っ赤にしながら、椅子に座り直すと、自分の手で顔を覆う。

俺はその姿にどうしようもない感情に突き動かされ、すっ、と立ち上がるとシャルが座る椅子に近づいていく。

シャルはまだ羞恥に顔を隠しており、俺が接近しているのに気付いてない様だった。

俺はそのまま、伸ばした手で、シャルの手を掴み、退けさせ、顔を見る。

驚きながらも、俺の眼を真っ直ぐに見つめる青色の視線を感じながら、俺は掴んでいた手を離し、シャルの後頭部へと送る。

優しく背中をさすりながら、今度は俺の意思で、優しくシャルの唇を奪った。

シャルは少し眼を見開いたが、すぐに大人しくなり、そのまま俺の背中へと手を回す。

シャルのか細い体をしっかりと支え、唇を離すと、一歳年上の少女の表情を真正面から見た。

紅潮した顔はどこか、弱々しく、眼はトロンとしており、少し力が抜けているのが、目に見えてわかった…

それを見て、胸をドクン、と高鳴らせると、二度と離さない様、真っ白な肌を露出させるシャルの体を強く抱きとめ、俺はもう一度

口づけをした…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8917v/>

異世界英雄物語

2012年1月12日23時36分発行